388.12-022ウ
1200500741215
8.12
22

柳田國男編

全國昔話記錄

紫波郡昔話集

小笠原謙吉

三省堂刊

始

388.12
O.22

柳田國男編　全國昔話記錄　四

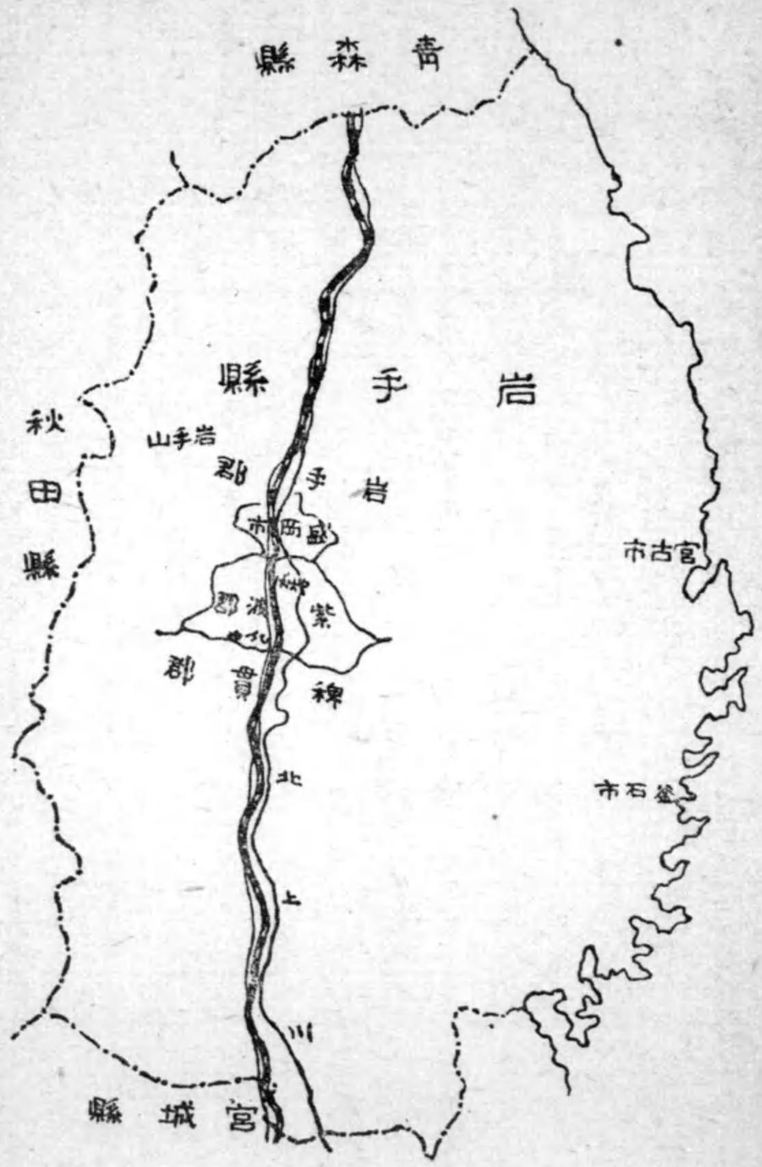
紫波郡昔話集

小笠原謙吉

東京・大阪　三省堂

昭和十六・十二・廿六
帝國圖書館

岩手縣より見る昔話の紫波郡



943
129

紫波郡昔話集序

筆者のおばあ様が、又その祖母の話を聽いて覺えて居たのを、わざ〳〵孫の爲にかたつて筆記させたといふことは、岩手縣の農村ででも無いときかれぬやうな古風な話で、日本の民間說話の歷史を知らうとしてゐるものには、まことに樂しみの多い史料であつた。故佐々木喜善君が今から二十何年前に、是を『紫波郡昔話』として爐邊叢書の中へ入れた時にも、此點ははつきりと述べて居るのであるが、どういふわけでか同君は、二三別の人のした話を其中にまじへ、又僅かながら筆記とちがふことを書き込んで居るさうである。それを小笠原氏がいやがつて居られるといふことを、何度か岩手の人から私は聽いて氣に病んで居た。好い機會も無くて歲月が過ぎて居たが、今度三省堂から全國昔話記錄を續刊する計畫が成り立つたので、早速私は原筆者に手紙を出し、分量は是くらゐにして、其話を思ひ通りに竝べて御覽なさいと言つてやつたところ、自分は不平を人に洩らした記憶は無いが、もう一度整理して見たいとちやうど思つて居た際だから、出してもらへるなら有難いといふ返事で、それから二三回延引のことわりが來た後に、いよ〳〵此原稿が私の手に屆いたのは、本年の五月十一日付

であり、それから五日後の十六日發の葉書も、まだ私の机の上に置いてある。その小笠原君が同じ月二十一日の早朝に、腦溢血で突然亡くなられたのである。

この書を印刷に付するに際し、是非とも言つて置きたいことは、是が原稿には紫波郡昔話選集と題せられて居たことである。筆者は我々の計畫に應ずる爲に、その記憶の中から先づ書きやすい是だけを整頓して、出したものと思はれる。前の『紫波郡昔話』と比べても、此方が少しく數を減じ、且つ幾つかの前には無かつたものを加へてある。事によるとまだ若干の手控へを遺して居られるのかも知れぬ。既に文章になつて居るのなら其まゝを、まだ書いて無いやうなら題目だけなりと、他日私版としてでも世に出して見たいと思ふ。東北各地の昔話は佐々木君の老媼夜譚や聽耳草紙、即ち上閉伊郡の採集を始めとし、次々整理して置きたいものがまだ幾つもあるが、各郡各家に傳はつて居たものは、興味ある叙述のちがひはあつても、話の題目はおほむね共通して居る。それ故に同じ一人の話者の記憶に、數多く保存せられて居たといふものが、たとへ破片であり殘缺であつても尊いのである。

さういふ中には最近の一世紀間に、何かの理由があつて消え去つたものが、曾ての存在だけを痕づけさせてくれるかも知れぬからである。例へば喜多村氏の嬉遊笑覽の中に、江戸にも古く存したと記して居る蟹と老爺との話の如きも、東北には今三箇處ほどに毀れて殘つて居るので、是が古い頃の人望ある一話であつたことだけはわかる。或は又藤原相之助翁が、故郷の生保内にあつたと報せられた

錦長者の話なども、今ある瓜子姫子よりは形が古く、粗野な部分もあるが結末は美しい。是などは山母と山梨の實の話として、又佐々木君の採集中にも其片影を覗かせて居る。小笠原氏が後まはしにせられた昔話の中には、或はこの類のまだ我々の知らぬものが、少なくとも曾てあつたといふことを語るものがあるのではないかと思ふ。

私は大正十三年の始め頃から、書面では折々小笠原氏と交通して居た。岩手縣に旅行したことも五度や六度では無かつたが、いつかは逢つて語る折が有ることゝ思つて居たばかりで、終に一ぺんも話を聽くこと無しに永別してしまつた。世の中は既に改まつて來たから、もう此人のやうな靜かな落着いた、昔の東北人らしい風格の人を、見つけて友だちになることは私には出來ないかも知れぬ。それを考へると今少しこちらから進み近づいて、この舊家の傳承を尋ねて置かなかつたことが殘念である。せめては後に留まつて居る日記手記の類を、散佚させず又誰か後の人に利用させることを、嗣子秀夫君に向つて希望せざるを得ない。

昭和十七年九月

柳田國男

目次

一　瓜子姫こ……一
二　黄金の生る吹花……四
三　古河の幸太……五
四　二歳胡麻に三歳胡麻……七
五　福の神よげない……八
六　和尚様しやあ……一〇
七　長薯十七本……一二
八　化物寺……一四
九　若ぎのほうぎ……一六
一〇　鼻利ぎ……一八
一一　陣岡左衛門に馬場松公……二一

一二　糠ん福に米ん福……二三
一三　豆こ一つ……二六
一四　右衞門太郎と左衞門太郎……二八
一五　打たん太鼓に鳴る太鼓……三一
一六　二束四束……三四
一七　雁汁……三六
一八　山婆……四〇
一九　化げ茶釜……四二
二〇　たご馬……四四
二一　伊勢詣り子……四五
二二　べどこ長者……四七
二三　桃賣殿様……四九
二四　播磨の國糸長庄司……五一
二五　伊勢詣り猫……五三
二六　もんぢやの吉……五五

二七　仙北町のとんてぎ……五七
二八　姥皮……六〇
二九　猿の夜盗……六三
三〇　阿野様……六五
三一　お吉・お玉……六八
三二　あぐな千繩……七一
三三　脛子たんぱこ……七五
三四　おんちこへんちこ……七八
三五　左様の根……八〇
三六　山々の屁ぴりおんぢ……八一
三七　娘さ通ふた蛇……八三
三八　剃刀こ……八四
三九　川獺と狐……八五
四〇　牛方と山婆……八七
四一　翁捨山……八九

四二　ちよいわこら……九〇
四三　屁ぴり嫁子……九一
四四　物食はぬ女房……九四
四五　ちよへん子ちやはん子……九六
四六　玉一譚……一〇〇
四七　酒二斗一升……一〇三
四八　大沼のぬし……一〇五
四九　生附だ黄金……一〇六
五〇　爺ナの畠打ぢ……一〇七
五一　頭さ柿の木……一〇九
五二　夕顔の舅殿……一一〇
五三　猿の嫁子……一一一
五四　長い名前の子供……一一三
五五　爺ナのこばかま……一一四
五六　今朝のしばれ……一一五

五七　毒梨子……一一六
五八　頭さ枕……一一七
五九　七人地藏様……一一九
六〇　ぷつぷとあぇ燗……一二〇
六一　三人の聟……一二一
六二　朱膳朱椀……一二三
六三　おけあえもんこ……一二四
六四　餅焼ぎ……一二五
六五　てんぽ競べ……一二六
六六　擂粉木……一二七
六七　夕顔長者……一二八
六八　せつとこ……一三〇
六九　狐のうば子……一三一
七〇　桃の子太郎さん……一三二
七一　かちかち山……一三三

七二　舌切り雀の宿……一三五
七三　古屋のムル……一三七
七四　隠れ蓑に隠れ笠……一三八
七五　柱隠し……一四〇
七六　怠け者……一四一
七七　女房を出す戸口……一四三
七八　馬鹿息子……一四四
七九　話賣り……一四六
後記
一　昔話集の事……一四九
二　昔話の諸註釋……一五三
三　郡と祖母の話……一六三

一　瓜子姫こ

昔あつたぢもな。爺ナは山さ柴刈にえ(行)ぎ、婆ナは川さ洗物しにえぐと、そこさ瓜こはつんぶりつんぶりと流れて來たがら、それを拾て爺ナさかせ(食)べと思て、戸棚さ入れて置ぐと、爺ナは山から來たので、爺ナしく〳〵、戸棚さ瓜こを入て置だがら、く(食)てござへとせつ(言)たらば、爺ナは戸棚さえてあげて見るど、瓜こがらオナゴ(女)坊子は生れて、ホホギア〳〵と泣てゐた。そこで瓜こがら生れだがら、瓜子姫ことつけて、大事にして育でだ。瓜子姫こばおがると、爺ナと婆ナは瓜子姫こさやどと(留守)させで、山さホド(土芋)こを掘さえぐとて、瓜子姫こ〳〵、誰は來ても戸をあげなへで、機を織てろ(居)とえづげでえた。そこで瓜子姫こは戸をしめ(閉)で、

キツコパタン、クダナイ。
キツコパタン、クダナイ。

と機を織てると、山婆は來て、瓜子姫こ〳〵、戸を開けろであとせう(言)と、瓜子姫こはおらくらえる(叱)がら、あげなましとせつた。すると山婆は、瓜この這入る位あげろであとせうから、いにえ

(否)くらえるがらあけなましとせたども、爪この這入る位あげろとせうので、仕方なく爪この這入る位あげるど、今度は指この這入る位あげろであとせうがら、いにえくらえるがらあげなましとせつたども、指この這入る位あげろとせうので、指この這入る位あげるど、山婆は戸をがらりとあげで中さ這入り、瓜子姫こ〳〵、うなほに小豆はないが、どせうがら、瓜子姫こは、小豆の無い所はあるべましかとせつて、小豆を出すと、今度は瓜子姫こ〳〵、うなほに鍋は無いが、どせうがら、瓜子姫こは、鍋の無い所はあるべましかとて、鍋を出したら、山婆は瓜子姫こ〳〵、うなほに庖丁は無いが、どせうから、庖丁の無い所はあるべましかとて、庖丁を出すと、サイバン(俎)は無いが、どせうので、サイバンの無い所はあるべましかとせつて、サイバンを出した。そしたら瓜子姫こに、サイバンの上さ寢ろとせうがら、瓜子姫こはサイバンの上さ寢ると、山婆は庖丁で瓜子姫こをどぢ〳〵と切て、小豆鍋さ入れて煮て食つた。それがら瓜子姫この骨は根太の下さ投げ、山婆は瓜子姫この顏の皮を面(つら)さ張て、瓜子姫このふりして機(はた)を織て居だ。

そこさ爺ナと婆ナは山がらホドこを掘て、瓜子姫こは待てるだなと思つて戻て來て、瓜子姫こ、今來たがら、戸を開げろ、とせうと、山婆は瓜子姫この眞似して戸をあげだ。こりやホドこを掘て來たがら、川さ持て行て洗てこ(來)であとせつたら、山婆は川さ持て行て、大きなのは皆食て、びやこ(小さい)なのばがり持て來た。そこで大きなホドこはなぞにしたと聞くと、川さ流したましとせうがら、爺ナと婆ナは、瓜子姫このことだがらよいどせつた。すると山婆は、鄰がら小豆餅を貰たがらあがれとせつて、瓜子姫こを煮だ小豆鍋を出したので、爺ナと婆ナは瓜子姫こ臭いども、甘(うま)いなとせつて食つた。

そしたら山婆のつらさ血はついてゐだがら、瓜子姫こ〳〵、うなの顏さ血はついでるがら洗へであ、とせうと、山婆は面をぽろん〳〵と洗つたば、面さ張てゐた瓜子姫この皮は取れだので、山婆は山さ逃げてえてしまつた。そこで爺ナと婆ナは、瓜子姫こを山婆は食て化げて居だのだと知り、小豆鍋を見たら瓜子姫こを煮だ鍋であり、根太の下を見だら瓜子姫この骨はあつたので、おい〳〵と泣て悲しがつて、次の朝ま夜は明げでも起きなへで居ると、坪前(つぼまへ)さ鶯は來て、

櫛こも笄こもほしくないが、とど(父)どがが(母)戀しい、ホホホケキョウ。

とさがんだ(鳴)がら、そりや瓜子姫こは來たとせつて戸を開げで見るど、鶯は櫛こも笄こもほしくない、とどどがが戀しい、ホホホケキョウと、さかびなから山さ飛んでえてしまつたとさ。どつとはらい。

二　黄金の生る吹花

昔あつたぢもな。殿様の奥方は身持であつたとき、殿様の前を通ると誤て屁をひつたので、殿様は腹を立て、その奥方を里さ歸してやつた。そしたら間もなく玉のような男の子は生れだがら、大切にして育てで居ると、世間からでで(父)無し子と呼ばれるのでそれを不思議にして、其子はどういふ譯でおれはでで無し子であるかと聞くと母親は、お前はどうしてでで無し子どころか、立派な父親はあるとて昔の事を話して聞かせた。

それからといふもの、其子は一心になつて學問をし始めたが、ある時色々な色紙を買て來て綺麗な吹花を吹き、それを殿様の御殿さ持ていつて、

黄金の生る吹花を賣ろ。
黄金の生る吹花を賣ろ。

と觸れて歩くと、殿様はそれを見てれ此吹花さ本當に黄金は生るかと聞かれだがら、男の子は屁をひらない人は手さ持てば黄金はなると申した。そこで殿様は、人間に屁をひらない者はあるかといふと、

男の子は、人間に屁をひらない者は無いならば、私の母親は自分を腹さ入れてある時分、殿様の前で屁をひつたために、御咎を蒙り里さ戻されたと申しますが、それならば何故に母親ばがりは其ようなお咎めを蒙つたのであるかと言たので、殿様はそれを聞かれて、お前は俺の若子であつたかと感服なされ、母親と共にもとの通り御殿さ召出されて、以前にも増さる寵愛をなさつたどさ。どつとはらい。

三　古河の幸太

昔あつたぢもな。古河の幸太は鐵砲を持て北上川さ鴨を打ちに行くと、川の淀さ鴨は澤山おりで居たので、鐵砲で打ちよりは、川さ這入て皆おさへてけませうと思ひ、裸になつて水さ潜り鴨のゐた方さ泳いで行き、よい鹽梅に鴨の足をつかんで水底さ引込めて、鴨の首たを褌さ挾み、足を掴んでは引込めて褌さ挾み、淀に居た程の鴨を皆自分の褌さ挿し挾むと、鴨は一同に羽ばたきして、バタ〳〵と空さ飛上てしまつた。

そこで古河の幸太は、こと(困つた)な事をしたと思ふ内に、奈良の大佛様の屋根の上さ落されたから、おつかな(恐る)おつかなに下を見おろしと、目は廻る程高いので、降りるには降られないで困て

居たらば、幸ひ村の人達は上方見物に來て、今大佛様さ參詣して、屋根の方を見あげると幸太に似たものは居るので、其人達は天けに居るのは幸太ではないか、何してそこさ上つて居るといふと、幸太はうん俺だ、俺は北上川の淀がら鴨にさらはれ、爰さ落されて困つて居る所だから、なぞにかして落してけろと賴むと、村の人達はそれではおらは四幅風呂敷を持て居るから、それを擴げでるがらそれさ轉び落ろといはれて、幸太は喜んでそんだら落るぞと謂て、ごろ〳〵どたんと轉び落たら、四幅風呂敷は裂げで、幸太は土の底さ潛り込んでしまつた。

幸太は、さあ今度こそ本當にことやつたと思て居ると、遙か向ふの方にあかしこ(灯)はペカ〳〵と見えたがら、そこさたどりつくと醫者殿の家で、お前はここさ何しに來たと言ふので、幸太は、奈良の大佛様の屋根から轉び落て來たのだが、なぞにかして助けて貰ひたいといふたら、醫者殿はそれはさぞ困つた事である。俺は上さ登る藥を一服けるから、これを半服飲め、若し半服で登りかねた時には、殘りの半服を飲めば必ず上さ登ると敎へてくれた。そこで幸太は其藥を貰て、もとの所だべと思ふところさ來て上の方を見たら、幽に明り所はあるから、半服飲めと言はれた藥を、中途で引懸てあがれなくてはことだと思て、一度に一服飲むと、グウンと飛あがつて雲の上まで登てしまつた。

幸太はおま(思は)ない雲の上さ登たので途方に暮て居ると、向ふから鳴神様はやつて來て、お前はよい所さ來てくれだ。俺は近頃忙がしくて困て居る所だから、一つ手傳て貰ひたい、俺は太鼓を叩い

て先きさ行くから、お前は袋を擔いで後がら雨を降らせて歩けとの事で、鳴神様は七つの太鼓をごろごろ〳〵、どん〳〵〳〵と叩き、時々緣絡の桴使を、ピカ〳〵させて飛び駈るから、幸太は後さ立て、袋の口を振るまして走せると、雨はざあ〳〵と篠突くように降り出すた。その內、ふと雲の隙間から下界を覗いたらば、ちやうど幸太の村の古河では、田植最中だが水不足で困て居る所だがら、袋の口をうんと振るますと、雲を踏みはづしてドンと落ちだ。はつと思ふたら今までの夢は覺て、幸太は自分の寢床の中で……を手で握て振るましながら、寢小便をたれてゐたのであつたたどさ。どつとはらい。

四　二歲胡麻に三歲胡麻

昔あつたぢもな。長者殿のお婆さんはむがし(昔話)を好ぎで、なんたな(どんな)昔語りでも、お婆さを飽せる事は出來ながつたから、長者殿では昔を語てお婆さんを飽せた者々には、二歲ごまに三歲ごまをけると門前さ高札を立てだ。するとおめり(お目出)とうどあんすと來た男は、こちらのお婆様はむかしを聞ぎたいとの事で、高札の表について參りましたと言ふから、長者殿ではお婆さんの座敷

さ其男を通すと、お婆さんはむかしを聞たがつて待あぐんで居たので、昔語りの男は、まづなしお婆さん、昔あつたぢもなし、と語たらば、お婆さんは口にえぼしはあと謂つた。

それから其男は、或所に大きな大木はあつたぢもなしお婆さんといふと、お婆さんは口にえぼしはあ。その木のうど穴(空胴)さ一匹の大蛇は住んで居だぢもなしお婆さん、口にえぼしはあ。そしたら其木の枝さ鴉は一羽來てたがつた(留る)ぢもなしお婆さん、口にえぼしはあ。鴉はがあとさがぶ(鳴)と、蛇はのろ〳〵と出だぢもなしお婆さん、口にえぼしはあ。又鴉はがあとさがぶと、蛇はのろ〳〵と出だぢもなしお婆さん、口にえぼしはあ。又鴉はがあとさがぶと蛇はのろ〳〵と出だぢもなしお婆さん。何度も何度もそれをくり返すと、お婆さんは昔は飽ぎだからやめてけろ。あれや〳〵、誰が藏さ行つて、去年の胡麻一升に一昨年の胡麻一升出して來て、この人さやれと言つたので、二歳駒と三歳駒を貰ふ氣で來た昔語りの男は、ただ胡麻二升貰て歸つたとさ。どつとはらい。

五　福の神よげない

昔あつたぢもな。南昌山さ門松迎へに行くと、笊淵さ鴨こは一羽浮んで居たから、迎へて來た門松

を淵さ投げると、鴨こも門松もちぶんと沈んで見なくなつた。すると淵がら姉様は出で來て、今の門松の禮を謂ひ、おらほの家まであえで(來て)下さいといふから、なぞして此淵の底さ行くべと聞くと、姉様は、私さおぶ(負)さて、マナグ(目)をふく(瞑)てればよいといふから、其言ふなりになつて居ると、私の家さ行たら門松の禮に何かけれると言ふから、其時はよげないを欲しいといつてございと姉様に敎へられた

暫くして目を開げてもよいと言ふので開けて見たら、いつの間にか立派な座敷さ來て居て、色々御馳走を出されてお酒を戴き歸ることになると、門松の禮に何か望みの物をけるといふから、姉様に敎へられた通りに、よけないを欲しいと言ふと、みたくない(醜い)がぶくれわらし(小供)を、けでよこすた。

これをおぶて來ると、よげないは途中で、お前の家さ行たら俺を陰こさ置てけろと言ふので、連れて來て奥のでこ(出居)さ隱して置くと、其日がらトン〳〵トン〳〵と稼ぐので、きしね櫃には米は一杯にたまり、財布には錢はいつでもあるようになつた。そこで、朝晩にそこつと(密)でこに這入ては、よげないを見て、にかつと笑て出で來きした。

それを嚊は見て居て、何しにとど(夫)はでこさ這入ては、にかつと笑て出で來るかと思て、とどの居ない時にでこさ行て見たが何も居ないので、そこら中を片付て見たら、すまこ(隅)の方からみたく

ないがぶくれわらしは、ちよこ〳〵と出で來たので、はぎ(箒)でうんと叩きのめして追出しと、其わらしはおいと泣きながら、外さ出で行つた。

するととどは歸て來て、いつものようにでこさ這入て見ると、よけないは居ないので顏色をかへて出で來て、嚊さでこを見たなと言ふたら、嚊は、見たも何も、お前は何處がらあたながぶくれわらしを連れて來て置いたかと謂ふから、とどは心配して、それではあのわらしをなぞにしたと聞くと、嚊は、はぎで叩きつけたら、おい〳〵泣ながらどごさが行てしまつたと謂ふので、とどはことやつた事(困)をした。あれはよけないと言ふ福の神で、笊淵の底がら貰つて來たものだと言ふて、ひどく力を落した。それからと言ふものは、きしね櫃に米は減り、財布には錢は無くなつて、又元の通りの貧乏暮しになつたとさ。どつとはらい。

六　和尙樣しやあ

昔あつたぢもな。和尙樣は壇家さ行て酒こをあがつて來ると、いつでも野原で狐に騙されて歸るので、小僧は或日、和尙樣し〳〵、野原さ行て和尙樣を騙し狐を押へて來るとて、叺を持てお寺を出か

けだ。そして野原さ行くと、

和尙樣しやあ。

和尙樣しやあ。

と呼ぶと遠くの方でほうと返辭をしたがら、小僧は又、

和尙樣しやあ。

和尙樣しやあ。

と呼ぶと、狐は和尙樣に化けておゝ、小僧か〳〵、と言て出で來たので、小僧はいつもより遲いので迎に來たが、和尙樣は酒こに醉ふと、叺さ這入る〳〵といふから、叺を持て來たがら這入てござへとて叺を出すと、狐は和尙樣の眞似して、おれは醉て來たがら、どら〳〵叺さ這入るとて這入たので、小僧は叺に繩をかけで、お寺さ背負て歸て來た。そして和尙樣し〳〵、狐を押へて來だがら、早くお寺を閉めてござへといつて、叺を本堂さ持て行き、叺がら狐を出して、和尙樣と二人でそれをぼまく(追ひまく)ると、狐はどてんして、本堂中を逃げまわつて居たが、いつの間にか見へなくなつてしまつた。はてなと思てよく見たらば、須彌壇の上にお釋迦樣は二つ坐て御座つて、どつちが狐だか解らないので、小僧はお寺の御本尊樣ならば、お經を上げると、御首をきた〳〵とふるましから、和尙樣にお經を上げろと言ふので、お經を上げると狐は騙されて、きた〳〵と首をふるましたから、それ狐

だといふのでうんと叩きのめすと、遂に苦くなつて命ばかりは助けてけろ、以來は決して騙さないと言ふので惡い狐ではあるけれども、お寺の事でもあるからとて放して遣ると、それからといふものは和尚樣ばかりではなく村の人を騙さなくなつたたどさ。どつとはらい。

七　長薯十七本

昔あつたぢもな。長者殿では娘三人を片附けたが一番目の姉娘の聟は貧乏で、あとの娘の聟は皆仕合はよがつた。三人の聟は舅殿の秋餅さよばれだども、一番目の聟は持て行く土産は無がつたので、鐵砲打であつたがら、鴨でも持て行く氣で川さ行て見ると、丁度鴨は二羽橋の下さ落ちて居たので、それを打ちと、一羽は手追ひになつて橋の袂さ刺つたから、それを取るべと股引をぬいで川さ這入ると、鴨は橋杭の間さなぼもさゝつて行くので、杭の間さ手をつだ(突出)しと、長薯は有るから土を掘ると、長薯を十七本も掘り出じ鴨も押へたので、喜んで川から上て見たら、土堤さ脱いで置た筈の股引は無いのであたりを見ると、風で川の中さ飛んでゐた。そこでそれを引上げて見れば、ハエ(鮠)雜魚は股引の兩方さずつぱり(一杯)這入て居たので、これはよい土産は出だと思ひ家さ持て來て、皆俵

さ入て舅殿さ背負て行つた。

舅殿では二人の聟は立派になつて來て居るども、一番目の聟は遲いので、姉娘はなぞな事だと思て心配して居る所さ暗くなつてから、俵を背負て來た。舅殿では貧乏な聟のことであるから、誰も來たがといふものはながつたども、おめり(お目出)とごあんすと言て這入り、あがりば(上端)さ俵を下してお辭儀をしてから、御へゲ(膳)を貸してけろと言ふたら、一枚のへゲを出すので、それさ俵の中から鴨二羽を出して並べた。それからもう一枚をといふて、長薯十七本を出して乘せた。又一枚と言てそれさばハエ雜魚を股引からぼろつて一杯盛り上げて出した。

すると舅殿では珍らしい土産を澤山貰たのでひどく喜ばれて、其晩は大層な御馳走になつて座敷さ寢たが、あまりよい月夜なのでそろつと起き出して、前の林で雉子を三羽打て來て緣側の天井さつるしてだまつて寢て居ると、次の朝舅殿は起きて緣側の戸をがら〳〵と開げだら、頭さぶちかつたものはあるので、はてなと天井を見ると、雉子を三羽つるじてあるから、早速庭敷の入口さ行て、ゆべな(昨夜)のお手許はどなたといふと、一番目の聟は頭をあげて、ハイ私と答へたのでまた褒められて、其日は雉子のだしで蕎麥きりの御馳走になつた。

たらふく蕎麥切の御馳走になつたので、一番目の聟はその晩手水に行きたくなり、暗まぎれに走前(流)さ行き手水鉢をめけ(見附)て、糞をしこだま(澤山)垂れて置いだ。次の朝になつて、舅殿は顏を

洗ふべとして、手水鉢さ手をやると、蓑をねかり掴んだので、早速座敷の入口さ行て、夕べの御手許は誰方とやると、末子こ聟は寢惚け顏をもつくりと起して、ハイ私と謂つたので、舅殿は腹を立ててこたなものに娘をけて置かれないとて、とう〳〵其聟は女房を取返されたとさ。どつとはらい。

八化物寺

昔あつたぢもな。或村さ旅僧は來て宿を乞ふたら、この村では一人旅は泊めてならない事だから、氣の毒だども、あの山際の明寺さ行て泊れと言れたので、旅僧は其明寺さ行くと、村の人達は五六人で火を焚て守て居たが、喜んで泊めてくれて、ここに酒でも飯でも置であるがら、それを食て泊でろと其人達はどや〳〵と歸てしまつた。

そこで旅僧は火さあだつて泊て居ると、夜更になつて、本堂の方でのしのしつと物音はしたがら、そこに在る鍋を被つてだまつて居だら、まなご(目)は三つあつて、齒の二枚ある大入道は庫裡から出で來て、和尚樣おはぢきめさいとて、鍋を被つて居る旅僧の頭をバチンと彈いて、堅い頭だなと謂つた。すると旅僧は今度は俺の番だと言て、木の尻から木割を取て、其入道の頭をゴチヤリと斫割り、外

さ取て投げた。

すると又のしのしつと物音はして、同じような入道は出で來て、和尚樣おはぢきめさいといつて、被つてゐる鍋をバチンと彈いて、堅い頭だなといふから、旅僧は今度は俺の番だとて、木割で入道の頭をゴチヤリと斫割つて外さ取て投げると、またのしのしつと物音はして似たような入道は出で來て、和尚樣さ、おはぢきめさへと鍋をバチンと彈いて、堅い頭だなと謂ふから、旅僧は今度は俺の番だといつて、木割でゴチヤリと入道の頭を斫割つて、又外さ取て投げたらそれがら何も出で來なかつだ。

次の朝村の人達は、夕べなの旅僧はきつと化物に取て食れたべと思て、揃て寺さ來て見ると、旅僧は何もなく火さあだつて居だがら、ゆべな何も無かつたかと聞くど、旅僧は本堂の方で物音はして大きな入道は三人出で來て、おはぢきめさいと言ふがら、木割で入道の頭を斫割つて外さ投げて置いだがら、朝日さかざして見ろ、化物の正體は現はれるからと謂ふので、見ると成程三人の大入道は頭を割られて死んで居るから、それを朝日さかざして見たらば、古下駄の化けたのであつた。

そこで村の人達は、此寺は化物寺で、なんぼ住職は就いても皆取つて食はれるので明寺となつて、かうして毎晩守て居るものだが、旅僧に住職になつてけろと頼まれで、旅僧はそれを引受けて其寺の住職となつたどさ。どつとはらい。

九　若ぎのほうぎ

昔あつたぢもな。息子三人さ金百兩と藏を一つづゝ建てけて、三年の間お前達さ暇をけるから三年の内にこの藏さ、一番値のある物を入れた者をこの家の跡取(相續人)にする、と言ひ渡した。

すると三番目の息子は、上方さ上て絹布類を買込んで藏さ入れるし、二番目の息子は米屋を始めて米をうんと藏さ積込んだ。しかし總領息子は俺には何もいらないが、燒木の尻を三本欲しい、それを目口(惡口)きく奴等の口さ突込んでやりたい、といつて家を出だ。そしてまづ足の向く方さ歩いで行くど、黑川の觀音樣の前を通つたら、觀音樣のお堂は餘り破れてゐたので、葺替をしたくなつて、村の人を賴んで屋根を葺替して貰つた。これでよいと思てまだ行くど、今度は門の權現樣の前さ來だから、其お堂を見るとこれも大分破れて、權現樣に雨風はあだつて居るので、これも村の人を賴んで葺替をして貰つた。そこで二つのお堂は立派になつたが、北上川に橋は無いので、參詣人は不便であると思ひ、今度は橋を架けたくなり、大工を賴んで橋を架けると百兩の金を皆使ひはたしてしまつた。

北上川さ橋は架ると、近鄕近在から參詣人はぞろ〳〵來るので總領はよい氣持になつて、先づ觀音

樣さ一晩宿を借ると、その夜觀音樣から、夢のお告に釣竿を戴いたと見て目は覺めると、枕元に一本の釣竿はあつた。それを以て次の晩は權現樣さ行つて宿を借りたら、今度は夢のお告に、わがきのほうぎとお神酒錫こを授がつた。そこで枕元を見たらば、其わがぎのほうぎとお神酒錫こはあつたので、それを持て自分の架けだ橋の上さ來て釣をすると、小袋は釣れたのでこれは何だと思て、橋の上でほろつて見たら、小袋の中からチヤグ〳〵と音して金は出た。ほろけばほろく程出で、橋の上さ一杯になつたので、その金をまた小袋さ押込めて、漸く家の方さ足を向ける氣になつた。

すると家では愈よあした(明日)藏改めだと謂ふので、總領の嚊は心配して、寢てもね(眠)られなくて居ると、夜中に夫は歸て來て酒こを飲めと起すので、嚊は酒こ處ではない、あしたは親類は集て藏改めの日であるが、二人の弟達は藏さぢつぱり(澤山)物を入れたども、お前の藏には何も這入つて無いがら心配だといふと、總領は心配する事は無いがら先づ飲めと言て、錫こを出して注いで飲ませると、小さい錫こだどもなんぼ注んでも酒は出だ。そしてれ藏の戸前さ行て立てろと言ふと、嚊は空藏の前さ立てるのはやんたといつたども、あまりせめるので立て居ると、總領は窓さ行て小袋を出してほろくと、金はザグ〳〵と音して落ちて、はや藏さ一杯になつたので、嚊は戸前さ溢るましといふたら、戸前を締めさせて尙ほろくと、窓さもあふれ出したので、止めて床さ這入つて寢だ。

次の日藏改めにつき親類は集たので、總領は例の錫こを出して酒を親類さ振舞つたが、何度注ぎ廻

つても錫この酒は盡きながつた。それがら肴の代りに金を二分づつはさむと、親類はこれをどごがら出したべと不思議がつた。そして藏改となつて、三番目息子の藏を改めると、絹布類はぢつぱり這入て、なんぼ値あるか知れなかつた。次に二番目息子の藏を改めて見れば米は一杯積れて、これも大したものであつた。しまいには總領息子の藏の番だが、空藏は誰もみべとするものは無がつたども、見ない譯には行かないとて、親類は戸前を開けべとすると、中々あかないがら、これはなぞな事かと四五人で無理に押し開けると、金はザグザグと戸前からあふれて出だので、家督はやつぱり總領息子ときまつた。

その後總領は、權現様から授かつたわかぎのほうぎで、母親だの嚊だのを扇いで若くしてやつたならば、母親はまつと若くなりたいと思ひ、總領の留守の間に其わがぎのほうぎを探す出して、ばほ〳〵とあおぐと、あまり若くなり過ぎて子供になつて、其邊をのた〳〵と這ひ歩くようになつたたどさ。どつとはらい。

一〇 鼻利ぎ

昔あつたぢもな。いつも嚊は家のとど(夫)の居ない時に、隣のとどを呼んで來て御馳走をするのを、家のとどは心附て居て嚊々、今日俺は町さ行て來るがら、握飯を握れと言つて支度をさせ、草鞋をはいて出かけたが、嚊は手水所さ行た間にそこつと戻て來て、まげ(厩の梁)さ上つて隱れて居だ。

すると嚊は糯米を磨だり蒸鍋をかけたり、酒を買つて來たりして、隣のとどを呼ばつて來て、にわ(土間)で餅をつき始めだ。それをまげさ上て見で居だ家のとどは、臼さこがん(かがむ)で、せつせとあいどれや(相取)してる嚊の頭を、長木の先ぎでボキリとつゝくと、嚊は餅を搗て居た隣のとどさ何して俺の頭を叩いだがと言つて、どせや(立腹)いたら、隣のとどは何しに俺は叩くべと爭て居る内に、今度は隣のとどの頭を長木でつゝぐど、隣のとどは嚊に叩がれたと思て、俺の頭を叩ぐとはきまやける(腹が立つ)と謂て歸つてしまつた。

そこで嚊は仕方なく獨りで小豆餅をこさへて佛壇の引出さしまい、酒は戸棚さ入て、臼を始末したり、鍋や甑を河戸さ洗に行つた際に、家のとどはまげがら下りで、其邊を歩きまわつて草鞋さ泥をつけ、町さ行て來た振りして今來たとて這入ると、嚊は機嫌よく早がつたなしと言つて迎へだ。そこでとどは上端さ腰かけてれ、俺は町で鼻ぎぎを習て來たがら鼻利ぎをして見とて、座敷の方さむいて鼻をフン〳〵ならすながら、佛壇の引出で小豆餅の匂がするなと言ふと、嚊はなになし、お前は町さ行て腹をへらしてく(來)べと思て、餅を搗て仕まつて置たましとて、小豆餅を佛壇の引出から出して來

た。今度は戸棚の方さ顔を向けて、鼻をフン〳〵とならしながら、戸棚の中で酒の匂はするなと言ふと、嚊はお前は難儀してくべと思て、酒こを買て來て置たましと言て戸棚から出しだ。

それからといふものは其鼻利ぎは評判になつたが、長者殿のお姫様大病にかがり醫者といふ醫者、法者といふ法者をかげでも直らないので、どう〳〵鼻利きをして貰いたいと言つてとどは頼れだ。そこでとどは困つた事になつたども斷るわけには行かないから、嚊さ俺は長者殿さ行き附た頃に家の藥つぼけ(藥つみ)さ火をつけろと言て出で行ぐど、嚊は言附られた通りの刻限を計つて前の藥つぼけさ火をつけだ。其時丁度とどは長者殿さ行きついたが、あれや俺方さ火はついだと言て家さ馳せて來た。

その夜青麻の權現様さ籠て、長者殿のお姫様の病氣を知らせて下さるやうにと願をかけだら、權現様のお告には、長者殿の屋根の上にはアオノロシ(青大將)が居で惡氣を吐ぐし、根太の下にはフルダ(蝦蟇)は居で、邪氣を出すて居る間さお姫様は寢てゐるから病むので、それを取て川さ流すと立所に癒るとのこどであつた。そこでとどはひどく喜んで、次の日長者殿さ行き鼻をフンフンならして、お姫様の休んでござる屋根の上にはアオノロシは居て惡氣を吐くし、根太の下にはフルダは居で邪氣を吹出すから、それを取て川さ流すと病氣はなおる、とお告の通りに言ふと、長者殿ではそだらばとて葺大工を連れて來て屋根をほごしたら、果してアオノロシは居だたし、人夫を連て來て根太の下を掘るとフルダはゐだので、それを取つて川さ棄てるとお姫様の病氣は薄紙をはぐように癒り、とどは長

者殿から金を貰つて歸り、仕合よく嚊と暮したとさ。どつとはらい。

一一　陣岡左衞門に馬場松公

昔あつたぢもな。冬の夜永に寢てれ夫は女房さ、さえ〳〵、うなの手は杓子か箆が何んだであと聞いたら、女房は俺の手は右りの方は箆で、左の方は杓子だますせつ(言)た。すると次の朝、立派な侍衆は二人來て、こちの嚊は右りの手は箆で左の手は杓子だそうだに依て、連てえ(行)ぐに來た、とせう(言)ので、夫婦はどてん(驚)して、支度をして行ぎたいがら、あした(明日)まで待てけろとせうと、侍衆はそれではあした來るがら、間違なくやれとて戻て行つた。

そこで夫婦は途方にくれで、お寺の和尚様さえつて此事を話すと、和尚様も不思議に思ひ、お前達は何が夜話でもさながつたがと聞いだら、夫婦は實はよべな(昨夜)寢てれ女房の手の話をすたとせうがら、和尚様はそれだ、それでは狐の仕業であるべがら近所の若夫達を四五人助けられで、其侍衆は來たらば戸を締めて逃さないようにし、ナンバン(唐辛)殼をゆぶす(燻)と、狐は苦しがつて本性を現すべがら、其時若夫達にさえばつ(成敗)させろと聞かされたので、夫婦は喜んで歸り、隣近所の若夫

達を助けられて來て、にわ(土間)さ莚を著せて隠して置き、それからナンバン殼を貰ひ集めて仕度をして居だ。すると次の朝間になつて、エセン〳〵と咳ばらいして、昨日の侍衆は來て、約束通りに女房を連れてえぐに來たとの事であるがら、先づヒボド(圍爐裏)さヘナシ(縁無蓆莚)を敷ぐど、二人は横座さ大股をひらいで當つた。そこで戸をたて(閉)ると、侍衆はそう戸はたてなくてもよいとせうから、今朝はあまり寒いがらとて、ナンバン殼をくべ(燒)でぶし〳〵と燻すと、苦しくなつて來て一人の侍衆はケンケンと咳拂を始めだので、又ドツサリとナンバン殼をくべるとあとの侍衆もケン〳〵と咳をして、そたにくべるなとせつてもやぐど(故意)くべると、二人はケン〳〵ケン〳〵と苦み出しそこら中をすり歩き、遂に尾ぱを出したり耳こを出したりして轉び廻り、狐の本性を現し出すた。

すると助けられて置だ若夫達は一同に出で、此畜生共と棒木で叩きのめすと、狐はえ(家)のなかぢうを逃げ廻つたども、戸をたて〻居るので逃げ場はなく、とう〳〵俺達は近所に棲んでえる陣岡左衛門に馬場松公とせう狐であるが、これからはなぞしても近邊の人達を騙さないがら、命だげは助けてけろと降參したので、不憫だと思ひ、戸をあげで出してやつたらば、二疋ともヨガラ〳〵となつて野原の方さ行つてめ(見)なくなり、それからといふもの、村では狐に騙されだ人はながつたとさ。どつとはらい。

一二　糠ん福に米ん福

昔あつたぢもな。糠ん福は先腹で、米ん福は繼母の子であつたが、糠ん福の叺のけつ(尻)は穴のあいたもの、米ん福の叺は穴のあかないものをあづけで、山さ栗拾ひにやるとて、繼母は糠ん福は姉だがら先さ立て歩ぐべし、米ん福は妹だがら後さ立て拾て歩げど言附てやつた。

二人は山さ行て栗こを拾つたが、糠ん福の叺には何んぼ拾つてもたまら(充)ないが、米ん福の叺さば姉の落したのを拾つて歩ぐがら一杯にたまつた。其内に腹はへつて來だがら二人はひるめしを食べなとて山で風呂敷を廣げると、握飯はころ〳〵ところがつて下さ落ぢて行つた。そこで二人は其握飯のあとを追ふて山を下ると、そこに一軒屋はあつて山婆は赤子の股を串にさして炙てゐたが、お前達は何しさこゝに來たと言ふから、二人は握飯のあとを追て來たと言つたらば、山婆は其握飯は來て居るが此處はお前達の來る所ではない、今に此屋の兄と弟は歸つて來ると、取てか(食)るから、早く俺の裾さ這入てろと謂て二人を山婆の裾さ入れて隠すたら、今日は何も得物は無がつたと言て、兄と弟は歸つて來たが、來ると人臭いな人臭いなと頻りに言ひ續けた。すると山婆は、何しにこゝさ人は來

べさそれよりも里の方に死人は在る筈だがら、行てそれをさら(浚ひ取る)てこと言ふと、兄と弟は赤子の股を食つてすぐ里の方さ出がげだ。

そのあとで山婆は、糠ん福の叺のけつを縫てけで、栗を足してやり、日は暮れない内に山を出ろと言ひ、そしてお前達は輕い葛籠をほしか重い葛籠をほしかと言ふと、米ん福はおら重い葛籠を欲しますと言つて重い葛籠を貰ひ、糠ん福はおらは輕い葛籠を欲しますといつて輕い葛籠を貰つた。それを二人は背負て山を下りで來ると、米ん福はあまり重いので葛籠を開けで見るといつて、途端て開けて見たらば、中に虫けらだの蛇だのべゴ(牛)の糞だのは一杯這入て居たので、どてん(驚)してそれを投げて今度は糠ん福のなを開けで見ろと言つた。すると糠ん福はおらは家さえぐまであげで見ないとて、家さ來てがらそこつと其の葛籠を開げで見ると、紅い小袖は這入つて居だので、それを糠小屋さ入れで置いた。

或日長者殿さ神樂は來るので、繼母は米ん福を連れて見さ行ぐに、糠ん福さば水を七さげ汲べし、糸を七結おむ(績)べし、稗を七臼搗て置けと言附て行つた。そこで糠ん福は、神樂を見さ行きたくても言附られたので、障子の陰でクシクシと泣ながら糸をおんで居ると、鄰がら婆様はこちでは神樂を見さ行たがと言つて來てれ、何しに見さ行かないで泣てると聞ぐがら、糠ん福は見さ行きたえども、水を七提に糸を七結と稗を七臼搗けと言附られただし、其仕事を稼がない内は行かれないがら、今糸

をおんで居る所だましと言ふど、婆様は稗ば俺は搗で置ぐがら、水は行て來てがら汲むべし神樂を見さ行げと言ので、糠ん福は顏を洗つてお白粉をつけ髪を結ひ、山婆から貰て來た小袖を著て、長者殿さ神樂を見さ行つた。すると米ん福は糠ん福を見附て、あつぱ(母)〳〵、あれあ糠ん福は神樂を見さ來てると言ふと、繼母は糠ん福は何しにくべあさ、仕事をあれ程言附で來たもの、あれは外のあね様だべと言ふから、米ん福はうんにや糠ん福だであ、おれは饅頭の皮をぶつ付たらば、それを食つたがら糠ん福だと言ふと、繼母は糠ん福には、あんたな美しい着物を何處がら出して來るべと言ひ、そんだら家さ行て見べといふて居る内に、糠ん福は家さ歸つて來てもえ(裝)をほごして、顏さ墨がきをして水を汲んで居る處さ米ん福と繼母は還つて來て、それやあの人は糠ん福では無がつたといつた。

それがら二三日經づと長者殿がら糠ん福を嫁にけでけろと仲人は來たので、繼母は糠ん福は髪をけずるにズワリ首切リズワリ首切リと梳るし、米ん福はチンパラリンチンパラリンとけずるから、米ん福をけるましと言ふと、仲人はいにへ(否)長者殿では糠ん福をほしいと言ふがら、糠ん福をけてけろと謂ふので、糠ん福をける事にして綺麗に化粧させて山婆から貰て來た小袖を着て、鳴輪をつけた馬さ乘せ、ザングリブングリと長者殿さ嫁にけてやつた。

それを見た米ん福は、あつぱ〳〵、おらも嫁さえきたいと言つて泣ぐど、繼母はお前は嫁に貰うどど(處)は無いがら、臼さ乘せてふ(引)いで歩ぐべとて、つぶ(田螺)殼を拾つて來て臼につけでガラガ

ラと田の畔をふいで歩ぐど、臼は轉がつて米ん福は田さ落ぢだので、おらつぶになるとて米ん福はつぶになつたどさ。どつとはらい。

一三　豆こ一つ

昔あつたぢもな。爺ナは屋根葺き婆ナは針刺し、あね子(嫁)〳〵、にわ(土間)掃げでぁ。豆こ一つめけ(見附)だまし、豆こは轉がつて穴こさ這入たとさ。そんだらば掘てえ(行)げでぁ。はといつて木割でぽつ〳〵と掘てえぐど、白い障子こはたつて(閉)ねだがら、からんとあげで(開)豆こは來ながつたますか、來たどもえたでぁ。きたんとたてで又ぽつぽつと掘てえぐど、黒い障子こはたつてねだがら、からんとあけで豆こは來ながたますか來たどもえたでぁ。きたんとたてで又ぽつぽつと掘てえぐど赤い障子こはたてであつだがら、からんとあけで豆こはこながたましかとせう(言)ど、地藏様は御座て、來てらがら這入でぁ。はいと這入ると、あね〳〵、俺の膝さあがれでぁ。勿體なくて上れません、うにあ(否)〳〵上れでぁ。はいと地藏様の膝さ上るど、今度はあね〳〵、俺の肩さ上れでぁ。勿體なくて上れません、えゝがら上れでぁ。はいと地藏様の肩さ上るど、今度は俺の頭さ上れでぁ。勿體

なくて上れません、えゝがら上れでぁ。はいと地藏様の頭さ上ると、鶏の眞似をせでぁ。ぱた〳〵けけろよう、もう一聲。ぱた〳〵けけろよう。もう一聲。ぱた〳〵けけろよう。するど二階の博奕打はそりあ三番鶏だとてどや〳〵と下りて歸つた。そこで地藏様はあね〳〵、博奕打は金を置で行たがら二階さ行て持て行げでぁ。はいとて二階さ行てうんと金を浚つて家さ持て來た。

それを隣の婆ナは聞つけで、爺ナ〳〵、俺方でも屋根葺でごさへとて、爺ナは屋根葺ぎ、婆ナは針刺し、あね子〳〵、にわ掃げでぁ、豆こは一つも無います。そだらば豆こ一掬み持て來て蒔げでぁ、蒔だども穴こはめないまし。そだらば豆こをおつちぺし(押込)て掘て行げでぁ。はいとて木割でにわをぽつ〳〵と掘ては豆こをおつちぺし　ぽつ〳〵と掘てはおつちぺして行くど、白い障子こはたてであつたので、がらんとあげて豆こはこながたましか、返辭はないどもあね子は自分で、來たども行たでぁ、ぎたんとたてで又掘て行ぐと、黒い障子こはあつたがらがらんとあけで、豆こはこながたますか、返辭はないがら自分で、來たども行たでぁ、ぎたんとたてで又掘て行ぐど、今度は赤い障子こあつたがら、がらんとあげで、豆こはこながたますか、返辭はないがよく見たば、地藏様はござつたので、あね子は自分で、あね〳〵、來てらがら這入れでぁとて這入て、自分で膝の上さ上れでぁ、勿體なぐて上れないまし、ええがら上れでぁ、はいとて地藏様の膝の上さ上り、又自分で肩の上さあがれでぁ、勿體なくて上れません、えゝがら上れでぁ、はいとて肩さ上り、次には頭さ上れでぁ、勿體な

くて上れません、え、がら上れである。頭さ上り鶏の眞似をばた〳〵けけろよう、ばた〳〵けけろよう、ばた〳〵けけろようと續けざまにすると、二階がら博突打はどや〳〵と下りで來て、この女ごはまた來て鶏の眞似をしてるとて、地藏樣の頭がら引摺り落して、踏んだり蹴たりひどい目に逢はせた。そこであね子は血だらけになつておい〳〵泣て來ると、婆ナは俺方のあね子は赤い著物を着て、金を持て唄こを歌て來たがら、ぼど(襤褸)著物は皆燒てしまへとて火をつけて燃してしまつたら、あね子は血だらけになつて泣ながら來たのであつたどさ。どつとはらい。

一四　右衞門太郎と左衞門太郎

昔あつたどさ。右衞門太郎と左衞門太郎は鄰同士で泊り山さ行ぐど、其時どつちの嚊も身持であつた。二人は泊り山の小屋さ泊つてれ、右衞門太郎は左衞門太郎に、俺方の嚊のなは女ごわらし(小兒)で、お前達の嚊のなは男わらしをなすたら、お前の方さくれでやるし、若しもお前達のなは女ごわらしで、俺方は男わらしは生れたらば、俺方さけてけろと約束して寢だ。

すると其晩小屋の前さ大勢の神樣達は集たが、山の神樣は後れて來たので、神樣達は山の神樣にナ

ゾで遲く來たがと聞くと山の神樣は、今右衞門太郎の嚊と左衞門太郎の嚊は產をしたので、それをなさせでがら來ただし遲くなつたと言ふど、神樣達はそれでは、生れたわらしは男だが女ごだがと聞けば、山の神樣は右衞門太郎のなは女ごで、左衞門太郎のなは男だが、女ごの方は運をうんと(澤山)持て生れたが、男の方はたつた鉈こ一丁ぼか持て來ないといつた、と思て二人は目を覺した。

それで右衞門太郎は今こういふ夢を見だど謂ふと、左衞門太郎も俺も同じ夢を見て覺めだと言ふので、二人は其晩の内に家さ歸つて來たら、どつちの家でもわらしは生れだ處だど言て居だがら、なぞなわらしは生れだがと聞くと、右衞門太郎の嚊は女ごわらしで、左衞門太郎の嚊は男わらしであつたがら、約束の通り右衞門太郎の方では左衞門太郎の方さける事にした。

それからと謂ふものは、左衞門太郎の息子の家は仕合よくなつて、田地田畑を買ひ入れ、取引も多くなり、ひと朝間もゆつくり寢て居られながつたので、何ぞにかして朝寢をして見たいと思て占つて見ると、蓬の矢にうつ木の弓を用意して、朝早く屋根の方さ向てそれを射れば、ゆつくり朝寢は出來るといふのだから、息子は喜んで蓬の矢とうつ木の弓をこさへて、朝早く屋根の上を見たらば、烏帽子を冠た白髮の翁はせんす(扇)を持て四方をまねいで居だがら、其方さ向げで弓矢をバチリと射て、まづよいと思ひ又床さ這入て寢だ。

その日おがだ(女房)は、藏さ用はあつて行ぐど、藏の内でうん〳〵と唸るものはあるので、なんだ

べど思ひおき(奥)の方さ行て捜すと、烏帽子を冠た白髭の翁は、左のまなど(目)さ蓬の矢を射られて苦しんでゐだので、勿體ない事だと思ひその矢をぬいてけると、翁は俺はお前さついだ福の神だがお前の夫に弓矢を射られだため、この家から出で行ぐとて悄々と出で行つた。それがらといふもの、大勢の人は來なくなり、きしね(生稻)櫃には米は無くなつたり、財布には錢は無くなつて、日増に貧乏になつて行がら、女房もそこに居られなくなつたがら、一層のことおいぬ(狼)にでも食れで死ぬべと思ひ、家を出で羽場の方さ行ぐど、そこにおいぬは三疋居だし、おいぬ殿〳〵、おれを食てけろと頼んだら、おいぬはお前は本當の人間だがら取て食れない。俺達の取て食のは狐の頭だの、犬の頭だの、肴の頭だの丶人だがら、俺のまつげ(眉毛)を三本けるがら升形のような處さ行き、此のまつげをかざして見て居ると、其處を通る人達は皆狐だの、犬だの、肴だの丶かしらをしたものは通るが、其中にたつた一人人間は通るから、それさかだつて行げと教へられだ。

そこで女房はあきらめで、まつげを貰つて升形さ行き見で居るど、町歸りの人達はがや〳〵話合て通るども、人の頭をしたものは通らないので、一日立て居ると日暮頃になつて、ケラコ(蓑)を着て吠俵を背負た親父は急ぎ足に通つたがら、おいぬの眉毛を目にかざしてよく見てもどうしても人間の頭に相違ないので、其親父の後さついて行ぐど、親父は何しに俺のあどさついで來るのだと言ふから、どうがおれを連れでてけろと頼むと、親父は俺は向ふの山の炭燒だが、お前様はどどの嚊様だが連れで行

ぐ事は出來ないと斷つた。それでも女房は何處までもかだつて行ぐど親父は炭燒く山の小屋さたどつて行たがら、其小屋まで行き足を洗ふ所は何處だど聞くと、親父はそどの澤さ行て洗へと言ふがら其處さ行つて足を洗るべとすれば、踏臺にして居だ右は金でありロをゆすぐ(滌)と澤の水は酒であつた。

そこで女房は爺様々々、お前はあの澤の踏石を何んと見るといふと、親父はあれか、あれはただの山石だといふから、いへ〳〵あれはただの石ではない金である。それがら澤の水を何んと見ると聞くと、親父はあれは只の澤の水だといふがら、いへ〳〵あれはたゞの水ではなく酒であると言ふた。又ヒボド(圍爐裏)の踏石を見でこの石を何んと見るといふと、親父は澤がら拾て來た山石だと言がら、これも金であるがら、明日た町さ持て行げど謂ふたらば、親父は次の日二つ三つ町さ持て行くと高ぐ賣れだ。又澤の水は酒であつたがら、酒屋を始めで賣出したら大層繁昌して、まもなくいろ〳〵な茶屋も建ち並び町場となつた。

ところは左衛門太郎の息子は益〻貧乏になり、鉈こを持ては山さ行て、マダ(級木の皮)をはいで來て、この町場さ持て來てそれを賣つては、もどりに此酒屋で酒を飲んで行き行きした。すると酒屋の嚊様はさきの夫であるがら、或日握飯さ金を入れてけるど、左衛門太郎の息子はそれを何氣なく貰て外さ出だら犬に吠られだので、これは酒屋の嚊様がら貰つた握飯だども、そら程吠るならばそれけるとて、犬さ投げでけて歸つた。其次に來た時は竹杖さ金を入れで、爺様々々、お前は年はいつて難儀

だべがら此杖こをついて行げとてけると、酒屋の前に居だわらしやど(小兒等)は、あの爺様は今酒屋の嚊様がら杖こを貰て行ぐと囃すたてると、此は酒屋の嚊様がら、貰た杖こだがそら程ほしがらけるべといつて、わらしやどさ投でけて行つた。

そこで又來た時嚊様は、爺様々々、先達お前さけだ握飯はなぞにすたと聞ぐど、あまり犬は吠るがら犬さ投げでけだといふがら、そだらば竹の杖はなぞにしたと聞ぐど、わらしやどは欲しがるがらくれでやつたと言ふので、嚊様はあの握飯さも竹の杖さも中さ金を入れでけだのだが、お前はよく〳〵運の無い人だ。この俺を誰だと思ふと聞ぐど、此酒屋の嚊様だと思ふと言ふがら、俺はお前の元のおがだだと名乗り、旦那様さ願て酒屋の竈の火燒に置て貰ひ、一生を飼殺すにしたどさ。どつとはらい。

一五　打たん太鼓に鳴る太鼓

昔あつたぢもな。和尚様は小僧さ難題を言ひつげる癖はあつて、小僧々々、町さ行つてナンダベを買て來いと言附けだがら、小僧はお寺を出で町の方さ行つたがさて何を買て來てよいのか、先づあてもなく歩いて行くど橋の上さ大勢の人は立て居たので近寄ると、あれや何んだべあれや何んだべと川

の中を見るがら小僧も寄て見たら、橋杭さ馬のハラワダ(腸)は引掛て、ナヤ〳〵と流てゐるので、よいものを見附だと思ひ、人の去つたあとで其ハラワダを川の中がらあげで、それさ繩をつけでずるずるとお寺さ引ずつて持て來た。すると和尚様は小僧ナンダベを買て來たがと言ふがら、はい買つて來ましたとそれを出すと、腐つた馬のハラワダさ繩をつけて引ずつて來たのであつたがら、和尚様は顔をしかめて思はず小僧これはナンダベと言ふと、小僧はそれは言付けられだナンダベであると答へるど、こりや〳〵臭いがら早ぐ投げてこと言て投げさせだ。

それがら暫く經づど、今度は打ん太鼓に鳴る太鼓おそべの袖かぶりを買て來いと言附だ。そこで小僧はあきれで、ぶらり〳〵と歩いて行ぐど、途端てわらしやど(小兒等)は、瓶蜂の巣さいたづらをしてだら、其瓶蜂は巣がらがん〳〵と飛び出して刺すべとすれば、わらしやどは、ヒョウ〳〵とおそべ(口笛)を吹て、袖をかぶりながら逃げまわつて居だがら、小僧はこれだと思ひ、其わらしやどさ錢をけで瓶蜂は巣さ這入るのを待て居で、巣の穴こさネズ(捩子)をかひ、それを取て貰ひ早速風呂敷さ包んでお寺さ持て來た。そして和尚様し〳〵、言附られだ打ん太鼓に鳴る太鼓おそべの袖かぶりを買て來たと謂ふど、和尚様は居間でこゝさ持てこといふがら、小僧は障子を締めでれ、風呂敷がら瓶蜂の巣を出して轉がしたら、瓶蜂は巣の中でグワン〳〵と唸り騒いだ。そこで和尚様は面白がつて成程これは打ん太鼓だと言つて、居間中を足で蹴轉ばして歩ぐど巣のネズこは拔けで、中がらぶん〳〵と

瓶蜂は飛出したので、和尚様は衣の袖を被つて、ヒョウ〳〵とおそべを吹いて拂ひ除げながら、これや小僧これや小僧、大變だがらそちさ持て行げどいふがら、小僧は障子をあげで其瓶蜂を追ひ出し巣を持て行て投げで來た。それがらは和尚様も小僧さ難題を仕かけなくなつたどさ。どつとはらい。

一六　二束四束

昔あつたぢもな。とゞ(夫)とかゞ(妻)は、今晩刈上げ餅を搗て居るところさ、ボサマ(座頭の坊)は來て泊つたので、ボサマし〳〵、お前は二そく四そくはか(食)ながべなすといふと、ボサマはハア俺は二足四足はかなへますと言つた。そこで今夜俺方で餅を搗だども、あつちの田がら二束こつちの田がら四束と刈つた稻で搗だ餅だがら、それでは上げられないど言て戸棚さ仕舞つた。そしてボサマはね(睡)たらば起で食ふ氣で、かゞはとゞし〳〵、お前の足の母指さ綱こをつけて寢でござへ、夜中に俺は引張るがら其時起きで食べしとて寢だ。

それをボサマはねたふりして聞でで、とゞとかゞは寢入た頃、そろつと(靜)起ぎでとゞの足の母指がら綱こをといで、自分の足の指さ結びつけて置いだ。すると、夜中にかゞは目を覺して、綱こをパ

ク〳〵と引張ると、ボサマは起ぎで行ぐどかゞは暗まぎれでとゞだど思ひ、戸棚の前さ二人で行ぎ餅を食ながら、あのボケは知らないで睡て居るべなと惡口を言ひながら食ひ上げで來て寢だ。其あとでとゞは目を覺して、ザエ〳〵、餅を起ぎて食べなとかゞを起すど、かゞは何したてこの人は、さつき起ぎで食たけぜといふと、とゞは俺は起ぎで食べあ、足に綱こはとれで居るがらあのボケに起きで食れたのだ。けちなボケだ起きで叩きつけでやるとごせやい(立腹)で高聲になるど、ボサマはそれを聞ぎつけて、早く支度をして跳ね起ぎだ。

ボサマは逃げる拍子ににわ(土間)から藁打槌を擔んで外さ出で、それを河戸さ投げこんで行つた。夜はまだ暗がつたがら河戸でドブンと謂ふ音はしたので、とゞはボサマは河戸さ這入たのだと思ひ、かゞに戸板をはづして持て來らせ、それを河戸さ蓋にして其上さ馬乘りに乘て、ボサマを逃さないやうに押へて居たら、河戸の中で時々ゴブンと音を立てるので、とゞは夜は明げだら叩きのめしてけるがら、だまつてろと言ひ〳〵して居る内に、夜は明けで來たがら戸板を取て見れば、ボサマと思つたのは藁打槌であつて、それは水の中で浮ぎだり沈んだりして、ゴブン〳〵と音を立てるのであつたどさ。どつとはらい。

一七　雁（がの）　汁

昔あつたぢもな。或日爺ナは野原さ行ぐど白犬こは居だので、めごい(可愛)犬こだと思つて連れで來て飼て置ぐど、其白犬こはおがつてがら、爺ナさしし(鹿)狩にあへでござえと言ふので、婆ナさ握飯を握らせて犬こさつけで爺ナは鉞（まさかり）を持て出掛るど、途中で犬こは鉞をおれさつけろと言つた。鉞をつけでエエコラ(良い程)え(行)ぐど今度は、爺ナに乘（の）されと言ふがら爺ナも乘さると、犬こはブングリ〳〵と走て奥山さ行てれ、

あつちのしし(鹿)もこつあこう、

こつちのしゝもこつあこう。

と呼ぶと、彼方の山がらも此方の山がらも、しゝはブングリ〳〵と馳（はせ）で來て集つたので、それを爺ナは鉞でぶぢ(打)殺して、犬こさつけで家さ持て來た。

そしてしゝ汁を煮て食て居るど鄰の慾たがり婆ナは、こつちでは何をしてるどと謂て來たので、俺方の犬こは爺ナと山さしゝ狩に行てしゝを取て來たがら、しゝ汁を煮て食てだ所だがら這入てあがてござえと言ふと、婆ナは笑止だどもそれでは貰て食べ（く）とて食ひ、ええこら(良い位)食つてれ、びあこ(僅)殘してあまりうまいがらこれは俺方の爺ナさ持てで食せべ（か）といふがら、お前達の爺ナさばこつちがらやるがらそれは食（あが）てございとて、別にじゆこ(重箱)さ入であづげてやるど、それを厩（むや）のすまこ(隅)さ行てみどこ(肉)は拾て食てがら、其したじ(汁)さ馬の糞を入れで爺ナさ持てゝ爺ナ〳〵、今鄰ではしゝ汁を煮で食てだので貰てくたらば、これは爺ナさ上げろとて貰て來たはてあがてござえと出したがら、爺ナは馬の糞臭へどもうまござるといつて食つた。

次の日になつて鄰の婆ナは爺ナに、鄰さ行て犬こを借りで來るがら、俺方でもしゝ狩さ行てござえとて、俺方でもしゝ狩さえぐがらお前達の犬こを貸してたもれとて借りで行ぎ、鄰の爺ナは犬こはつけろとも謂はない握飯だの鉞だのをつけ、乘されとも言はないのに、爺ナまでのさつて家を出はつた。すると犬こはブングリ〳〵と走せて廣い野原さ行ぎ、

彼方のばぢ(蜂)もこつちあこう、

こつちのばぢも此方あこう、

爺ナきんたま(睾丸)刺しくらへ。

と言ふど、彼方の蜂も此方の蜂もブン〳〵ブン〳〵と飛んで來て、爺ナの睾丸をヂガボギ〳〵と刺したので、睾丸は腫れで大きくなつたがら、爺ナはどせやいで犬こを叩ぎ殺して、土さ埋め其上さ米の

木を挿て、うん〳〵うなつて家さ漸く戻つた。

それがら經て、鄰では貸した犬こをよこさないので、なぞにしたと思ひ取りさ行ぐど、鄰の爺ナは唸て寢でれナニお前達の犬のために、俺は蜂に睾丸を刺れで痛くて堪らないがら、撲ち殺して土さ埋で米の木(噴雪花)を挿て來たがら、行て見たらば米の木はあつたがら、行て見でござえと謂ふので、それを家さ持て來てゑ(植)で置ぐど、次の年になつて其米の木さ花はゆる〳〵と咲き、實はくずれる程なつたがら、下さ莫蓙を敷で、

錢も金もざぐぶぐ。

と稱へでほろぐと、錢だの金はざんぐぶんぐと莫蓙さ落ちだ。

そこざ鄰の慾たがり婆ナは、こつちでは何をしてるどとて來たがら、米の木をほろつたらば錢だの金だのは落ちたので、今さらつ(集)て居る處だと言ふと、俺方さも其米の木を貸してたもれとて、借りでゝ植で置ぐど花は咲で實はなつた。そこで喜んで自分の寢敷莫蓙だの、嫁の寢敷莫蓙だのを其木の下さ敷ぎ、錢も金もといふのを、

べど(牛)の糞もべだぐだ、

馬の糞もべだぐだ。

と謂てほろぐど、べどの糞だの馬の糞だのは莫蓙の上さべだぐだと落ちだので、臭くてよつてづげな

いがら、其莫蓙を川さ持てで洗つたらば、中々ちよつとかとに乾せないで敷て寢られながつたので、けづな米の木だとて伐り割て竈の口さくべだ。何日經ても鄰で米の木をよこさないがら、こだへかねで取りさ行ぐど、鄰の婆ナは米の木を返す處が、べどの糞だの馬の糞だの生て、寢敷莫蓙をぬらして迷惑すたがら、伐なぐて火さくべ、ただし、あく(灰)でも持て行げと言ふので、仕方なく竈の口がらあくを持て來た。それから秋になりがの(雁)はグギアガギア〳〵とさがで屋根の上を渡るとぎ、爺ナは屋根さ登てれ仕舞て置だあぐを取り出して

がの(雁)のまなぐ(目)さあぐ(灰)這入れ。

と撒ぐど、がのゝまなぐさあぐは這入てばだ〳〵と落ぢだがら、それを取てがの汁を煮で食て居るど、又鄰の慾たがり婆ナは、こちでは何をして居るどうとて來たがら、米の木のあぐでがのを取て、今がの汁を煮て食てらがら這入てあがれといふと、笑止だども貰て食べなとて食てがら、みどこを二つ三つ殘して、あまりうまがらこれは爺ナさ持てゝかせべといふがら、爺ナさばこちがらやるがら、それはあがれといつて別に重こさ入れて持たせてやるど、又厩のすまこでみどどこは皆食て、其したぢこさ馬の糞を入れで、爺ナ〳〵、がらがの汁を貰て來たがらあがれと爺ナにかせるど、爺ナは馬の糞臭いどもうまござるとて食つた。

そして俺方でもがの汁を煮で食べとて鄰さ行てあぐこの殘りを貰て來で、がのゝ渡るとぎ爺ナを屋

根さ上げでれ、其あぐこを撒せだら爺ナは間違て、
　爺ナのまなぐさあぐはいれ。
と言て撒たので、爺ナはまなぐさあぐを入れで屋根がらごろ〳〵と轉び落ちるど、下には婆ナだの嫁だのは藁打槌を持て待て居だので、それあがのは落ぢで來とて爺ナを叩ぎ殺して鍋さ入で煮だ。それでねだがら食べと思て、爺ナはまだ屋根の上さあがつてらものと思ひ、爺ナ〳〵、がの汁はねだがら下りで食てございと呼ぶど、鍋の底でほうえと返辭をしたので、それや爺ナを煮だと思ひ鍋の蓋を取て見だらば爺ナであつた。人の眞似すると大水を食ふとはこの事だとさ。どつとはらい。

一八　山　婆

昔あつたぢもな。山寺の小僧は後の山さ行て柴を伐て居るど美しい女ごは來て、柴を刈て馬さつけてすけ(助)でれ今晩夜話にこえと約束して別れだ。そこで小僧は夕飯を濟すと夜話に行て來ると謂ふと、和尚樣は何處さ夜話に行ぐと聞がれだので、今日山で柴を刈て助けられた女ごと約束して來たがら後の山さ行ぐと言ふと、和尚樣はそれは女ごではなく山婆だべがら行ぐなと留めだども、小僧は行

きたくてたまらないがら女ごだがら、是非行ぐと言ふので、和尚樣はそれでは萬一のために此お札を持て行げとて、ありがたいお札を三枚けでやつた。
　そこで小僧は後の山さ行ぐど、向ふの方にあかしこ(燈火)の影は見えたので、それをたよりに行て見るど一軒のあばら家はあつて、山婆は火さあだつて居だ。それで小僧はおつかなく(怖)なつたども歸るには歸られずエヘンと咳ばらいをするど、山婆は小僧がよく來た這入れと言ふがら、內さ這入てすこもこすると屁はビツと出だ。そしたら山婆は何したと言ふがら、小僧は手水所(厠)さ行きたくなつたますといふたら、そだらば逃げられてはならないがら、腰繩をつけでやるとて、小僧の腰さ繩をつけてやつた。小僧は手水所さ行ぐど、腰の繩を解いで柱さ結びつけ、和尚樣がら貰て來たお札を一枚挾んで、山婆はよいがと謂たらば、まだと言へとて山を逃げて下つた。
　山婆は小僧の歸りはあまり久しいので小僧まだがと言ふと、札こはまだと返辭した。それがら少し經つと、小僧まだがと言ふとまだと返辭するがら、山婆は待ち兼て、まだだ〳〵とはあんまり長ぴりな小僧だとて、腰繩を引張ると手水所の柱は拔けでする〳〵と引摺られで入口まで來たので、山婆はこりや小僧に逃げられだとて其あどをどん〳〵追かげだ。そこで小僧は山婆に追附かれそうになつたがら、もう一枚のお札を後さ大きな茨藪は出ろとブンと投げると、見る〳〵內にもれ〳〵と茨藪は生えだがら、山婆はあつちさ越えこつちさ越えして居る內に、いつの間にか其茨藪を越えでどん〳〵追

掛で來たので、又追附かれさうになつたがら、今度は大きな川は出ろと一枚のお札を投げると、すぐ水はごわ〳〵と湧き、岸はがら〳〵と崩れで大きな川は出だので、山婆はそれをあつちさ行きこつちさ行き渡り兼で居る内に、小僧はやつとお寺さ駈けつけで、和尚様しお前様のいはれだ通り、今山婆に追掛られて來たがら、何處さが匿してけろと言ふので、石の唐櫃さ入れてかくすた。

そこさ山婆は駈で來て、今小僧は逃げで來た筈であるがら出せと言ふと、和尚様はそたなものは來ないといふたら、山婆は來たに相違ないがら出せ、出さないならばお前を食ふがよいかと言つた。すると和尚様は、たとへ食はれでも來ないものは出されないと言へば、そだらばお前を食てけるとて、山婆は和尚様を頭がらがり〳〵と食つた。

お寺ではその日がら鐘を撞がなくなつたので村の人達は不思議にして來て見るど、和尚様は何がに食はれで、お寺は空になつてゐだがら、小僧はなぞになつたかと思て探すと、石の唐櫃で何か音するので、それを開げて見たらば、小僧は白犬こになつてケンケンと鳴いでゐだたとさ。どつとはらい。

一九 化げ茶釜

昔あつたぢもな。もんぢやの吉は博奕に敗げで程島のあたりを通つて歸るど、狐に行ぎ逢つたので、狐殿々々、俺に一つ賴まれてはくれまいかと言ふと、狐はそれは又なぞな事だどいふがら、外でもないが上等の茶釜に化げで貰ひたいと話すと、狐は小豆飯一重さ脂鰊一把持つて來たならば賴まれるとの事で、もんぢやの吉は早速、小豆飯一重さ脂鰊一把を添へで行ぐど、狐は藪この蔭こさ行つてれクレツとトムクレル(中返り)と、立派なアラネ(霰)釜に化げだ。それをもんぢやの吉は風呂敷さ包んで、山寺さ持てて和尚様を騙して三兩に賣附けだ。

和尚様は氣に入つた茶釜を買つたものと思ひ込み、早く湯を沸して見たくなり小僧を呼んで、此茶釜を前の川さ持てて磨で來いと言附けだ。そこで小僧は川さ持て行ぎ、砂をかげでゴシ〳〵と磨ぐど、茶釜は、痛い小僧さと(少)磨げと言ふから、小僧は和尚様し〳〵、この茶釜は、痛い小僧さと磨げと言ひますと告げると、和尚様は新し茶釜はそう言ふもだがらよく磨げと言ふので、又砂をかげでゴシゴシと磨ぐど、茶釜は又痛でや小僧さと磨げど言つた。それがら水を入れて圍爐裏さかけで火を焚ぐど今度は、あつでや小僧さと焚げと言ふから、小僧は和尚様し〳〵、今度は、熱でや小僧さと焚げど言ひますと言ふと、和尚様は新し茶釜はそう言ふものだがらうんと火を焚で早く沸せと言ふた。

そこで小僧はうんと火を焚ぐど、茶釜から耳は出だので和尚様し〳〵、茶釜からあれ耳こは出だますと言ふと、頭を出し尾ばを出し足を出したりすて、

熱つでや小僧ぐわえん、
はけでや和尚ぐわえん。
と叫んで、狐の正體を現はして後の山さ逃げで行つてしまつたどさ。どつとはらい。

二〇　たご馬

昔あつたぢもな、或馬喰は春先ぎの夕暮にたご(軟蹄)馬さ乘て、干泥田の畔をビグタラシヤグタラと來ると、足をふみはづして田さかへばり(河外れ)して、ひどぐ寒がつたので、家さ來るど火を焚で帶を解ぎ腹を焙たらば、よいあんばいに溫まるど干泥田で尻をたれた時、けつ(屁)がら這入たものと見え、腹の中でビツキ(蛙)はゲアゲアググ〳〵と叫び出したがら、これはこど(大變)な事したと思ひ、伯樂を賴んで見て貰ふと、鵜の鳥を飲んでやれば、ビツキは飲まれて居なくなるとのことなので、鐵砲打を賴んで鵜の鳥を取て貰ひ、それを飲んでやるど、お蔭で其ビツキは居なくなつたが、今度は鵜の鳥は腹の中であばれ出したので、又伯樂を賴んで見て貰つたらば、それならばけつがら熊手を入れで鵜の鳥を引出したがよからうとの事で、熊手を入れで搔ぎ寄せだら、成程鵜の鳥は出で來たが、

それと一緒にはらわた(腸)まで出だので、醫者を賴んで來て見で貰つたら、それではあつぱ(お袋)の綿入の裾綿と、嫁の綿入の裾綿とを煎じて飲むと、腹鹽梅はよくなると言はれだ。

そこであつぱの綿入の裾綿と嫁の綿入の裾綿とを取て煎じて飲むど、果して腹あんばいはよくなつたども、今度は腹は減て來たので、あつぱ〳〵、腹はへつたとて、ヒボド(圍爐裏)さ握飯を燒いで居だのをいきなり取つて食たら、其握飯さ燠は附でゐだので腹の中の綿さ火はついで、ジヤ〳〵と燒げだがらそこで胸は燒けると謂ふのは、其綿の燒げるのだどさ。どつとはらい。

二一　伊勢詣り子

昔あつたぢもな。或家の小兒は毎朝起ると南の方を見で居たが、伊勢詣りに行きたくなつて、其事を親達さ話して伊勢詣りに出かける事になつた。そして或村を通つて宿を賴むと、此村では一人旅は泊めてならない事になつて居るがら、村はづれの明家さ行て泊れ、といはれたので其明家さ行ぐと、村の若夫達は火を焚で、明家を守つて居たが喜んで泊めてくれ、ここさ酒でも肴でも食物はずつぱり(澤山)置ぐがら、食つて泊てろとて其人達は皆歸つて行つた。

伊勢詣り子は火の側さ夜着を着て寢で居るど、夜中に座敷の方で、のしのしつと大きな音はしたがら何んだべと思つて夜着の袖がら覗いて居るど、座敷の眞ん中さ赤蠟燭は三本立て、赤坊主は三人出で、ぬけ〳〵ぬけ〳〵と踊つた。それがら稍一刻たづと、べカツと消えだと思つたら、今度は常居の方でのしのしつと音はして黑蠟燭は三本立つて、黑坊主は三人出で、ぬけ〳〵ぬけ〳〵と踊つてゐたが、稍一刻程經つとべカツと消えで見なくなつた。すると綺麗な姉様は出で來て、伊勢詣り子、伊勢詣り子と呼ぶから、おかなくて(怖)ぶる〳〵震いながら、低い聲でハイと返辭をすると、姉様は何も恐しいことはない、今座敷の方さ赤蠟燭は立て赤坊主の踊つたのは、座敷の根太の下に金は瓶さ這入てあるのだし、常居の方さ黑蠟燭は立て、黑坊主の踊つたのは、常居の根太の下さ、錢は錢箱さ這入つて掘込んであるのだから、それは皆お前さ生附たのだによつて、掘てお前のものにしろと言つて、姉様は消えてめなくなつた。

そこで伊勢詣り子は其夜の内に座敷の板をはがして、根太の下を掘つて見たら、瓶さ山吹色の金は一杯這入つてあつたがら、それを頭巾こさ入れてすまい、次に常居の板をはがして掘つて見ると、錢箱はあつたのでそれは其儘に埋めて置ぎ、次の朝夜の明けあけに起ぎて火を焚であだつて居るど、村の人達は夕べなの伊勢詣り子はなぞになつたべと思ひ來て見たらば、伊勢詣り子は火さあだつて居たので、夕べなナテ(何)もこながつたかと聞ぐど、何も來ながつたといふので村の人達はたまげて(驚)、

此明家は化物屋敷で、村中でもひどく困て毎晩守て居るものだが、お前には何事もないといふのならば、どうがお前は此明家に居でくれないかと言ふので、伊勢詣り子は兎に角伊勢詣りをしてから、家さ還つて兩親にも相談をして見たいとて、村の人達と約束して無事に伊勢詣りを濟して家さ還り、兩親さ此事を話して、頭巾こに入れて持て來た金を出して見せ、兩親もお伊勢様のお授けであると喜び、連れ立つて其明家さ引越して來て、それがら常居の根太の下がら錢箱を掘り出し、大層な金持となつて榮えたどさ。どつとはらい。

二二　べごこ長者

昔あつたぢもな。晩げな年取だので、町使に行つて來て年を取るべなとて、嚊のほまぢ(臍繰金)を出してとど(夫)さあづけて町さやるど、わらしやど(子供等)はそばがら、とど(父)〳〵おれさばテツポコ(襁褓の二重袖口)を買て來てけろ、おれさば赤い脚胖こを買てけろ、と賴むとうん〳〵と言つて家を出だ。そして暗くなつてもとどは町がら戻て來ないので、家では待あぐんで居るど、炭一俵を背負て遲ぐ戻て來たがら、嚊は年取を待て居だがら何が買て來たましかと聞げば、とどは何も買てこな

い、炭一俵を買て來たと言ふがら、それではわらしやどの物を買て來たましかといふど、それも買て來ないと言うた。するどわらしやどは泣出し、嚊はごせやい(立腹)でぶづ〳〵と小言をいひながら、わらしやどを連れで實家さ戻て行つた。

嚊はごせやぎまぎれに實家さ戻て來たものゝ、とどは何ぞして居るかど案じで、そこつ(密)と歸て見るど、炭一俵を常居さも一杯起し臺所さも一杯に起して、自分はコシビリ(一種の半纏)を倒さにして兩袖さ足を突込み蹈籠のようにそれを履ぎ、常居さ上つては、さゝ御客樣達、ぢつぱり(澤山)あがつて下せと言ひ、台所さ下りで來ては、さゝ若夫達、ぢつぱり食てけろと言つて、行つたり來たりして歩きまわつて居だ。

その内に歩き疲れてそごさ睡てしまつたが、夜中に目を覺すど、はてべゴこ(兒牛)さ何もか(食)せながつたなと思ひ出して、起ぎで厩さ行て見だらべゴこは死んで居だがら、これはことやつた(大變)事した、夜は明げれば元日だがら、今晩の内に此始末をさなくてはならないと思ひ、厩の土臺の下さ埋める氣で、木の尻から木割をもつて來て掘り初めたら、何だが木割の先さがちりとあだつたので、何んだと見れば一つの瓶であつた。それを取上げで蓋を取るど、中に山吹色の金はぢつぱり(一杯)あつたがら、べゴこをそのあどさ埋めて、瓶を床の間さたないで(持)來て供へてだ。

そして次の朝、瓶がら金を二三枚袂さ入れで舅殿さ行けば、舅殿では誰も來たがと言ふものはないので、外でわらしやどを呼ぶと、あれやとゞだとて駈出して出で來たがら、袂の金を出してあづげるとわらしやどはとゞは、何處がらこたな物を出したと聞くので、家さ行げばうんとあるがらとゞと家さかだつてあべと謂つた。それを見てら嚊も出で來たがら、よべな(昨夜)の事を話して家さ連で來れば、床の間は黄金で光り耀いで居り、目出度い元日を迎へだどさ。どつとはらい。

二三 桃賣殿樣

昔あつたぢもな。若者は夏に川の邊を通ると、天女は三人降りで水を浴べて居たので、その一人の羽衣を隱すたら二人は天に登つたけれども、羽衣を隱されだ一人は登り兼で居だので、若者は其天女を連れて來て女房にした。そして働きさば行かないで、毎日女房の顔ばがり見て居るがら、天女は姿繪を描いであげるから、それを畠さ持つて出で眺ながら稼せげとて、一枚の姿繪を描いでやると、若者はその姿繪を竹さ挾んで畠の畔さ立で、向ふのムネ(畦)を打ち時は向ふの畔さ持つて立て、手前のムネを打ちときは此方の畔さ持て來て眺めながら働いで居るど、不意に風は吹いで來て其姿繪を卷ぎ上げて何處さが持て行つた。

すると其姿繪は飛んで行て殿様の御殿のお庭さ落ちたので、役人はそれを拾て殿様さ差上げるど、殿様は御覽になつて、領内をくまなく探して此姿繪の女を召し出せとの言附で、それ〳〵手配をして其天女を尋ね出されて御殿さ召し連れられて、行く事になつたら、天女は若者さ桃の種を三つ渡して此種を植ると三年目には實は生るから、其實を持て殿様の御殿さ桃賣りに來いと言ひ置いて出で行つた。

そこで若者は桃の種を大切にしてそだてると、丁度三年目に見事な桃はなつたがら、其實を取て叺依さ入れ殿様の御殿近ぐさ行て、

桃賣ろ・桃賣ろ。

と觸れて歩いた。すると三年の間一度も笑つたことのながつた天女は、其聲を聞ぎつけると初めて笑つたので、殿様はひどく喜んで桃賣を御殿のお庭さ呼入れ、此處等中を觸て歩げと言附だがら、若者はお庭前を桃賣ろ〳〵と觸れて歩ぐと、天女はゲダ〳〵と笑つたので殿様はたまり兼で、今度は俺は桃賣になるがら、其方は俺の座さ坐て居ろとて、殿様は若者の著物を著て叺依を背負ひ庭さ下りで、

桃賣ろ・桃賣ろ。

と呼び歩ぐど、天女は若者さ逢つた嬉しさになんぼも笑ふので、殿様は自分のなり(格好)は氣に入たものと合點して、桃賣ろ〳〵と觸れで、門の外まで出て觸れたら門番は來て、この桃賣は不埒な者であるとて、門を締めで殿様を追出したので、若者と天女は御殿で末睦ましく榮へだたとさ。どつとはらい。

二四　播磨の國糸長庄司

昔あつたちもな。百姓の若者は三人お城の草取りに上り晝休みの時に四方山の話をしながら、一人は俺は一生に一度でよいがら、殿様の召上る通りのお膳立をして食つて見たいと謂ふと、又一人は俺は殿様のお藏さ積んである千兩箱を一つあれば、外に望みは無いと話し合つた。ところで一人の若者は默つて居だので、二人は無理に希望を喋らせるど、其若者は俺には別に望みはないが殿様のオガダ(奥方)をけるならば一人欲しいと言つた。これを塀の内で役人は聞いて居で殿様さ申上げるど、殿様はその三人の百姓を庭前さ呼び出せとの事で呼び出されたが、三人は恐れ入つて着て居だけら(蓑の類)こをがざがざ慄はせて庭前さ行くど、殿様は先きに立た若者に向て、其方は晝休みに何事を話したかと訊されたから、其若者は殿様の召上る通りの御膳立をして戴きたいと話したと恐れ入て申上げだら、殿様はそれなら俺の食ふ物と寸分違はぬように膳立して、此百姓に食事を取らせろと役人に言附かつた。次の若者に向つては、其方は晝休みに何事を話し合たかと問ふと、其若者は正直に、お藏にある千兩

箱を一つほしいと話したと申上げると、殿様は役人さ千兩箱を一つ取出して遣はせと言附になつた。それがらあとの若者に、其方は晝休みに何事を話したか正直に申せとの事で、若者は自分は一番悪い事を話したからなぞにされるかと恐れて、ふるい聲で私は殿様のオガダを一人欲しいと話したと申上げると、殿様は機嫌よく、それでは明日お城の庭で花見をするから、其方は中門の脇さ立て居で、そこを通る女中の中がらお前の好きな女を一人押へて連れてけとの事であつた。

そこで若者は、次の日早くお城の中門の傍さ行て待ち構へて居たら、其處をぞろ〳〵と花見の女中だぢは通るので、まづ一番先きさ通る女中さ手をかけると、何んだ此無禮者がと言つて其手を拂つて通り過ぎだ。次の女中もまた次の女中も、其通り過ぎて行ぎ、後にたつた一人殘つたので、若者は今度こそは、是非に押へなくてはならないと思ひ、其女中の過ぎるのを力を出して押へたら、セセホホセセホホと笑つて言ふなりに押へられだ。そこで其女を連れて來て女房にして毎日其側を離れないで居るど、女はこれでは家業の爲にならないから、薪でも採つて來いとて山さやつた。

若者は山から還て來ると女は家に居ながつたので、途方に暮れで女のいつも坐て居る處さ坐てそこらを見るとも無く見まわしたら、障子さ針を刺してみず(糸筋)を針さ長くつけてあるから、女の生國は播磨の國糸長庄司であるものと思ひつぎ、すぐに旅立してはる〳〵尋ねて行けば、果してそこは女の生國であり、若者は三番目娘の聟であつたので、舅殿は大層に喜んで聟達を皆よび寄せでしし(鹿)

狩をやる事になつた。すると上の聟達は乘馬さ乘つてゆん〳〵野原さ駈出したが、若者ばがりは乘馬さ乘つたことは無いので、乘るには乘さてもおかな(怖)くて、馬の上でおんかないでや〳〵と叫ぶと、馬はます〳〵駈出すのを、舅殿は後ろからそれを聞いで、三番目聟は馬は達者でありあ馬上で謠を歌て走せるとて褒めだ。そして野原さ行ぎつくと鹿は二三匹ごろ〳〵と斃れで居だので、若者は其鹿さ矢をぼつ〳〵とさして置ぐど、そこさ舅殿は追附で來て、三番目聟は弓矢も上手であるとて、其鹿を家さ運んで來て鹿振舞をやつたどさ。どつとはらい。

二五　伊勢詣り　猫

昔あつたぢもな。夫婦ぐらすのため留守人はないので、おや(本家)さ行て猫を借りで來て留守させで、毎日稼ぐさ出では夕方歸つて來るど、猫はニャア〳〵と啼いで出迎をした。夫婦は或晩おやでは婆様でも貸してければ、挽臼でも挽いでスミシモノ(混物)を食ふによいが、猫を貸してよどしたがらさつぱりつまらないと話合つた。それを猫はだまつて聞いで居だが、夫婦はいつもの通り還つて來るど、家の中でごろ〳〵ごろ〳〵と音はするので、オヤの婆様でも來て挽臼をふいで居るのかと思ひ覗

で見たば、猫は挽臼の柄さたもづで(取附)ぐる〳〵ぐる〳〵とめぐつて粉を挽いで居るのであつた。そこで夫婦はたまげ(驚)で、おらは猫だと役に立たないと言つたがら、挽臼を引いでくれだのがと、早速スミスモノをこさえて食ひ、猫にお前のお蔭で久しぶりにスミスモノをこさえだがら、うんと食てけろと謂つて食せだ。

そうしたら或日猫は夫婦さ伊勢詣りにやつてけろと物を言ふので、それではオヤの猫だものオヤさ行て相談をして來るとて行つて相談をして、猫の首さ伊勢詣り猫といふ袋を下げさせ伊勢詣りさ出してやつた。すると猫は道々に人の家さ寄てはニャア〳〵と啼くと、あれや伊勢詣り猫は來たとて、物をか(食)せたり錢をけだりして、首尾よぐ伊勢詣りをすると、其功德で歸りには歳とつた尼の姿になつた。

そして或村さ來て宿を賴むと、此村では一人旅を泊めてはならない掟だがら、氣の毒だども村はづれの明寺さ行て泊れと謂ふので、そこさ行て宿を取るど大勢の人達は火を焚で守つて居たが、喜んで泊めでけで其人達は歸つて行つた。尼は一人火さ當つて居だら、本堂の方で恐しい物音はして、黑ベゴ(牛)のような鼠は出で來たので、尼は睨めると鼠は引込んでしまつた。それから暫くするとまだ物音はして今度は赤ベゴのような鼠は出で來たが、それも尼に睨められて引込むと、次には一番ベゴのような大鼠は出で來て飛びかゝつた。尼はその鼠と上になり下になり、やゝ一刻ばかり闘て退治すると、

初めの黑ベゴのような鼠は又出で來て飛びかゝり、上になり下になり闘つたが、これも一刻ばかりして尼に退治されだ。

するどさぎの赤ベゴのような鼠は出で來て飛びかゝつたが、尼もひどく勞れきつてとう〳〵本性を現はして猫となり、上になり下になり闘て居る內に夜は明けはなれ、村の人達はよべな(昨夜)の尼はなぞになつたべと揃つて寺さ來て見るど、ベゴのような大鼠は二疋旣に退治されてあり、今赤ベゴのような鼠と首さ袈裟をかけだ猫とは闘ひ最中であつたが、猫はつかれで危く見えたがら、村の人達はやあ〳〵と鬨聲を擧げで猫さ助太刀をするど、元氣を取り直して其鼠も退治したけれども、猫も手傷を負ふたので終にめ(命)を落してすまつた。そこでこれを不憫に思ひ、其寺のうしろさ猫塚をこしらへて厚く埋めてあるとさ。どつとはらい。

二六　もんぢやの吉

昔あつたぢもな。もんぢやの吉は長者殿で嫁子を捜して居るづのを聞込んで居で、野原の方さ歩いて行ぐと、藪このかげこで狐は化げ競べをしてるのに逢つたがら、や狐殿々々、お前達は何をして居

ると聲をかげだ。すると狐は吃驚して誰がと思つたら吉さんかと言ふので、もんぢやの吉は時にさ長者殿では嫁子を捜して居るづがら、お前達の仲間で花嫁に化げでくれないがと頼むと、狐どもは油揚と小豆飯を持てくれば雜作もない事だといつた。

そこでもんぢやの吉は長者殿さ行て嫁子を世話する事に話をきめで、油揚と小豆飯を支度して狐の所さ持て行き、いつそれいつか(幾日)に人數は凡三十人ばがりに、馬一手網(七匹)の、嫁取りに化げでけろと約束をした。それで愈よ嫁取りの日となつたので、長者殿では萬端仕事をして待て居たが、其時刻になつても仲々嫁子は見えないので待ちあぐんで居ると、よま(夜)になつて野原の方さちらちらと提灯は三十ばかり見えて、仲人の吉は先に立ち、代粧馬だの簞笥・長持から諸道具擔ぎやら、ザングブングと嫁取りの行列は長者殿さ這入て來て、緣側からどやゝと上るど、提灯を一人々々から受取て、緣側の天井さずらりと吊すた。

そして座敷ではうんと御馳走を並べて酒を注ぐやら、歌へ踊れと盛んに酒盛りをして居る最中に、台所の方では、肴や吸物はべらりゝといつの間にか無くなつた。其の内に御祝儀もおうざ(大略)になり仲人の吉は歸り、お客人達も歸る者は歸り泊る者は泊つた。次の朝になつて長者殿の旦那樣は、緣側の戸をガラリゝ開げるど、天井がら頭さぶつちかる物ばあるがら、何んだと思ひ見たら、馬の骨は三十もがらりと吊さつてるから、はてなと其邊を見ると、緣側の板の上さ狐の足形は一面につい

て居るので、家内の者を呼び起して方々を見せると、え(家)の中ぢう狐の足形だらけで、座敷さ行て見たらば泊た筈のお客人は一人も寢で居らず、嫁子の床を見ても嫁子は寢てなえがら、夜着をふたぐて(剝)見るど、古い狐は床の中さ丸くなつてねつ(睡)て居だたが、どてん(驚)してはね起ぎだがら、それと若夫達(若者)は其狐を押へようとすたら、座敷の小障子をけやぶり逃げて行つた。

そこで長者殿ではもんぢやの吉に騙されだと思つて、吉の所さ若い者を使てやると、吉の所では目腐なお袋は一人居で俺方の吉は奥(二戸・三戸地方)さ馬喰に行て、今日でなぼそれ(何日)になるがまだ歸て來もさぬとの事であつた。それがら四五日經づと瘦馬を引いで、吉は長者殿の前を馬方節を歌ひながら通るので、呼び止めて嫁取りのことを糺すと恍たふりして、此間俺は奥さ馬喰に行て今歸つて來たばがりだもの、狐の嫁取りなどは俺夢にも知らない事だと言ふので、長者殿でもあきれでそれきりになつたどさ。どつとはらい。

二七　仙北町のとんてぎ

昔あつたどさ。仙北町のとんてぎ(周章者)は、志和の稲荷さんさ參詣にえ(行)ぐ氣になつて、嗚や

え〳〵、あした(明日)早ぐ稲荷詣りにえぐがら、今夜の内に握飯を支度して置いてけろ、と言附けて寢だ。次の朝間になるど暗い内に起ぎで、寢て居だ嚊さ握飯を何處さ置いだといふと、嚊は戸棚のすま(隅)こさ置いたますと言ふのを、ヒボド(圍爐裏)のすまこと聞違ひ、ヒボドの隅を探すとお齒黑壺は手にさわつたのでそれを持ち出して、風呂敷は何處にあると聞ぐど、座敷のすまこさ置いたと言ふのを寢床のすまこと聞違ひ、寢床の隅から嚊の腰卷を捜す出してそれさ包んだ。それがら脇差は何處にあると聞ぐがら、箪笥の引出しにあると言ふのを、走り前(流し)をかま(掻廻)して、擂粉木を探し當てゞそれを腰さ差し、編笠を尋ねべ、と思つて土間がらわらだ(物を蒸す時鍋に敷く)をめけ(見附)で被り、脛巾を片方履ぎ片方は梯子さ結附けで、草鞋を履ぎさつさと家を出がげだ。

夜は明けはなれで人色の見える頃升形を通ると、あれや〳〵わらだを被つてえぐ人はあると、言はれだがら、そこを行ぎ過ぎで編笠を取て見れば、それはわらだであつたので、忌々しいと思ひ田の中さ取つて投げ、又さつさと永井のあたりさ來ると、あれや〳〵はゞぎかたふた(片方)はいで行ぐ人はあると笑はれだがら、はてなと思て見ると、いかさまかたふた履で居るので、行ぎ過ぎでがら脫いで畠さバイラと取て投げだ。そして幅がけさ行ぐど、あれや〳〵擂粉木を腰さ差してえぐであと言ふがら、腰を見るど成程自分は、擂粉木を脇差の積りで差して來たがら笑止になり、そこを過ぎでがら野原さ取て投げて行つた。

いよ〳〵稲荷さんさ着いたので拜殿さえつて、あとだい家内安全・五穀成就と手を拍て拜み、百の錢緡から三文を抜いで撒ぐつもりで、九十七文の方を賽錢箱さ投げでしまつた。撒でがら氣はついたが仕方はないので三文では吸物も買はれはいので、後の山さ登つて人の見ない處で背負て來た風呂敷包を解くと、握飯だと思つて持て來たのはお齒黑壺であつたがら、これはと思ひグンと山さ取て投げ風呂敷をまぐるとブラ〳〵と手さ紐こは下つたので、よく見たらば風呂敷では無ぐて嚊の腰卷であつたがら、それを丸めてバエと投げ捨てゞ山を下りて來た。どせ腹やげで(怒)稲荷さんを戻て來るど、岩崎の百が店では岩崎川がら白い石を拾て來て、看板にして餅を賣て居だがら、腹はへ(減)てるので此餅はなんぼ(何程)だと聞いで見るど、一つ三文だと言ふがら三文の錢を置いで其看板を持てさつさと出掛けると百は、それは看板だがら餅はこつちから上げると追ひかけるど、代金を置かないと言ふのだと思ひ其處さ三文置いで來たとてかげ出した。えくらい(良程)來てがらあとを見るど百も追て來ないがら、此處らで餅を食ふべと思ひ、ムツリと食ひつぐどガチリと齒を缺いだ。はつと思ふと餅だと思ふたのは石であつたので、並木松の下さ其石を投げで町さ歸つて來た。

家さ行つたら嚊をうんといじめる氣でいきなり駈込み、この腐れ者、何しに今日は俺さ恥をかゝせだと惡く言ふたら、鄰の嚊は何しただどし鄰の人は、おれはお前さ何恥かゝせだと謂はれで、氣は附で見るとそれは鄰であつたのでこれはしたりと飛び出して、近所の店がらお茶を一袋借りで來て申分

する氣で、今度は自分の家さベロリと這入り、先刻はどうも無調法をしてとお茶袋を出すと、内の嚊は早がつたなし何したとべ此人は、と言はれて見だら自分の家さ來て居だので、これはお前さの稻荷さんの土產だと言つたとさ。どつとはらい。

二八　姥皮

昔あつたぢもな。百姓の父親は田の水を娘さ行ぐど、蛇はふるだ(蝦蟇)の片足を呑んでだがらむぞえ(不憫)事だと思ひ、蛇さ其ふるだを放してやつたら、娘三人ある内一人をける約束すると、蛇はふるだを放した。そこで父親は次の朝間朝飯は出ても寢でれ起きないがら、一番目の娘はお父さん〳〵朝飯(あさめし)は出來だがら、起ぎであがつてございと起しに來たがら、父親は起ぎで食ふ事はよいが、昨日田の水見さ行つたら、蛇はふるだを呑んで居たゞし、娘三人の内一人をけるがら其ふるだを助けろと言ふと、蛇はそのままふるだを放したので、お前は蛇の嫁に行つてくれないかと言ふたら、娘は誰や蛇などの嫁さ行ぐ者はあべあとて戻つた。すると二番目の娘は來て、お父さん〳〵起ぎで朝飯を食つてございと言ふがら、又其事を話したら、誰や蛇の嫁などに行ぐ者はあべあとて戻つた。そこで父親は

又寢で居るど、今度は三番目の娘は起しに來てれ、お父さん〳〵私は蛇の嫁に行ぐがら、起ぎで朝飯を食つてございと言ふので、父親は喜んで起ぎで朝飯を食つた。

そこで三番目娘の嫁さ行ぐ支度をする事になつたらば、娘は私は何も支度は要らないが、針(縫針)千本買つてけでけろとの事で、娘さ千本の針を持だせで前の田の畔まで送つて出すど、蛇は立派な男になつて、羽織袴で其處さ來て待て居で連れで行つた。そして蛇は先ぎさ立て森の穴さ行ぐど、此處は俺のすまがえ(住居)だから中さ這入れとて、蛇になつてする〳〵と其穴さ這入ると、穴には蛇共は大勢集つて居だがら、娘は持て來た針を、穴さ投げ入れだらば蛇は大騒ぎをして、ぐれ〳〵と互にぬれめく内に、針のかなげ(鐵氣)にあだつて皆死んでしまつた。

娘は蛇は死んだのでそこらを見廻すと森だど思つた處は奥山であつて、戻るにも方角はわからなく途方に暮れで居るうちに、日はとつぷり暮れでしまつた。すると遙かに向ふに火はペカ〳〵と見えだがら其處さ目當に行ぐど、穢い婆樣は居で親切に泊めでくれだ。次の朝間になると婆樣は娘さ俺はお前樣の父親に助けられだふるだであるが、お前樣は其なり(姿)しては里さ出られまいから、姥皮(うばかは)をけるに依てそれを着て山を下れとの事で、娘は姥皮を貰て着るとよい婆樣に見え、澤水の流れる方さ添てくだると里さ出だので、其處の長者殿(どう)さかま(竈)の火焚き婆樣に世話されだ。

長者殿ではこの婆樣を厩の尻さ寢せて置ぐと、娘は夜になるど姥皮を脱いで自分の着物を着て、書

物を見て居るので、長者殿のあえな(長男)様は手水所(厠)さ起きたが、厩の尻からあがし(燈)は見るので、あやしく思て隙見をすると、綺麗な娘は書物を見で居るがら、それを見染めで戀の煩になつてしまつた。

長者殿ではあいな様の病氣を心配して、醫者といふ醫者、物識といふ物識を賴んで見て貰ても、其病氣は一向に直さうもないので、今度はいだこ(巫女)さ聞で見るど、あえな様の病氣は戀の煩であるがら、想て居る女どに介抱させれば直るとのことで、近所近在のあねこ(娘)達を連れで來て、交る〳〵介抱させたが少しも利目はながつた。そこで今度は家の内そどの、女どと謂ふ女ど共を集めで介抱させる事にしたら、それを枕元さもよせつけながつたがら、途方にくれで親類達と相談するど、かまの火焚ぎ婆様も女どだがらそれに介抱させで見だらとの事で、湯を立で其婆様を入れることになつたら娘は姥皮を脱いで湯さ這入り化粧して、持て居る着物を着て靜々と座敷さ通り枕元さ行て、あいな様しあいな様しお藥おあがりなさいと言ふと、死に堪える程のあえな様はあいと言ふて、藥を飲み食も進んだ爲め、病氣は薄紙をはぐ様に日增に快くなつた。

そこで長者殿では此娘を嫁に欲しいとのことで、親元さ話合て貰ひ受けだとさ。どつとはらい。

二九 猿の夜盗

昔あつたぢもな。猿と蟹は山の上で餅搗ぎをしたぢもな。猿は杵取り、蟹はあえんどりや(合取)すると、猿は自分ばりして食ふ氣で、餅は搗げた頃臼のはぶかけ(緣)を搗と、臼は山がらごろ〳〵と轉び落ちだ。そこで猿はその臼にかだつて(添)一緒に驅け下りると、蟹は猿に餅は取られたものと思ひ、ヨチヤ〳〵と下りで來たら、餅は道ばだの木の根こさ引掛てゐたがら、それを澤さ持つて行つて、洗ひながら埃こを取り〳〵食つて居た。猿は臼さかだつてころび落で見ると、臼の中に餅は無がつたので、又山さ上つて行たら、蟹は澤で餅を洗ひながら食つて居だので、蟹どナ〳〵、ごみこのついだ處でもよいがら、俺さも餅をけでたもれとせう(言)ど、蟹は埃こはついでもオツパリ・ヒツパリけ(食)ばうまござるとせうので、猿はごせやいで(怒)おべ(覺)でろ、晩げな夜盗にえつてけるがらとて歸つた。

そこで蟹は餅を食ひあげで、猿は夜盗に來るがら家で泣で居るど、そごさトリコ(鷄)はコケココど來て蟹どナ〳〵何しに泣て居るとせうがら、蟹は晩げな猿は夜盗に來るので泣で居るとせうど俺はヒ

ボド(圍爐裏)さ卵をなしてけるから、泣なとて卵をなしてえつた。蟹は又クシ〳〵と泣で居ると次には針はヂカホキ〳〵ど來て、蟹どナ〳〵何して泣で居るとせうがら、蟹は晩げな猿は夜盗に來るがら泣で居るとせうど、それでは俺は莚さ刺つてるがら泣なとて、臺所の莚さ刺つて居でけだ。蟹はそれでも泣でるど、ベゴ(牛)はノタラ〳〵と來て蟹どナ〳〵なにして泣でるとせうがら、晩げな猿は夜盗に來るがら泣でるとせうど、それではニワ(土間)さ糞をたれてえぐがら泣なとて、糞をたれでえた。蟹はまだクシ〳〵泣でるど、今度は臼はどろ〳〵と轉んで來て、蟹どナ〳〵何して泣でるがとせうがら、蟹は晩げな猿に夜盗さ來られるがら泣でるとせうど、臼は俺は梁さ上つとるがら、お前を鋏を磨(とぎ)でみづこが(水桶)さ這入てろとせつて梁さ上つて居だ。

そこで蟹は鋏を磨で水こがさ這入て居るど、晩げなになつて猿は蟹は居だが、蟹は居だがとて來てれ、あゝ寒がつたとてヒボドのホド(眞中)を掘て當るど、卵はバチンと猿の……さはねたので、熱つ熱つと叫びながら水こがさ……をつこむと、蟹はバチリと挾めば、あ痛いと臺所さ走せで來るど針にザギリと刺つたので、ニワさ逃げてえぐどベゴの糞さすべつて轉んだところを、梁がら臼は落ちで踏つぶしたので、猿汁を煮で食だどさ。どつとはらい。

三〇　阿野様

昔あつたぢもな。和山(わやま)の阿野様では太郎といふわらし(子供)を使て、毎日馬放しにやつてるど、太郎は或日、自分の家がら精(しら)げの糯米を一杯(二合五勺)盗んで來て、それをニタ〳〵と嚙んで野原の松の樹さ吹きかけ、ニタ〳〵と嚙んでは吹きかけして、夕方馬を引で歸て來ると旦那様し〳〵、野原の松の樹さ鷹は巣をくつ(造)てるがら、巣を取りさあえでござえといつた。そこで旦那様は、次の日騙されで、太郎さ梯子をたながせ(持)で行て見るど、成程松の樹さ鷹はいつぱい糞をひりかげで、そこらあたり白くなつて居だがら、太郎に樹さ上がつて、巣を取れと謂ふたらば、太郎は俺は梯子をおさへてるがら旦那様に上れと言ふので、旦那様は樹さ上るど、鷹の巣らしい物はめ(見)ないとて、太郎鷹はどごさ巣をくつてらと聞けば、太郎はやぐど(嘘)、もつと上の枝だがら上さのぼれと言つた。旦那様は騙されて其枝さのさると、太郎は急に旦那様しあれお屋敷さ火はついだとて、梯子を樹がらはづして走つて歸り、おかみ様し〳〵、旦那様は松の樹がら落ちで死んだがら、早く尼になつてございとて、嫌がるおかみ様の頭を坊主にしてすまつた。

そこさ漸く旦那様は松の樹がら下りて戻つて來て、どせやいで(立腹)人夫を頼んで太郎を藤畚さ入れ、前のつつみ(溜池)さ投げ入れる事にした。それで人夫は藤畚さ太郎を入でつゝみさ擔んで行たら、太郎はおい〳〵大きな聲で泣ぐがら、人夫はつゝみさ入れられるのはくやし(口惜)ので泣ぐがといふと、太郎は俺はくやしくて泣ぐのではないが、おがみ様の白鑞の鏡どあつば(母)の白鑞の鏡を盗んでちやらぼぐ(伽羅木)の下さぼつこんで(埋)置いたのはくやしくて泣ぐどいふがら、人夫はそれは本當の事だがと聞くど、太郎は本當にぼつこんであるに依て、それをお前達さけるがら、今行て掘て來てどざへといふので、人夫は太郎を藤畚さ入れたまゝ土堤の上さ置て、鏡を掘るにちやらぼぐの下さ行つた。

そこさ目腐な牛方は牛さ鹽をつけで土堤の下を通ると、太郎は、

目腐れ目の用心・目腐れ目の用心。

と藤畚の中でからだを搖てるど、牛方はこれを見附で何をしてるのだど聞ぐがら、太郎は俺はひどい目腐で目はめなくなつたたのを、こうして此畚さ這入てゆすて居だら、今日で五日目だが此通りめるやうになつがら、お前もこれさ這入て見ろと言ふた。すると牛方は俺も目腐れで困つてるので、直るならば這入りたいとて、騙されで藤畚さ這入るど、太郎は此べど(牛)はお前の行く先さ居でやるとて、引いで行つてすまつた。

人夫はちやらぼぐの下を掘ても〳〵白鑞の鏡は無いので、太郎に騙されだとどせやいで、土堤さ戻て來るど、藤畚で牛方は

目腐れ目の用心・目腐れ目の用心。

と搖て居るのを太郎だと思ひ、この餓鬼は又嘘をついて人を騙してれ何の眞似をして居るとて、共藤畚さ大きな石を入れで、つゝみの中さどぶんと投込んだら牛方は死んだ。それで太郎は家から干餅を一枚はづして來てべどを草さ放すながら、土堤の上さまんぬきだま(眞仰向)になつてれその干餅を食てるど、そどさ旦那様は來て、太郎はなぞして生で來たがといふので、太郎はどんけ(自慢)らしく此つゝみの底さ行げば何んでも有て、干餅でば干餅、べどでも鹽でもこの通り貰て來たど言ふど、旦那様もつゝみの底さ行て見たくなり、それでは俺も連でゝ見せろと言ふと、太郎は旦那様の袂さ石を入れさせ、まなぐをふく(瞑)らせでうしろがら突きのめしてつゝみさ入れ、水底さ旦那様は沈むのを見屆げでがらお屋敷さ歸て來て、おかみ様し〳〵、旦那様は今つゝみさ這入て死んだがら、俺と夫婦になつてどざいとていやがるおかみ様と無理やりに夫婦になつたどさ。どつとばらい。

三一　お吉・お玉

昔あつたぢもな。お吉は先腹の娘でお玉は後妻の娘であつたが、お父さんは留主の間に、ままはは（後妻）はお吉を無いものにすべと思ひ、或時お吉には毒を入れた饅頭をくれ、お玉には毒を入れない饅頭をけで、お玉さ姉さんの饅頭は毒饅頭であるから、それを貰て食なと聞かせだ。するとお玉は姉さん〳〵、あつちさ行て遊びませうとお吉を連れ出して、姉さんの饅頭さば毒は這入てるがら、それは川さ流して、私の饅頭を食ひませうとて自分のなを食はせだ。

後妻は其次には寢で居る所を殺さうと思ひ、お玉〳〵、今夜姉さんを殺すがら、お前は默てろといふと、お玉はそれをお吉さお母さんは今夜姉さんを殺すと言ふがら、姉さんの床さば小豆袋を入れて置ぎ姉さんはおれど二人で寢ませうとて寢だら、後妻は今頃はよい時分だと思ひ、お吉の床さ行て刀でずぱりと斬ると、ざぐりと小豆袋は切れたがらお吉の首を斬つたと思つて、次の朝になるどお吉は起ぎて働いで居るので不思議に思つた。

そうしてる内に後妻は大病に罹て如何なる醫者でも藥でも甲斐はながつたので、物識に聞かせると、

此病氣は今年十九になる娘の生肝を飲めば立所に直ると言はれだ。そこでお吉は丁度ことし十九であつたのでお吉の生肝を取るに、人夫共さ金をけでお吉を駕籠さ乘せ奥山さ擔がせでやるど、人夫共は山さ連で行て此邊はよかろうと思ひ、駕籠を下してお吉を殺すべとしたら、そこさ白犬は走せで來てあたりをくる〳〵と廻てころりと倒れて死んだ。これを人夫共は不思議に思つて、お吉を助けで此白犬の肝を取て歸つた。お吉は山の中さ殘されだから途方にくれてると、日はとつぷり暮れであたりは暗くなつたら、遙かに向ふの方であかしこ（灯）はぺか〳〵と見てたので、其處さ漸く辿りつけば一軒家の內に婆樣は一人居だから、お吉は道に迷て來たゆゑ今晩泊めてけろと賴むと、こゝろよく內に入れで、お前は何して此奥山さ來て道に迷ふたかと尋ねるので、お吉は後妻の爲に此奥山さ連れて來て生肝を取られる處を、白犬のお蔭で助けられた事を話すと婆樣は不憫がつて、その姿では何處さも行かれまいから、俺は姥皮をけでやるからそれを着て人里さ出ろと言ふで、次の朝其姥皮を貰て着て山を下りで來ると人里に出だので、足の向く方さ歩いで來たらば何日目だかにお寺の門前さ出だので、そこさ杖をついで立て居だ。

さて後妻は人夫共は取て來た生肝をのむと病氣は直つたので、今日はお吉の七日目にあたるとてお玉はお母さん姉さんの七日目だから、お寺詣りに行きませうとて二人でお寺さ行ぐと、其寺の門前さ年取つた婆樣は杖をついて立て居だ。お玉と後妻はお寺詣りをして戻りにも以前の處さまだ婆樣は立

て居るので、お玉は姉さんの功德になるがら此婆樣さ錢をけろと言つた。次の日もお寺詣りに行くと昨日の通り其婆樣は門前さ立てるから錢をけたが、又次の日にも婆樣は其門前ざ立て居るので、お玉は姉さんの功德に此婆樣を家さ連でゝ泊ませうと言て、連れて來て泊めると、お玉は其晩から婆樣を大層懷かしく思て、婆樣の側さ行て寢で每晩夜の更けるまで寢物語をして居だ。

或晩婆樣はお玉にお前はおれを誰だと思ふと聞いだら、お玉はお寺の門前さ立て居だ婆樣だと思ふと言ふと、おれはお前の姉のお吉であるとて今迄の事を話して聞せたら、お玉は嬉しく思て一晩語り明すた。そこで後妻は、お玉と婆樣は每晩親しく話し合て居るのを不思議にして、婆樣の聲はお吉の聲に似てゐると怪しく思ひ、立聞をして見ればいよ〳〵お吉であると言ふがら、腹を立て刀を持出してお吉はまだ生で居だがと走り寄れば、二人はどてんして逃げ出し夜にまぎれて走せだ。夜は明げるとそこは往來の街道なので、お吉とお玉は松並木の下さ立て居るど、立派な駕籠さ乘た侍衆は供を連れて通りかゞつたが駕籠を止めで、そこさ立てるのはお吉にお玉ではないかと言ふから見るど、今お父さんは江戸がら歸國する途中であつたので、二人は駕籠さ乘せられて家さ歸り事情を訊ねで後妻の不心得を戒め、それから家內和合して暮したどさ。どつとはらい。

三二　あぐな千繩

昔あつたぢもな。學問好きな若者は座敷さ机を据て學問をして居るど天人のお姫樣はおりで來て、女房にしてけろと言はれたので女房にして居ると、其お姫樣は每日機を織て、三年經て一疋の布を織り上げ、この布を若者に町さ持て行ぎ、これはおらほの見たく無し(醜い)おがだ(女房)の織つたただそ(青麻)布賣ると觸れて歩げと言ふから、若者はその布を町さ持て行ぎ、

これはおらほの見たく無しおがたの織つた、ただそ布賣る。

とふれで歩ぐと誰も買手はながつたので、殿樣のお屋敷の外さ行てふれるど、役人は出で來て內さ這入て其布を見せろと言がら、お屋敷さ行てそれを出して見せたら、殿樣は見て高い値で買ひ取つた。

それから四五日たつて殿樣がら使者はあつて、布賣の若者に早々罷り出ろとの事なので、若者は何事かと思て參ると殿樣は、先日其方が持參した布はサイマンダラと言ふものであつて、只人の織れるものでは無いに依て、其方の女房は定めしいはれある者と思ふから、直ちにお屋敷さ差出せ、若し差出さぬに於てはあくな(灰繩)千繩を速かに持て來いとの事であつた。そこで若者は當惑して家さ戻れ

ば、女房は今日の御用は何んの御用であつたか、お前様の顏色は悪いから心配事でもあるかと聞かれるがら、其事を話したらそれはぢようさのない事であると、十二一重を着て座敷の縁側さ出で、天に向て手をたん〳〵と拍つと紫の雲は棚引いで、天から一人の天女は舞ひ降りで來た。そこで天女さあくな千繩を持て來いと言附たら、天女は舞ひもどつてすぐ立派な箱さ繩千把を燒いてあく(灰)にしたものを、そのまゝ入れて持參したので、若者はそれを殿様の御屋敷さ持て差出した。

そして又四五日すると殿様の御召出しはあつて、今度は鳴神(雷)を連れて來い、さうでながつたならば其方の女房を差出せとの事で、若者は恐れ入て歸つて來ると、女房は今日の御用は何事であつたかと聞くから、鳴神を連れて參れ、そうでなかつたならば女房を差出せとの仰せであつたと言ふと、女房は又十二一重を着て座敷の縁側さ出で天さ向で手をたん〳〵と拍つと、以前の天女は紫の雲さ乘て降りて來たがら、それさ鳴神を持て來るように言附てやつたら、天女は舞ひ戻て程無く鳴神を箱さ入れて持參した。それを女房は若者さ此箱を御殿さ持て行たなら蓋を一寸程あくべし、殿様はもう少し開けろと言ふらば半分程開けろ、もつと開けろと言つた時は蓋を皆取れと言つて渡した。若者は鳴神の箱を御屋敷さ持て行くと早速差出せとの事で、殿様の前で蓋を少しばかり開けて見せると中で鳴神はカラ〳〵コロ〳〵と鳴れば、殿様はもう少し開けろと言ふから半分程開けると、今度はガラ〳〵ピカ〳〵と稻妻まで光て、雨はさら〳〵とよい鹽梅に降り出して來たがら、殿様は面白くなつてもつ

と開けろと言ふので、若者は箱の蓋を皆取つたら、俄に稻妻はビガ〳〵と光り出し、ガラ〳〵ビチンと雷様はお屋敷を搖り動かして、雨は車軸にざあ〳〵と降り出したので、役人共まで恐しくなつてそこら近邊に居たゝまらず、殿様は顏へ上てこりや若者、以後難題を申附ないがら、鳴神を早々持て下れとの事で、若者は靜かに箱の蓋を閉めだら雷様も止み雨も收つたがら、直ぐに風呂敷さ包んで畏て家さ持て歸つて來た。

その後若者は女房にすゝめられで、これまでの禮を述べるに天の梵天王様の處さ行くことになり、天からは龍の駒は迎へに紫の雲に乘て來たので、女房は龍の駒は天の第一門さ行き附ぐと立止てヒイヒイとなくから、其時駒より下りで門內さ進めと言ひふくめられ、若者は龍の駒さ跨ると、駒は忽ち雲さ乘て飛んで行つた。そして第一門さ着けば立ち止まつてヒイ〳〵と嘶いだがら、駒を下りて門內さ進むと、梵天王様は聟の來るのを待て居だがら、若者は御殿さ這入りこれまでの禮を述べ、あらゆる御馳走になつてゆる〳〵當留して居ると、梵天王は一粒食へば千人力のつく米粒と二千人力のつく米粒とを國の土產としてくれだ。

それから廣い御屋敷內をまわつて見て歩いたらば、後の岩屋さ赤鬼は金綱で繫がれて居で、若者を見るど七重の膝を八重に折て米粒のような涙をぽた〳〵と零すから、若者は甚だ不憫になつて思はず千人力のつく米粒を出してくれると、鬼は立處に元氣になつて金綱を斷切りどこさか飛んで行つた。

そこで若者は青ぐなつて此事を梵天王様さ話すと、梵天王はこれは大變なことをした、あの赤鬼はお前さくれだ三番目の姫を七歳の時から懸想して居るので繋いで置たのだが、金綱を放れたら定めし下界さ行て、姫を凌つたに相違ないがら早く還れと言はれで、急ぎ龍の駒さ乘て來るど女房は今赤鬼にさらはれたとて家では騒動して居だ處であつた。

そこで若者は思案に暮れで、日頃信心する內神様さ三七日の願をかけるど、滿願の晩に夢の告げはあつて、この笛を授げるがらそれを吹いでこれから西をさして行げ、するどお前の女房さ逢ふことは出來る、と言れで目は覺めだら枕元に一管の笛はあつた。其笛を腰さ差して西々とさして旅立ちと、それより幾日歩いたが或山の麓さ辿りつけば、そこには嚴重な黑門の建て居る廣い邸はあつた。若者は其門番さ賴んで一夜の宿を借り、腰の笛を取り出して吹いて聞かせると、門番はこれ程面白い笛を今迄聞いたことはないがら、先頃此邸の主人はさらて來たお姫様は毎日毎晩泣てばがり御座るので、此笛を聞せたらば慰むかも知れないとて、これを主人さ行て告げ知せると、主人の赤鬼は喜んで其若者をこゝさ連れて來て笛を吹かせろとの事で、若者を赤鬼の處さ連れて行けば、そこには艱難辛苦して尋ね探して居る女房は、痛ましくも自分の助けた鬼の膝さ抱れて泣て居るから、若者は腰の笛を取出して吹き初めると女房は嬉がつて笑た。すると赤鬼はひどく滿足して、眷屬共を集め若者に笛を吹かせながら酒盛を始めたら、眷屬共は酒と笛とに醉いつぶれ、主人の赤鬼も續いてそのまゝ睡てしま

つた。そこで若者も漸く安心して、女房と此岩屋を拔け出る相談をするど、此岩屋には一打ち打てば二千里走る黑鐵の車と千里走る黑鐵の車はあるが、今二千里走る車は取出せないがら千里走る車に乘て拔け出る事として、二人はそれさ乘て鬼の岩屋を逃げ出した。

その內に赤鬼は目を覺して見たら姫と若者とは居ないので、これは一所に逃げたものと思ひ込み眷屬共を起して探させて見ると、千里走る車は無いがらそれさ乘て行つたと氣はつき、直ちに物見さ上つて遠目鏡で見ると、遙か向ふに姫と若者の乘つた車は雀程に見えるがら、まださほど遠くまで行かぬとて二千里走る車さ打ち乘て追かけだ。すると二人の乘つた車は忽ち追ひつかれたので姫は天さ向つて、何卒我等を助け給はれと聲を限りに叫べば、天から梵天王は赤鬼目がげでさつと降りで來て、今まで汝を不憫と思ひ命だけは助け置いたが、今はこれまでなりと謂ふが早ぐ劍をぬいでずた〳〵に斬り殺したので、姫と若者は危い處を助かり目出度く家さ歸つたどさ。どつとはらい。

三三　脛子たんぱこ

昔あつたちもな。夫婦の間に子供は無いので藥師様さ願をかけてお籠りすると、滿願の夜に藥師様

は現はれで、お前達さ授ける兒は葦の根を尋ねでも茅の根を尋ねでも見當らないけれども、あまり不憫なに依つて一人授けるが、それは脛に孕む兒だがら大事にして育てろと言れだと思て目は覺だ。そこで傍らの女房を搖り起して其事を話すと、女房も同じ夢を見たと謂ふので、二人は喜んで家さ歸り女房に脛を大切にさせて居ると脛はだん〳〵と大きくなつて來て、臨月になるとびやこ(小さ)な男の兒は生れだ。

そこで、これをスネ子タンパ(痰)コとつけて育でゝ居たら、スネ子タンパコは年頃になるとあば(お袋)あば、俺は長者殿さ行てうばこ様(次女)を嫁に貰て來るがら、精白の米を一杯(二合五勺)けろと言つた。お袋はだれやうな見たよな者さうばこ様をけるものはあべあと言ふと、うにや貰つて來るとて米を袋さ入れて貰ひ、それを持て鄰の長者殿の玄關さ行てお頼み申すと言ふと、旦那様はそれを聞きつけて、あれあ誰が來たよだがら出はつて見ろと言ふので、玄關さ出はると誰も居ないから誰も來ないとて內さ這入るど、まだお頼み申すいふがらそれでは鄰の脛子タンパコではないかとて、玄關の下駄を取のけで見だら、下駄の下がら脛子タンパコは出で今晩泊めてけろと言つた。

長者殿では仕方なく家さ入れで、夕飯をか(食)せでがら、旦那様はありあ脛子タンパコさ莚を着せてにわ(土間)のすまこ(隅)さ寢せろと言ふと、脛子タンパコはクシ〳〵と泣ぐがら、何して泣と聞けば、俺はにわのすまこさば寢たくないまし、うばこ様のそばさ寢たいと言つた。するとうばこ様は脛

子タンパコなどを側さ寢せるのはやんた(嫌)と言ふと、旦那様は寢たいといふならば仕方はないだがら夜著の袖さでも入れで寢せろと言ので、うばこ様の夜著の袖さ入れで寢せだら、うばこ様はね(睡)たべと思ふ頃、脛子タンパコは持て來た袋がら米を出して、ニタ〳〵と嚙んでは、それをうばこ様の口びら(唇)さぬだぐり、ニタ〳〵と嚙んではぬだぐりしてがら、おい〳〵と聲を立で泣くので、長者殿では夜中に脛子タンパコは泣ぐがら、何をしたかと思ひ起きで見るど、俺はほいどこ(乞食)して貰て歩いだ米こをうばこ様に食れだがら、悔しくて泣くのだと言ふがら、うばこ様を見ると其の口びらさ米の嚙汁は一杯ついで居だので、うばこ様はそたな事は知らないとじよばた(言ひ張)だも、旦那様はこたな者の米を盗んで食ふような娘は家さ置かれないとて、脛子タンパコさけでやるがら連れで行けと言つた。

そこでうばこ様は脛子タンパコさかだつて鄰さ行ぐど、脛子タンパコはあば〳〵、長者殿のうばこ様を貰て來たと言ふたら、お袋はだれやあうばこ様をうなの様な者さけるものはあるべあ、送つて來て下さつたのだべなしと言ふと、うばこ様はおれは惡い事をしてけられで來たがら、こちさ置で使つてけろと言ふのでお袋もほんとに嫁に來たのだと思ひ、とう〳〵うばこ様は脛子タンパコさ貰はれだたとさ。どつとはらい。

三四　おんちこへんちこ

昔あつたぢもな。もんぢやの吉は博奕に負けたのでぶら〳〵と歸つて來るど、野原の中さ石の地藏様は立てござるから一つ此地藏様と博奕を打てやらうと思ひ、博奕を打ち始めると地藏様は負けたがら金をよこせと責めたらば、地藏様は俺には金は無いが俺をころばすと下に箆こはあるので、それを金の代に持てげとの事で地藏様をころばして見ると、其下に朱塗の箆こはあつたので、つまらない物だと思つたども、それを腰さ差して來たらば急にババ(糞)を垂れたくなつたので、路の脇さたれで腰がら其箆こを取て尻を拭ひ、投げ捨で歩き出すと、

オンチコ・ヘンチコ・ビビビイ、
あたりに此事知らせな。

と尻は鳴り出した。そこでもんぢやの吉は大變な事になつたと思ひ、うるたえ(狼狽)で戻て、捨てだ箆こを拾つて柄の方で尻をふき返すたら音はぎつたりと止まつたので、これは成程よいものだと思附ぎ大事に懐さ入れて持つて來た。

その後もんぢやの吉は箆こを持て、夕飯時分長者殿の手水所(厠)さ這入て隱れで居ると、長者殿では夕飯を濟しあれあ(洗ひ)仕舞は片附ぐど、女ご達は姉子もあべうば子もあべとて、がや〳〵と手水所さ揃て來た。するとうば子様はもんぢやの吉は隱れて居る向ふさ來てちよいと踏板を股ぐど、よい程を見計つて、うば子様のエギミ(尻)を箆こでテラリと撫でたら、あれやおかない(怖)、何んだが俺のけつをなめたとて走り出るど、女ご達は吾先きと手水所を出でしまつた。その内にうば子様のエギミは、

オンチコ・ヘンチコ・ビビビイ、
あたりに此事知らせな。

と鳴り出してだん〳〵高くなるので、長者殿では心配して醫者よ法者と賴んで見せだけれども直らなく、困り果でたあげくに門前さ高札を立てだ。

もんぢやの吉は今頃はよがべなと思て長者殿さ行ぎ、こちらのうば子様は御病氣のよしを高札の表に依て上りますたと言ふと、來合せて居る醫者や法者は、こたな者は病氣を直せるものかとやしめ(卑む)で居だ。長者殿では、もんぢやの吉をうば子様の寢で居る處さ通すと、うば子様は奥の座敷の屏風の蔭さ寢で居で、もんぢやの吉は行ぐど、何してこたにおれのけつは鳴るかこどだ(大變)ましと言ふから、うしろさまわつてエギミを高ぐさせ、手早く懐の箆この柄でテラリと撫で返すた。すると今迄

鳴て居だ音はびつたりと止つたがらうば子様は床がら起ぎで、あや面白いとて奥座敷がら中の座敷、常居がら臺所とデン〳〵と走て來たので、來合せて居だ醫者も法者も面目ながつて、藥筥を置ぎ忘れたり算木を取落したりして、散り〳〵逃げるやうに居なくなつた。

そこでもんぢやの吉はひどく喜ばれで、御馳走になつたり金を貰つたりして歸り、其筥こは元の通り石の地藏様さお返し、博奕もやめで仕合せよぐ暮したださ。どつとはらい。

三五　左様の根

昔あつたぢもな。馬鹿聟は舅殿さ呼ばれだども、舅殿さ行て何んと挨拶してよいものか知らながつたので、隣のトド(親父)さ行て、舅殿さ呼ばれただし何んとせつ(言)て行げばよいがと聞ぐど、隣のトドは、それでは鰹節をお前のシズコさゆいつげで、舅殿さ行つたらば炬燵端の板の間の節穴から下げで置げ、そしたら俺は板の下で舅殿は話を出すと其鰹節を引張るがら、其時お前の方で左様でございますと返辭をすればよいと敎えられだ。

そこで馬鹿聟は鰹節をシズコさ結び附けで舅殿さ行ぐど、よい鹽梅に常居の炬燵ばだに節穴はあつたがら、その穴こさ鰹節を下げで座るど舅殿は聟さ話をしかげだ。すると隣のトドは板の下で鰹節の綱こをばくつと引張たがら、聟は左様でございますと返辭をした。其内に隣のトドは晝飯を食ふに家さ歸つたあどで、野良猫はその鰹節を見附で食ふべと引張つたら、馬鹿聟は隣のトドだと思つて、左様で御座りますと返辭すると、猫はバグ〳〵、バグ〳〵となんぼも引張るので、シズコの頭はもげそうになつたので、聟はたまり兼ね、左様でございます、左様でございます、左様の根は切れます、とせつたら、舅殿はこたな馬鹿聟に大事な娘をけて置れないとて取り返されだとさ。どつとはらい。

三六　山々の屁ぴりおんぢ

昔あつたぢもな。山々の屁ぴりおんぢは長者殿の林さ行つて、だんぎり〳〵だんぎり〳〵と木を伐たら、旦那様は出で來て、誰だ俺方の林さ來て木を伐るやつはと咎めるど、はい山々の屁ぴりおんぢでごあんす。そだらこさ來て屁をたれて見ろ。はいと言て長者殿の坪前(庭前)さ行て尻をたぐて、

ニシギサラサラ五葉の松、
チリンポンガラヤ。

とたれだら、これはよい屁だ、もう一つと言ふので、

ニシギサラサラ五葉の松、
チリンポンガラヤ。

とたれるど旦那様は、さて目出度い屁である。これや〳〵酒と肴を持てこであと言附で、座敷の縁側でお酒をいたゞぎ、歸りしなには金を貰つてそれを頭巾こさ入れで喜んで歸り、婆ナと二人で酒盛をして居るど、隣の慾たがり婆ナは來てこちでは何をしてるどうと言ふがら、俺方の爺ナは長者殿の林さ行て木を伐るど旦那様に咎られたので、屁をたれで金をこたに貰て來たがら、酒盛をして居だ處だといふど、それでは俺方の爺ナにも長者殿の林さ行て木を伐らせべとて歸つた。

次の日隣の爺ナは長者殿の林さ行て、だんぎり〳〵だんぎり〳〵と木を伐つたら、旦那様は出で來て、誰だ俺方の林さ來て木を伐るやつはと咎めると、はい山々の屁ぴりおんぢでごあんす。そだらこさ來て屁をたれろ。はいと言て坪前さ行ぎ、馬になつて尻をたぐり、いきばつ(息ひ)ても〳〵屁は出ないがら、うんと赤くなつていきばると糞はがり〳〵と出だ。すると長者殿の旦那様は、これは穢い爺だ、若夫達外さ引ずり出せと言附たら、若夫達は此爺ナを門の外まで引ずり出して、茨でからんで顏だの手足だのを疵だらけにすた。

隣の慾たがり婆ナは家の前さ出で、爺ナは戻る頃だと思ひ待て居だら、疵だらけになつておい〳〵

泣ながら歸て來るのを見で、俺方の爺ナは長者殿がら金をうんと貰て、赤い著物を著て喜んで唄を歌て來たがら、ぼろ著物は皆燒でしまへと言て、火をつけて燒でしまつたら、爺ナは茨にからまれで血だらけになつて泣で來たのであつた。人の眞似すると大水を食ふとはこの事だとさ。どつとはらい。

三七　娘さ通ふた蛇

昔あつたぢもな。娘の寢部屋で毎晩こそ〳〵話し聲はするので親達は不思議だと思つて、或時其事を娘に訊ねると、初めの内は喋らながつたが、問つめられで毎夜紋付羽織を着た男は通ふて來ると遂に喋たから、親達はその男の紋さ針を刺してミゾ(糸筋)を長くつけてやれと言附て置くと、男は通て來て歸る時分に羽織の紋さミゾの長い針を刺してやつた。

次の朝になつて親達は其針のミゾをたどつて行て見だらば、家の後ろの御堂の下さ這入つたので中の樣子を聞いで居るど、穴の中がら唸り聲はきこえて、蛇の聲で、まなご(目)さ針を刺されだがら助からないと言ふたらば、別な蛇の聲でそだがら人間さ通ふものではないとあれ程言つた筈だど謂ふど、最初の蛇の聲で、俺は死んでも種をおろして置だがら諦めて死ぬ事は出來ると言つた。すると又別な

とたれだら、これはよい屁だ、もう一つと言ふので、

ニシギサラサラ五葉の松、

チリンボンガラヤ。

とたれるど旦那様は、さて目出度い屁である。これや〳〵酒と肴を持てこであと言附で、座敷の縁側でお酒をいたゞぎ、歸りしなには金を貰つてそれを頭巾こさ入れで喜んで歸り、婆ナと二人で酒盛をして居るど、隣の慾たがり婆ナは來てこちでは何をしてるどうと言ふがら、俺方の爺ナは長者殿の林さ行て木を伐るど旦那様に咎られたので、屁をたれで金をこたに貰て來たがら、酒盛をして居だ處だといふど、それでは俺方の爺ナにも長者殿の林さ行て木を伐らせべとて歸つた。

次の日隣の爺ナは長者殿の林さ行て、だんぎり〳〵だんぎり〳〵と木を伐つたら、旦那様は出で來て、誰だ俺方の林さ來て木を伐るやつはと咎めると、はい山々の屁びりおんぢでごあんす。そだらこさ來て屁をたれろ。はいと言て坪前さ行ぎ、馬になつて尻をたぐり、いきばつ(息ひ)ても〳〵屁は出ないがら、うんと赤くなつていきばると糞はがり〳〵と出だ。すると長者殿の旦那様は、これは穢い爺だ、若夫達外さ引ずり出せと言附たら、若夫達は此爺ナを門の外まで引ずり出して、茨でからんで顏だの手足だのを疵だらけにすた。

隣の慾たがり婆ナは家の前さ出で、爺ナは戻る頃だと思ひ待て居だら、疵だらけになつておい〳〵

泣ながら歸て來るのを見で、俺方の爺ナは長者殿がら金をうんと貰て、赤い著物を著て喜んで唄を歌て來たから、ぼろ著物は皆燒でしまへと言て、火をつけて燒でしまつたら、爺ナは茨にからまれで血だらけになつて泣で來たのであつた。人の眞似すると大水を食ふとはこの事だとさ。どつとはらい。

三七　娘さ通ふた蛇

昔あつたぢもな。娘の寢部屋で毎晩こそ〳〵話し聲はするので親達は不思議だと思つて、或時其事を娘に訊ねると、初めの內は喋らながつたが、問つめられで毎夜紋付羽織を著た男は通ふて來ると遂に喋たから、親達は心配してその男の紋さ針を刺してミゾ(糸筋)を長くつけてやれと言附て置くと、男は通て來て歸る時分に羽織の紋さミゾの長い針を刺してやつた。

次の朝になつて親達は其針のミゾをたどつて行て見だらば、家の後ろの御堂の下さ這入つたので中の樣子を聞いで居るど、穴の中がら唸り聲はきこえて、蛇の聲で、まなご(目)さ針を刺されだがら助からないと言ふたらば、別な蛇の聲でそだがら人間さ通ふものではないとあれ程言つた筈だど謂ふど、最初の蛇の聲で、俺は死んでも種をおろして置だがら諦めて死ぬ事は出來ると言つた。すると又別な

蛇の聲で、人間は賢しい者だから、水銀を使ふと墮るから何んにもならないと言ふて居たのを聞いで、親達は家さ戻ると早速盥さ水をくみ、そこさ娘を跨がせて水銀を裾さ使はせるど、兒こ蛇はペロ〳〵とうんと水さおりで死んだたとさ。どつとはらい。

三八 剃刀こ

昔あつたぢもな。お寺の和尚様はいつでも鹽引を買て吊してれ、それを剃刀でシタツと切ては一人で食つて居たら、小僧は見てそれは何んと言ふものかと聞くと、和尚様はこれが、これは剃刀こと謂ふものだといつた。其後和尚様は小僧を連れで壇家さ呼ばれで行く途中、或橋の下で鱒はバヤ〳〵と泳いで居だのを小僧は見附で、和尚様し〳〵、あれ橋の下で剃刀こは泳いで居ると知らせるど、和尚様は見だごと聞だごと喋らんもんだと言つて、其處をさつさと通り過ぎだ。

それがら餘程行ぐど日は照て來て和尚様の頭は熱ぐなつたので、後ろさついで來た小僧に頭巾をよこせと言ふと、小僧はさつき和尚様は落して來たと言つた。すると和尚様はそれを見たら何して默て來たと言ふから、小僧はそれでも和尚様は見だごと聞だごと喋らんもんだと言つたがら默て來たと謂

つた。そこで和尚様は落したものは拾て歩くもんだと言つた。

又少し行ぐど和尚様は笠をよごせと言ふたら、小僧はハイといつてそれをつだすと、笠の中には馬のぼろ(糞)はぢつぱり(一杯)入れであつたがら、和尚様は何しにぼろを入れで持て來たが、早ぐ投げろと言ふと、小僧はそれでも和尚様は、さつき落ちだものは拾て歩ぐもんだといつたがら、馬のけつ(尻)がら落ちだので拾つて來たと謂つたどさ。どつとはらい。

三九 川獺と狐

昔あつたぢもな。雪は毎日のように降るので狐は山がら里さおりかね、腹はへつて堪えられなくなつたから、雪の晴れ間を待てよう〳〵の事でおりで來て、川ばたを歩いで居ると川獺は鯉ふなをくつまえ(咥)てシガ(氷)の下がら出で來たのに出逢つた。そこで狐は、や川獺殿々々々と聲をかけると、川獺は誰かと思つたら狐殿か、久しぶりだつたなと言ふので、俺はこの間雪に降られで里さ下りかね腹はへつて困つて居る處だから、其鯉ふなを半分わけでたもれと言ふど、川獺はそれでは俺は頭の方より食ふがら、お前は尾パの方より食へとて二疋してガリ〳〵と食つた。

そこで鯉ふなを食ひあげると狐は、お陰で助かつたが時にお前はこれを何ぞして取るが俺さも教へてたもれと言ふと、川獺はそれはぞうさも無い事さ、寒いかりん〳〵とすみ(凍)る晩に、馬の沓を尾パさ結附で川ばたを歩ぐと、シガさ穴このあいて居る處はあるから、そごさ其尾パを突こんで居ると鯉ふなは來て食附ぐがら、それを引上げればぞうさも無い事だと嘘を聞せだ。狐はこれはよいことを聞いだと思つて、或寒い晩に路端がら馬の古沓を拾つて尾パさ結附け、川端を歩くとシガさ穴このあいて居た處はあつたので、これだなと思ひ尾パを突こんで居ると、ええくらい經とパタツとあだつたから一尾ついたなと思つて居たら、又パタツとあだつたので、二尾ついたと思つて數へて居る内に、パタリ〳〵とあだつて、餘程ついだと喜んでたら、近くの百姓家で鷄の聲はしたので、この位でよい程だと思ひ尾パを引上げようとしたが、堅くシミついで拔げないので困つて居るど、早起ぎの家からあね子(嫁)は手桶をさげて河戸さ水汲みに來た。

すると狐はいづしめん(一所懸命)と尾パを引張つて居るので、あね子はどてん(驚愕)してあに(夫)し、あれ狐は河戸に居だますと叫んで家さ引返すと、あにはにわ(土間)がら藁打槌持て走せで來て、狐を叩ぐつもりで周章でシガを叩いだがら、シガは割れて狐は其拍子に尾パを拔ぐどグエンとさがんで、走せるは〳〵、ボングリ〳〵と走せて、やつと山の方さ行つて氣を落附げでがら、鯉ふなはなんぼ附いて居るかと尾パを見ると、鯉ふなと思つたのは鯉ふなではなく、ザイ(流氷)はいつぱい馬の古

沓さシミ附で、放れなぐなつて居だがら、山の日向こで丁寧に解がして、やつと尾パを沓がら放したどさ。どつとはらい。

四〇 牛方と山婆

昔あつたぢもな。牛方は道に踏み迷ふて、山の中さ這入り日は暮れだから、仕方なく其處さ野宿してベゴ(牛)さつけで來た荷がら肴を出して肴汁を煮で食つたが、肴汁は餘つたので誰させう(言)ともなく、

肴汁は餘つたがら來てけ(食)でやあ。

と叫んで見た。そしたば山奥の方でほうと返辭するものはあつたがら面白ぐなつて又、

肴汁は餘つたがら來てけでやあ。

と叫ぶと段々共聲は近くなつて山婆は出で來て、どれや肴汁は何處にあるとせうので、牛方はどてん(驚愕)して肴汁の鍋を出すと、けもなく(容易)食つてしまひ、こればかりでは足りないながらもつど出せとせつた。

牛方は肴汁はそればかりだとせうと、山婆はそだら此ベゴを食ふがらえゝがとせうがら、牛方はベゴをかれでも肴汁はそれ計りだとせえば、山婆はそだらばとて、ベゴを頭がらがり〳〵と食つてしまつた。そしてベゴのシズコを食ひ殘したので、牛方は之れも食へとせうと、山婆はシズコには砂はあつてかれないながら、洗つて來たらば食ふとせうので、牛方はしたらば洗つて來るとて、ベゴのシズコを持つて澤さ下つたが、戻て行げば今度は俺はかれると思つて、シズコを投げで人里の方さ逃げて來た。

すると一軒家はあつたがらそこさかけこむと嚊は一人居だので、牛方は今山婆に食れべとした處だがらかくまて(匿)けろと賴むと、嚊はそどの長持さ這入つて隱れろとて長持さ入で錠をかげだ。そこさ山婆は髪を亂して追て來て、こゝさ牛方は逃げで來た筈だがら出せとせうど、嚊は平氣で何もそたな者は來ないとて山婆を追拂つてやつた。其あとで嚊は、牛方の這入て居る長持の蓋さ錐もみをキリキリとすると、牛方は長持の中でカガンス(嚊)〳〵、あれ鼠は長持を嚙るがら、ぼ(追)つてけろとせつた。すると嚊は元の所さ戻つて來てれ、クソン〳〵とせつて鼠をぼうふりをした。それから又長持さ錐もみをきりきりと揉んで、穴をあけ〳〵すれば、牛方は長持の中でカガンス〳〵、又鼠は嚙るとせへば、嚊はそこつと元の所さ來てれクソン〳〵とぼつた。

それからカマコ(鐵瓶)をわかし(沸)てゝ其錐もみの穴から湯を注いでやると、牛方は今度は鼠は小

便をたれるがらぼつてけろとせうと、嚊はクソン〳〵とぼう眞似をした。そして何度も何度も長持の中さ湯を注いでやつたら、牛方はとう〳〵殺されて其懷がら金を取られだとさ。どつとはらい。

四一　翁捨山

昔あつたちもな。年寄は七十二になれば山さ放される事に定まつてるので、今年親父は七十二で山さ放す年だがら、息子はおぶつ(背負)て山奥さ放すにえ(行)ぐと、親父は其えぐ途中柴の枝を折り折りするので、息子は柴の枝を折るわけを聞けば、親父はお前の歸りに路を間違つてはならないと思ひ其標に折るのだとのことで、親心にひどく感じて息子は痛ましくなつて親父をそのまゝ連れで歸り、家の床板の下さ座敷をこさへてかくまつて置いだ。

すると其頃天下樣がら此二品さお觸の通り叶へて差出せとて、貴重な品物は屆いたがら村の人達は集てそれを見るど、一品は丸い棒の本・末を見わけすることであり、一品は玉に曲つた穴をあけでそれに紐を通すことで、どれも容易のわざではないから困り果てだ末、息子はかう謂ふ事は年寄は覺へて居るものだと思つて、親父にそつこり(密)聞いて見ると、親父は棒の本末を見分るには、水さ入れ

で流して見れば木は沈んで末は浮ぶものだし、又曲つた玉の穴さ紐を通すには一方の穴の口さ味噌を塗つて、蟻の腰さ細糸を結びつけ穴さ入れれば、味噌の臭をかまり(嗅)つけで其方さ出るものだから、其を通してがら紐を通せと教へられたので、其通りにして首尾よく二品を天下様さ差上げると、天下様には此難題を斯くまで容易く解た事を尋ねられたので、息子は七十二になる親父を山さ放すかねで匿くまつて置いたので、今度の御用を足すことは出來だ、と正直に申上げたら天下様も大層感心なされで、これで年寄はやつぱり世の中に無くてはならぬ物にきまり、以後は七十二になつても山さ放さなくなつたどさ。どつとはらい。

四二　ちよいわこら

昔あつたぢもな。もんぢやの吉は博奕にも負げたし、何かよい儲け口はないかと思つたあげぐ、山がら恰好のよい松瘤を取て來て、何日がかぐつて皮をたぐり、それをテラ〳〵と綺麗に磨ぎあげてさも大事な物のように白紙何枚さも包んで、お寺の和尚様の處さ持つて行つた。そして和尚様さこれはちよいわこらと謂ふもので、火事場さ持つて行ぎ、ちよいわこら〳〵ととな(稱)事して其處を三遍廻

るど、どんたな火事でもすぐに消えてしまいますがら買つてけろと言つた。

物好な和尚様の事だがら珍らしい物だと思ひ、そんだらお前は試して見せろと言ふと、もんぢやの吉はようごわすとてお寺の藁つぼけ(藁積)さ火をつけで

ちよいわこら・ちよいわこら、
ちよいわこら・ちよいわこら、
ちよいわこら・ちよいわこら。

と稱へ事しながら其ぐるりを三遍廻つたらば、去年がらの藁つぼけで、雨でしみ(濕)て居だものだがら、まもなく火はけ(消)てしまつたので、和尚様はほしぐなり騙されで其松瘤を買取つた。そして和尚様は松瘤を大切にして仕舞て置いだが、此のちよいわこらを自分でも試して見たくなり、或時小僧にお寺さ火を附けらせでよい程に燃え上つた頃、ちよいわこらを持ち出してもんぢやの吉のやつた風に、

ちよいわこら・ちよいわこら、
ちよいわこら・ちよいわこら、
ちよいわこら・ちよいわこら。

とお寺のぐるりを三遍廻つて見たども、火事は仲々消えべともしないでもえ上るので、和尚様も逆上

で坊主頭さ向鉢巻をし、ちよいわこらを高ぐ振り翳すながら、ちよいわこら〳〵といつしめん(一所懸命)と火事のぐるりを駈廻つたども、とう〳〵大事なお寺を丸燒にしたたどさ。どつとはらい。

四〇　屁ぴり嫁子

昔あつたぢもな。あね子(嫁)を貰て五六日たづど、あんまりあね子の顏色は惡いので、姑嚊は心配してあね子〳〵、何してうなの顏色はそらほど惡いであと聞ぐど、いにえ(否)どども惡くはなえましとせう(言)がら、姑嚊はそれでもずほに(隨分)顏色は惡いがら、あべあこ(鹽梅)でも惡いがら隱さなえで喫べれでやあとせうと、あね子は實はなし、おれはうぢ(家)にえだ時は屁をたれでえだのを、こちさ來てがら、こたえ(怺)でえだゝし顏色は惡いのだましとせうがら、姑嚊はそだらこたえないでたれろでやあとせうとあね子は、それでもお前樣を飛ばしてがら、こど(大變)だがらたれなえましとせうので、うにや俺は當木(圍爐裏の側)さたもぢで(取附)えるがら案じないでたれろとせうど、あね子は屁をビイビイビイ・ブウブウブウとたれれば風はたつて來てそのはづみで、姑嚊は當木と共に吹飛ばされで、厩のかぼ(破風)の口さ行て引掛つた。

そどさ丁度あに(夫)は歸つて來て、お袋はどどさ行つたがと聞ぐど、かぼさ引掛つて居だお袋は、あに〳〵、俺はこゞさ引掛つて居るが早く落してけろとの事で、あにはまげ(厩の梁)の上さ上つてかぼがらお袋を落してけでれ、何してこゝさ引掛つて居だがと聞けば、お袋は何になやあね子はあまり顏色は惡いので、どどが惡いのがど心配して聞いだら、屁をこたえて居だので惡いとせうがら、そだらばたれろとせうど、俺は飛ばしてはこどだとせつたので、俺は當木さたもぢでるがらたれろとて無理にたれさせるど、屁のはづみで吹飛ばされて引掛つたと語つた。それであには俺も飛ばされではこどだがらとて、あね子さひま(暇)をけるがら出でげとぼだ(追出)されだ。

あね子はあにぼだされたども、屁で姑嚊を飛ばしてぼだされたとて里さ歸るには具合は惡いと思ひ、往來さ出で立つて居るど向ふがら牛方はべゴ(牛)さ鹽をつけで通つて、道端の梨の木さ梨子はうんと生つてゐるのを見で、それを落すべとズバダをかけたが梨子は落ちないがら、牛方はこりや梨子を食ひたいども落されないとて通るべとするので、あね子はそたな梨子などは屁でも落すべとせうと、牛方はなぞして屁などで落せるものが、梨子を屁で落せるものならば落して見せろとせうど、あね子は屁で此梨子を落したならお前はおれを連れでえつてくれるかと聞ぐど、牛方はほんとに屁で落したら連れて行ぐべいとの事で、あね子は梨の木さ尻を向けでれビイビイビイ・ブウブウブウと屁をたれだら、梨の木はゆら〳〵ゆら〳〵と吹ぎ搖がされで、梨子はぼだ〳〵と落ちだがら、牛方は大喜びし

て叺さ拾ひ入れべゴさつけ、其上さあね子を乘せで連れでたどさ。どつとはらい。

四四　物食はぬ女房

昔あつたぢもな。獨身な男は山さ木を伐りさ行てれ、仲間の者と物を食はないおがだ(女房)を欲しいと話し合つたら、四五日經つて俺は物を食はないがらおがだにしてけろとて、男の家さ頑丈な女ごは尋ねで來た。そどでおがだにして置ぐど成程少しも物を食はないが、女ごは來てがらきしね(生稻)櫃には米は減るし、味噌ごが(桶)には味噌は無くなるので、男は不思議に思ひ或日町さ行ぐふりして家を出るど、女ごは手水所(厠)さ行つたので其間に戻て、來てまげ(厩の梁)さ上つて隱れて居るど、おがだは手水所がら出で來るど、きしね櫃がら米を計て來て磨ぎ出し、それを一斗炊ぎの鍋さ入で飯を焚ぎ、次に味噌を擂鉢で擂りお汁立をした。

それがら握飯を握て莚の上さがらりと並べ、おづげをヒヤゲ(提)さ入れで冷まし、そしてれ髮をほごす(解)と、頭のずつとげ(頂)に大きな口は現れだ。その口さ握飯を、シト〳〵シト〳〵と投げ入れては、ヒヤゲのおづげを注ぎ込み、握飯をシト〳〵シト〳〵と投げ入れては、おづげを注ぎ込み、髮

を元の通りに結つて、そこら邊を片附げで居る間に、男はその隙にまげがら下りで、草鞋さ泥をつげで町さ行て來たふりして家さ這入つた。

其次の朝になつて、女ごさひまをけるがら出で行げとせう(言)ど、行ぐがら何を暇の物にけでやるがどの事で、そこにある二駄入れのこが(桶)を持つて行げとせつたら、そのこがの中をまがつて(覗)て居だけが、あれ〳〵虫こは居だがら取てけろとせうので、男はどれやと行つて、こがの中をまがつて見たらば、其拍子に男の兩足をさらつてこがさ突こみ、それをちよいと擔ぐど山婆になつてどんどん山の方さ走せて行ぎ、よい酒の肴を持て來たがら皆でてこ(來)でやあと叫びながら、柴立の山の中をがら〳〵と分け上つた。すると奥山の方でほうえとせう返辭はするので、男は生ぎだ心はながつたが、こがの側さ柴立は當る拍子に、ひよいと手を柴さかけで、こがを跳ね拔げるといつしめん(一所懸命)と山を走せくだつた。

山婆はそれとも氣はつかないで、よい酒の肴を持つて來たがら皆出で來でやあと叫びながら、同類の居る所さこがを擔で行ぎ、肩がら下して見だらば男は這入つて居ながつたので、さては逃げられだと思ひ、そのまゝ山をどん〳〵ともど來た方さ追かげて下つた。それで男は段々追附かれそうになつたので、傍らの蓬と菖蒲の生えで居る中さ隱れるど、山婆は追附で其蓬と菖蒲の中を見でれ男はこゝに居るども、此草の中さ手を入れると手は腐れるがらくやしいども仕方はないとて山さ引返すた。そ

こで男は命は助かつたがら、其蓬ど菖蒲を取て頭さかぶつたり腰にさしたりゆさ〳〵として、家さ歸るど屋根だの戸口だのさ挿して置いだら、山婆もとう〳〵來ながつたどさ。どつとはらい。

四五　ちよへん子ちやはん子

昔あつたぢもな。ちよへん子は先腹のでちやはん子は繼母のなであつたがら、繼母はちよへん子を無ぐしたいと思つて、或日ちやはん子に今夜姉さんを殺すがらお前は默つてろと言ふど、ちやはん子は姉さん〳〵、今夜お母さんはお前を殺すとの事だがら、私の床さ來て寢ませうとて、ちよへん子の床さば小豆の袋を入れで置いだら、夜中に繼母は刀を持て來てザグリと其小豆袋を斬り、ちよへん子を殺したと思つて安心するど、次の朝になつてちよへん子は何事もなく起きで働いだ。

今度は毒を食せで殺す氣になり、ちやはん子さ姉さんに毒饅頭をけで殺すがら默つてろと言ふど、ちやはん子は姉さん〳〵、川の方さ行つて遊びませうとて連れで行ぎ、姉さんの饅頭には毒は這入て居るがらそれは川さ投げで、俺のなを二人で食ひませうとて、其毒饅頭をば食せながつた。そこで繼母はちよへん子を殺す兼たので、惡者共さ金を呉れで殺させる事にして、駕籠さちよへん子を乘せで

山奥さ連れで行ぎ木さ縛りつげでれ、ちよへん子の兩腕を切り落したが、不憫だがら命だけは助けるとてそのまゝ惡者共は歸つてしまつた。そこでちよへん子は山奥の木さ縛られたまゝ兩腕を切られで泣で居るど、不思議に大風は吹いで來て縛つた繩を吹切てくれると同時に、切られだ腕をさらつて行つた。それでちよへん子は泣ながら、水の流れる方さ添て澤を下つて來るど人里さ出だので、どことなく足の向ぐ方さ歩いで行げば、大きなお屋敷の傍に梨畠はあつたので、その畠の小屋さ隱れて居で夜になるど出で、生てゐる梨子の尻を一口づゞ食ひ食ひして助かつて居だ。處はお屋敷の若子樣達は梨畠さ來て見で、梨子の尻を一口づゞ食つてるのを見て不審に思ひ、何者であるが今夜は其者をためし斬りにすると言ひ合つて歸つたがら、ちよへん子は其小屋からぬげ出で立去つた。

それがら街道に添ふて行ぐど一軒の茶屋はあつたので、そこの茶屋の前さ行て立つて居だら、茶屋の女房は見附で、お前は何處の者で何して此處さ立て居るかと聞かれるがら、ちやはん子は今日までの一部始終を語ると、女房は大層氣毒に思ひ家さ入れて勞り、血のついだ著物を洗つてけ新しい著物を著せで化粧させ、店先ぎさ坐らせで置いだば娘は評判となつて店はひどく繁昌した。或る時立派な侍衆は店さ來て酒を飲みながら茶屋の女房に、其娘に酌をさせろといふたが、女房はこの娘は兩腕は無い哀れな娘だといふと侍衆も不憫に思つて、ちよへん子を連れで行つて自分の女房にするど、間もなぐちよへん子は身持ぢになり、侍衆は江戸詰になつて上てしまつた。

そしてる内にちよへん子の繼母は竈をかへし(倒産)て、これも街道端で茶屋渡世をして居るど、彼の侍衆さ使はれで居る若黨は、此の街道を明け暮に往來して此店さ立寄ては酒を飲んで行ぐがら、繼母はそれとだんぐ懇意になり、若黨から旦那様は兩腕の無いものを女房にして居ると聞いで、それはきつとちよへん子であるのを知つた。そこで若黨は江戸の旦那様さ遣はれで行ぐ途中、繼母は呼び留めて酒を飲ませるど、醉つぶれで店先ぎさ寢で居るのを、其首がら風呂敷包を解いで中の手紙を出して讀んだら、今度玉のような男の子は生れだといふ知らせの手紙であつたので、それを繼母は今度鬼であるが蛇であるが恐しい物は生れだがら、これを何ぞにしたらよいがと書ぎ直して風呂敷さ包んで、そろつと(窃)若黨の首さ結附で、さあ遲ぐなるがら起ぎで行げどて搖り起すど、若黨は跳ね起ぎでさつさと行つた。

手紙を書替へられたのを若黨は知らないがら、急で江戸さ上り旦那様さそれを出すたら、旦那様は其手紙を讀返すて不審とは思つたが早速返事を認めて、たとへ生れたものは鬼でも蛇でも俺の歸國するまでは大切にして置げとて、若黨さ持せでよこすと、それを持て繼母の茶屋の前を通ると、繼母は呼入れで又酒を振舞ひ、醉つぶれで店先ぎさ寢たら、繼母は首の風呂敷がら手紙を出して見で、鬼だが蛇だがそたな物を產した女房は家さ置かれないがら、すぐ家を出してやれと書き直して若黨の首さ結附げ、さあさ遲くなるがら早く歸れとて搖り起した。若黨は家さ急いで歸り旦那様からの手紙を差

出すと母子を追ひ出せとの返事なので、家ではひどく驚き悲しんだけれども致方なく、女房は兩腕は無いので子供を懷さ入れさせ、口さ乳房の屆くようにして泣ぎの涙で家を出してやつた。

ちよへん子は家を出されだがら行ぐあでも無ぐ歩いで行ぐど、路の傍らに湧水はあるので喘は乾いだと思ひ、こがんで(屈)其水を飲まうとしたら、懷の子供を其湧水の中さ落すてしまつた。ちよへん子は兩腕は無いがらそれを取りあげる事も出來ずたゞ泣でゐたら、そこさ婆様は來て其子供を取上げでけで今度は背中さおばせで貰ひ、其婆様と道連れになつて來るど、白水の流れでゐる川のほどりさ來逢つたので、そこでちよへん子は裾をふたぐて(捲る)貰ひ其川を渉つたらば、川の眞中程まで來たと思ふ時に婆様はうしろがらドイラと突のめしておかえす(倒)たので、はつと思ふたら今までの川は急に野原になり、自分の兩腕もいつの間にかくつゝいで居で、婆様はなぞになつだが見なくなつたので、ちよへん子は夢ではないがと喜び、歩いて來るど今度は並木街道に出で來た。

すると向ふから駕籠は來たのでちよへん子はそれを除げで通るど、駕籠は急に止まつて其處さ行ぐのは女房では無いがと呼び止められだがら、氣は附ぐど自分の夫は今江戸がら歸る處であつたので、委しく其始終を話せば、駕籠さ乘せられで連れて歸られるど、手紙の行違ひを不審に思ひ、若黨を呼んで訊して見れば、街道の往來に繼母の茶屋さ休んで酒を貰つて飲んだ事は分り、それで其繼母は訴へられるど事情は知れで牢さ入れられだつたとさ。どつとはらい。

四六　玉一譚

昔あつたぢもな。夫婦の間に子供は無がつたので、清水の觀音様さ子供を一人授げでたもれと願をかけたら、滿願の晩にあたり觀音様のお告には、お前達に授げる程の子供は葦の根尋ねでも見當らないが、あまりの信心によつて男の子を一人授げてやる、但し其子は七歳の時片親に別れる、との事であつた。それがらまもなく女房は身持ぢになり、滿月にして玉のような男の子は生れだがら、大切に之れを育てで居るど、果して七歳の時父親は亡くなり母親の手で成長したが、今度は母親は目を煩つて盲になつた。

息子は成人するにつれで氣だでも優しく親孝行であつて、或日雜魚取りに川さ行ぐど俄雨に降られで川岸の柳の下さ雨晴らしをして居だら、其處さ若い女は濡れで來てやつぱり雨晴しをすた。そしてれ私をお前様の家さ連れでつて下さいと言ふから、息子はそれを迷惑の事に思つて斷つたけれども、女は息子のあどさついで來て、母親の前さ行つて私を此家さ置で貰ひたいと賴んだが、盲の母親は何處の人だが見も知らぬ人を置がれないと斷つた。それでも女は歸る風もなぐ其まゝ居で、家の仕事を

手傳つたが、隙を見では機を織つたが、織り上げるとそれさ町さ持つてて賣れといふので、息子は其布を賣るに行ぐど高い値に賣れだがら、其金で馬を一匹買ひ求め、それさ米だの味噌だの着類や諸道具をずつぱり(一杯)買てつけで來た。其馬は家の方さ近くなると女はそれを見で、盲の母親さあれ何處の馬だが澤山の荷物をつけで來たましといつて知らせて居る內に、息子は馬を引で來たので、それから家は繁昌して指折りのもの持となり、息子も其女と夫婦になつて睦ましく暮してゐる內に、夫婦の間に玉のようなる男の子は生れたので、玉一とつけで寵愛したが、盲の母親はことにめご(可愛)がつて大事にして居るど、其時分がら女房は毎晩夜更になるど家をひそかに拔げ出で行ぐがら、それを夫は怪しみ或時あどを慕ふて行ぐど、清水の觀音様の境內さ來り御堂の前で髮をほどし(解き)手を三度拍つど、御堂の扉は兩方さ開いで女房は御堂の內さ這入つた。それを夫は不思議に思ひながら戻て來れば、間もなく女房も戻て來て夫に言ふには、此間中私は毎晩出で歩ぐのをさぞ怪しく思ひますただろうが、實は母親の目を直して上げたい一念で、清水の觀音様さ一七日の願をかけだ處、今夜で滿願の晩であつたが、觀音様のお告には當年一歳の男の子の生肝を取つて飲ませれば、其目は立所に開ぐとの事であつたが、當年一歳の男の子といへば玉一より外に無いので、明日私は玉一の生肝を取るがら、お前様は母親を家から連れ出して下されとの事で、夫婦は玉一を殺しは忍ばれなぐ悲しいけれども母親のためとあれば諦めで、其夜の明るのを待受げで居だ。

次の日は花見といふ拵えにて下女下男を總出させ、それがら母親さも花見をさせるといふことで、息子は連れ出そうとすれば、母親は俺は目は見えないがら花見はしたくもない、それよりも奥の座敷で玉一を相手に遊ぶのは何よりの樂だとて、聞入れそうもながつたけれども、玉一は今晝寢をして居るがら目を覺すまで鶯の聲でも聞ぐに參りませうとて、息子は母親をおぶ(負)つて家のぐるわ(周圍)を三遍廻つたども、女房は玉一を殺しかねで居だ。そこで今度は屋敷のぐるわを三度廻つて來たどもまだ殺しかねで居たがら、障子の隙間がら内を覗いで見るど、女房は思ひ切つて玉一の胸さ刀を突刺せば玉一はギャッと叫んだ。するど母親は其聲を聞つけで、あれは玉一の聲では無いがといふので、息子はあれはふるだびつき(蝦蟇)のふける(發情)聲であるとて、おまぐらかす(誤魔化)て家さ這入つた。

其内に女房は玉一の生肝を吸物に料理して、座敷で盲の母親さお酒を上げたら、母親は花見をして來て面白がつた話しをしながら嫁のお酌で、何氣なく吸物をづいと吸ふたらば、不思議にも目はばつちりと開いだ。そこで母親は、これあ俺の目はあいだと喜んで嫁を見るど、世間の噂さにも増して綺麗な嫁だがら大層褒めで、それがら今まで忘れで居だ玉一はどうしたが、これ程綺麗な嫁がら生れだ玉一だものどれ程美しいが早く孫の顔は見たいといふので、夫婦はハッと思ひながらも玉一は次の座敷さ寢で居るといふたら、母親は立上り次の間さ行げば玉一は綺麗な夜具をかけられで寢で居だの

でああこれは玉一がとて抱ぎ上げるど、殺した筈の玉一はウウンといつて目を覺し祖母さ抱ぎついた

それがら二三日經つて、清水の觀音様の御厨子の中がら血はひどく流れで御座るといふ噂は立つたので、それを聞で夫婦は驚いで御神酒や御供物を若者に持だせでお詣りするど、成程血は御堂の扉の外まで流れ出してゐるがら、急いで扉を開げで見れば、觀音様の御胸は疵ついで居で、其疵口がら血は流れでゐるのであつた。そこでお痛はしさに女房は御神酒を其疵口さ注いでやると、血は忽ち止り疵口は元の通りにくわた(塞)がら、御供や賽錢をあげで伏し拜み戻て來た。それがら女房は夫の前さ行ぎ、實は私は天から下つた天女であるが、お前様は神の申し人であり、格別の親孝行でもあるがら、この家を幸福にさせる爲にこれまで來て居だものであるが、下界に在る年期は既に近づいたので、名殘りは充分あるけれども天さ登つて行ぐとて、十二一重を着て座敷の縁側さ出で扇を取つて空をまねぐど、紫の雲は棚引いで來たがら、天女はそれさ乘つて天さ登つて行つたどさ。どつとはらい。

四七　酒二斗一升

昔あつたぢもな。お寺の和尚様は酒こを嗜きでいつでも小僧を酒買さやるに、指を一本出せば一升

二本を出したら二升を買つて來る樣に言附で置いだ。小僧といつて指を出せばハイといつて其指の數だけ酒を買つて來たが、しかし和尙樣ばがりしてあがつて小僧には飲めと言はながつた。そこで小僧は自分も貰て飲む事を考へてると、和尙樣は酒こをあがるとふだん手水所(厠)さ行く癖はあるので、よし〳〵と思つて、或日和尙樣の留主の間に、手水所の踏板を鋸で半分ばがり引き掛けで置いだ。すると和尙樣はその事を知らないがら少し醉てれ手水所さ行ぎ、尻をまぐつてちよいど踏板をまたぐど踏板は折れで、糞壺さぬきだま(仰向)に反て落ちだ。そしてれ大聲で小僧々々と呼ぶがら、小僧は走せで行ぐど、和尙樣は糞壺で兩手に兩足の指とシズコまで加へでワヤワヤと蹠いて居るがら、小僧は早速酒屋さ走つて行ぎ、酒二斗一升を天秤棒にかけで擔いで戻て來た。

和尙樣はようやくのことで糞壺がら這上つて、河戸端さ行ぎ頭がら汚れ物を洗つて居る處さ、小僧はねずり鉢卷で汗をたらして酒樽を擔んで來たがら、和尙樣はどせやいで(怒)、俺は糞壺さ這入つて困てるのを揚げべともしないで何處さ行て來たがと叱るど、小僧は和尙樣はいつでも指一本出したら酒一升買て來べし、二本出したら二升買て來いと謂ふがら、さつき和尙樣に呼ばれで行つて見るど、糞壺の中で兩手に兩足の指二十本と、それにシズコをかてで(加)出して居るがら、これは大酒買ひだと思つて酒屋さ走せで行ぎ此通り天秤棒を借り、今二斗一升を買つて來ましたと言ふど、和尙樣は叱るには叱かれないので、これ程の酒こを俺ばりして飲むわけでもないがら、小僧うなも飲めとて、小

僧は初めて貰つて飲んだたとさ。どつとはらい。

四八　大沼のぬし

昔あつたぢもな。或男は大沼のきしを通つて來ると、沼の中がら美しい姉樣は出で呼び止るがら立留るど、姉樣は五郎沼さ行つて手をタン〳〵と叩ぐど男は出るがら、其男さ此手紙を渡してくれろとて手紙を賴まれだ。そこで或男は何氣なく賴まれだ手紙を持て街道を來ると、途中で心易い茶屋の亭主に呼ばれで立寄たら、今時何處さ行ぐと聞れで、實は大沼の姉樣がら手紙を賴まれで五郎沼の男さ持て行ぐ所だと言ふと、茶屋の亭主は不審に思つてその手紙をあげで見たらば、この者は紫けつ(尻)だに依つて取つて喰へと言ふ手紙なのであつたがら、亭主はそれを此者さ金子百兩を渡せと書き直して持だせてやつた。

その或男は五郎沼さ行ぎ手をタン〳〵と叩ぐど、沼の中がら立派な男は出だがら、それさ持て行た手紙を渡したら受取つて見で居だが、一寸待つてろとて沼の中さ這入り、すぐに金子百兩を持て出で來て渡したので、それを持て茶屋さ引返し亭主と二人で山分をしたどさ。どつとはらい。

四九　生附だ黄金

昔あつたぢもな。仲のよい隣同志はあつたぢもな。或時その一人は、坪木(庭木)にする松を掘るべと野原さえぐ(行)ど、丁度え(良)盥梅な松はあつたがらそれさ鍬を立でるど、其松の根の下に蕪色のした黄金はぢつぱり(一杯)這入つた瓶さ掘り當つたので、これはことな物に掘りあだつたと思ひ、そのまゝ松を元通り瓶の上さ載せで土をかげて來た。そして隣さこの事を聞かせたら隣では、それは良い物に當つた俺は行つて掘つて來るとて、次の日早く其野原さ行つて見るど話のような松はあつたので、これだなと思つて其松の根元を掘つたらば瓶さ當つたがら掘り起して、喜んで家さ持つて來て床の間さ供へてお神酒を上げて置いだ。

すると其晩げ前に見附だ隣で寢で居るど、何だがおんかない(恐)音して飛んで來て家さ落ぢだものはあるがら、はでなと思つて起きで見るどそれは晝間隣で野原がら掘つて來た黄金であつたので、びつくりして早速隣さ知らせにえぐど隣では諦めで、それはお前達さ生附いだものだべがら、お前達のものにしてござえとせつたどさ。どつとはらい。

五〇　爺ナの畠打ぢ

昔あつたぢもな。爺ナはよこびり(間食)にする蕎麥燒餅を持て畠打ちさえぎ、ハエグレサアと畠を打ぢど鼠こは一匹ちよろちよろつと出で來た。そこで燒餅を半分ふかえでプンと投げてけると、くつま(咥)えで穴こさ這入つた。まだハエグレサアと畠を打ぢどまだ鼠こはちよろちよろつと出で來たがら、燒餅を半分ふかえでプンと投げでけると、其燒餅をくつまえで穴こさ這入つた。

爺ナはまだハエグレサアと畠を打ち續げだら、今度は親鼠はぢよろぢよろつと出這て來てれ、只今は子供等は御馳走になりますたと禮を述べで、俺とかだつて(附)おらほさあえでけろと謂ふがら、爺ナはお前さなぞしてかだつてえ(行)がれべがとせう(言)と、親鼠はまなぐ(目)をふくて(瞑)ればそま(直)えぐとの事でそのなりになるど、まなぐを開げでもよいとせうがら、開げで見だば立派な座敷さ來て居だ。そこささつきの兒鼠共は出で來て禮を述べ、うんと御馳走になつて、歸りしなには金を貰つて來た。

それを隣の慾たがり爺ナは聞つげで、婆ナさ蕎麥燒餅をこさへさせ(拵)で、それを持て畠打ぢさ出

がげ、畠をハエグレサアと打ぢど鼠こはちよろちよろつと出で來たがら、燒餅を半分ふかえでプンと投げでけると、それをくつまえで穴こさ這入つた。また畠をハエグレサアと打ぢど鼠こはちよろちよろつと出で來たがら、半分燒餅をふかえでプンと投げでけるど、くつまえで穴こさ這入つだがら、爺ナは續げで畠をハエグレサアと打でば、今度は親鼠はぢよろぢよろと出で來て、只今小供等は御馳走になりますた禮を述べ、俺方さあえでけろとせうがら、爺ナは喜んでまなぐをふぐれとせはない內にふぐるど、間もなぐ鼠の座敷さ行つたのでまなぐを開げで見たらば兒鼠共は出で來て禮を述べた。

慾たがり爺は色々御馳走を食ひながらあだりを見るど、向ふの方で鼠達は臼さ黃金を入れで

猫の聲こは聞ぎたぐないでぁ。

と、トン〳〵トン〳〵と搗いで居だがら、その黃金を皆ほしぐなつて、思はずニャゴンと大聲で猫の眞似をするど、鼠達は皆ガサガサッと逃げてしまひ、あたりは眞暗になつたがら、爺ナはこりやこと、やつた(大變な事)と氣はついだらば、自分は畠の眞中で鼠穴さ頭を突込んで、びぐがぐ(蹲)して居だのであつたどさ。どつとはらい。

五一　頭さ柿の木

昔あつたぢもな。旦那衆(侍)の下男は、おがみ樣がら江戸の旦那樣の所さ使にやられるど、其往來にいづでも寄つて酒を飲む茶屋(店屋)はあつて、飲んではよつたくれで(醉)店先ぎさ、日暮まで寢で居で茶屋の嚊樣(主婦)に、さあ〳〵、遲ぐなつたがら起ぎで行げとて、急いで歸るのであつた。或日その下男はいつもの通りよつたぐれで店先ぎさ寢で居ると、近所の和子(侍の子)達は五六人づれでこの茶屋さ來て柿を食ひながら、寢で居る下男の禿頭さ柿の種をビタ〳〵とぶつ附たども、下男はそれを知らないで、起されで歸つて行つた。

ところで下男の禿頭さ柿の木はおえで、いつの間にか柿は生つて赤ぐうんだ(熟)だがら、下男はこれをよい事にして茶屋さ來て、嚊樣し俺の頭がら柿を取てそれあだい飲ませでけろとて、酒を飲んでは醉たぐれで又日暮まで寢で行つた。これを見だ若子達は其下男は店先ぎさ寢で居る間に、鋸で頭の柿を根元がら伐り取ると、下男はそれとも知らないで嚊樣に起されで歸つたが、いつのか間に今度は柿の木の伐株さワカイ(ひらだけ)は澤山においだので、下男は又茶屋さ來て嚊樣に其ワカイを取つて

貰て、それを酒代にして醉たぐれで店先ぎさ寢で居だ。するど又若子達は來て見で、其伐株を木割で掘取つて頭さ穴をあげでやるど、下男はそれを知らないで歸つたが、雨の降る時など何もかぶらないで外さ出て歩ぐど、其穴さ水は溜つていつのか間に鮪はぢつぱり(一杯)ふえだ。それを下男はよい事にして又茶屋さ來て、嚊樣に鮪を取て貰ひ酒代にして酒を飲み、醉たぐれで店先ぎさ寢で居たら和子達も手にあまして、それがらあらがは(からかふ)ながつだどさ。どつとはらい。

五二　夕顔の舅殿

昔あつたぢもな。お寺の和尚樣は隣の夕顔棚から夕顔を一本取て來て、それさ女どの面こをかぶらせ振袖を着せ是を居間さ置ぎ、夜になれば自分は三味線を彈いで其夕顔を踊らせで樂んで居るのを、小僧は毎晩これを聞いでれ和尚樣はなぞな事をしてるのかと不思議にして居だ。そこで和尚樣の留守の間にそこつと(密)其居間さ行つて搜して見るど、和尚樣の居間には何も別條は無いので、はでなと思ひ押入を開げで見だら、押入のすまこ(隅)に綺麗な女どは居で、ニッコリ笑つたので小僧は思ばずこのビタ(若い女)といつてはぎ(箒)で叩ぎのめすと、べさつと轉がつたのでよく見ると夕顔さ振袖を

著せたのであつた。そこで夕顔の裾をふたぐて(捲)見たらば、下の方さ穴こをあげであるがら、栗の毬を拾つて來て其穴こさ入れで、元の通りにして押入さ置いだ。

すると和尚樣は歸つて來てがら、今晩も居間で押入がら夕顔を出し三味線を彈いで樂んだ後、其夕顔を床さ入れで……をつだす(突出)と、栗の毬はチカッと刺つたがら、これは小僧の仕業だと思ひごせやい(立腹)で、小僧を叩ぎつける氣でりぎみながら居間を出だしと、小僧はそれをおべで(悟)、先ぎさお寺を逃げ出して隣の夕顔棚の下さ隱れで居だら、和尚樣はそごまで勢ひよぐ追ひ詰めで來たが急に思ひ止まつて、これは舅殿の手前はあつて叩がれないがら、小僧俺と一緒に歸つてやすめ(寢)とて、二人でお寺さ戻て來てやすんだどさ。どつとはらい。

五三　猿の嫁子

昔あつたぢもな。長者殿の旦那樣は畠さ出で見廻りながら、此畠を打つてけだ者には一人ある娘をけると言ふど、山がら猿は出で來て其畠を打つてけだ。

そこで娘を猿さけてやる事にして仕度をして出してやれば、猿はひどく喜んで娘を連れで後になり

先ぎさなりして山さ行ぐがら、旦那様は門の外まで出で、其後ろ姿を見えなくなるまで見送つた。そこで娘は猿に連れられで奥山さ行て、三日目に猿さ嫁さ行げば里歸りをするものだと言ふど、猿はその言ふなりになつて奥山がら二人で出で來たが、途中の澤に見事な岩石はあつたので、娘は此石を坪前(庭)さ持て行て、これを見ながらお父さんにお酒を上げだらなんぼ喜ぶ事だべと言ふたら、猿はウン〳〵といつて藤畚さ其石を入れで背負つた。そして谷をくだつて來るど、今度は淵の岸さ藤の花はゆる〳〵と樹さからまつて咲いで居るがら、娘はこの藤の花を其石さ添へで眺めながら、お父さんはお酒をあがるとなんぼ喜ぶだべと謂ふど、猿はウン〳〵といつて岩石を背負たまゝ其樹さ登つた。

すると猿は藤の花にこれがと言て手をかければ、娘は下でまつと上の方の枝はよいと言つた。そこで猿はまた上の枝さ登つてこれがと言ふど、娘はまつと上の枝を欲しいと言ふて、猿を樹のてんぱこ(梢)まで登らせたら、背負て居る石の重さは加はつて、樹の枝はがり〳〵と缺げで猿はドンブリと淵の中さ落でしまつた。そこで猿は崖さ上るべとすれば、娘は淵の岸でセセホホ〳〵と笑へば、猿は今上るがら泣な、今上るから泣な、と言つて上るべと蹶ぐど、遂につかれで水を飲んで死んだので、娘は無事に家さ歸つて來たどさ。どつとはらい。

五四　長い名前の子供

昔あつたぢもな。初めで男の子は生れだので、何んでも長、たらしい名前をつけで見たくなり、先づかうつけだ。

松原・松原、たんがの擂鉢、擂れだが摺れぬがやつしよの坊。高田の餅、搗げだが搗げぬがやつしよの坊。アワワにベロベロ、上の方さ綱こもへて引張げろ。

すると其子供は、ワラシヤド(子供等)と川端で遊んで居てれ、誤つて川さ落ぢで上がれなえがらワラシヤドはどでん(驚愕)して、其子供の家さ駈附けで、お前達の

松原・松原、たんがの擂鉢、擂れだが摺れぬがやつしよの坊。高田の餅、搗げだが搗げぬがやつしよの坊。アワワにベロベロ、上の方さ綱こもつて引張げろ。

は川さ落ぢで上れなえますと知せるど、家の人達は走せで川さ來て見る内に、子供は遠ぐさ流れで行つて、とう〳〵見なくなつて居だたどさ。どつとはらい。

五五　爺ナのこばかま

昔あつたぢもな。爺ナは屋根葺、婆ナは針刺し、あね子〳〵、ニワ(土間)掃げであ。豆こ一つめけ(見附)だまし、そんだら鍋さ入れで炒であ、炒ば〳〵、一鍋、搗ば〳〵、一臼。ワラシ(小兒)〳〵、隣さ行て篩借りでこである。隣さえぐ(行)には橋の上に犬こはゐでおかねあ(恐)まし。そんだら馬こさのはて(乘)げである。馬こはインセセておかねまし。そんだらべゴ(牛)こさのさてげである。べゴこはメイメイておかねまし。そんだら鶏さのはてげであ、鶏はケケロヨウておかねまし。そんだらば爺ナのこばかまでおろせである。

爺ナのこばかまでおろした粉こを何處さ置ぐべまし。臺所さ置げば猫に舐られるし、棚こさ上げで置げば鼠にかれ(食)るし、戸棚さ入で置げば戸棚臭ぐなるし。そだらば、爺ナと婆ナの間さ置ぐべであ。爺ナと婆ナのあいださ置ぐど、爺ナは屁をぶんとたれたがら、粉こはぼや〳〵と吹つ飛ぶど、隣のワラシヤドは附木を持て來て、チョウヘンの粉(麥焦)はうまござる、チョウヘンの粉はうまござるとて、皆舐てしまつたどさ。どつとはらい。

五六　今朝のしばれ

昔あつたぢもな。馬鹿聟は舅殿さ年始にえぐ(行)に、何んとせつ(言)てえたらよいが隣の兄さ聞ぐさえぐど、隣の兄はスガワリザツコ(氷割雜魚)を取るに川さえて居だので、そごさえぐど隣の兄は、川の向ふさえて居だがら、こつち岸で隣の兄し〳〵、舅殿さ年始にえぐに何んてせつてえげばよがべましと聲をかげるど、隣の兄は雜魚はなんぼ取れだがと聞くのだとがてんして、空ハギゴ(畚)を高ぐ差上げで、

今朝のシバレ(寒氣)で、これ〳〵是ればかり。

とぐる〳〵とフルマシ(振り廻)て見せだ。

そこで馬鹿聟は新しいハギゴを持て舅殿さえぐと、先づ舅殿の前さ空ハギゴを持てえぎ、頭の上さ差上げで、今朝のシバレでこれ〳〵是ばかりとフルマシ、それから姑嚊の前さ行ても、今朝のシバレデこれ〳〵是ばかりとフルマシたら、舅殿はあきれでこの馬鹿聟さ娘をけで置れないとて、とう〳〵オガダ(女房)を取返されだどさ。どつとはらい。

五七　毒梨子

昔あつたぢもな。お寺の梨の木さ今年はじめで梨子はなつたがら、和尚様はそれを大切にして居るど、或日壇家さ出掛げるので、小僧こさ此梨子は毒梨子だがら、取てくな(食)といつて出掛げだ。そこで小僧こは一人留守してると、梨子を食たぐて〳〵たまらなくなり、梨の木の下さ行て見でれ、ボキコ(棒木)でポキッと一つ突ついで見るど、もげで梨子は落ぢだので、和尚様に毒梨子だがら食などいはれだども、あまりうまそうな梨子だがら、一口あぐりと食て見だらば、何んとも言れないうまい梨子で毒梨子ではながつたので、もう一つ掩で食ひ、もう一つ掩で食ひして皆もいで食つてしまつた。すると小僧こは梨子を皆食つてがら、和尚様に毒梨子だから取てくなと言はれだ事を思ひ出して、和尚様は歸つて來れば叱られるのを心配して居だら、もう和尚様の歸る時刻になつたので、ふだん和尚様の大切にしてござる茶呑み茶碗を、爐緣さぶつけ(打附)で毀して置いだ。

そしてれまなぐ(目)さタンパ(痰)をつけで、泣まねをして居るど、和尚様は壇家がらお菓子だの粉餅だのを貰て來て、小僧誰も來ながつたが一人でオッカ(恐)なぐなつたがと言ふど、小僧こは障子の

陰でクシ〳〵と泣で居だがら、何して泣で居だと聞ぐど、小僧こは和尚様の大事にしてござる茶碗を洗るべとして落して毀したがら、和尚様さ申譯ないと思て、死ぬべと毒梨子をもいで食たども、死なれないので、又一つもいで食たがまだ死なれながつたので、皆食ても死なれながつたがら、泣で居だと言ふど、和尚様はイニャ〳〵何して死なれべあ、あれは毒梨子ではなくて砂糖梨子だがら、うなに取てかれまいと思ひ毒梨子と言つたので、うまがつたべが。茶碗は毀してもよいがら泣な〳〵、これやお菓子だの餅だの貰て來たがら、食て寢ろ〳〵とて食せで寢せだどさ。どつとはらい。

五八　頭さ枕

昔あつたぢもな。馬鹿聟は舅殿さよばれで行ぎ、初めで枕をして寢だが枕は頭がら外れでしかたがないので、側さ寢で居だオガダ(女房)さ、ザエ〳〵、これは何んと言ふものだ、頭がら外れで困るがナゾにしたらよいであと聞ぐど、オガダは枕といふものだが、そんだら褌で頭さゆつけで寢でござえと言ふので、言はれだ通りに其枕を褌で頭さ結附で寢だ。

そして次の朝間になつて其枕を取ることを忘れで、そのまゝ起ぎで炬燵さあだつて居るどこれを舅

殿は見附け、アレヤ〳〵聟は何して頭さ枕を結附で、炬燵さあだつて居るが、あんたな者さば娘をけで置れないといつて聟ばがり歸すた。馬鹿聟は仕方はないがら、舅殿を出るど、オガダは門の外まで出で來て、あのなし家さ歸つたらば隣の兄だの又其隣の兄だのを助られで、頭さ枕を結つけで俺方の林さ雉子ぼい(追)に來てござえと言つてよどしたがら、家さ歸ると其通りに、隣の兄だのまた其隣の兄だのを助られで、頭さ枕を結附けで舅殿の林さ雉子ぼいに行ぎ、雉子もえないのに雪の中をヤグド(故意に)それあそちや行た、これあこちや來たど、前の林がら後ろの林さ騒ぎ廻つた。

そこで舅殿は緣側さ出はつて見れば、頭さ枕を結附だ雉子ぼいはベロリ又ベロリと前の方がら後の方さかけまわるので、あれあ頭さ枕を結附だ雉子ぼいは來てるがら、出はつて見ろと言ふど、娘は來て見てれあれあ隣の兄だと言ふど、又一人出で來たのであれあ又其隣の兄だと言ふて、何なしおらぼのあたりでは雉子ぼいに出るには頭さ枕を結附るもえと言つた。するどそれを聞いだ舅殿は、そういふ處がらでは仕方はないとて、娘さぢつぱり(一杯)秋餅を持だせて、聟の家さ返してよどしたどさ。どつとはらい。

五九 七人地藏樣

すみ

昔あつたぢもな。今日大晦日で年取りだがら、町さ行て來て年を取るべなと思ひ、寺の下を通るど、石の地藏樣達は雨雪に洒されで、お顏がらすただれを垂して並んで居たので、嚊は三年三月かゞつてこさへだコシビリ(絆纏)を賃さ置いで、編笠を六つ買て其地藏樣達さかぶせたら、一人ふえで居で一つ足りながつたので、仕方なくそれさば自分の被つて來た編笠をぬいでかぶせて家さ歸つて來た。家では何が買てくべ(來)なと思つて待つて居たが、町使をさなえで歸つて來て、俺は寺の下を通るど地藏樣達は餘り寒むそうに雨雪に洒されでござるがら、錢こはたりないのでコシビリを賃さ置で編笠を買てかぶせで戻つて來たと言ふど嚊も喜んでそだらば漬物でゞも年を取るべとて夕飯を食つて寢だ。

するど夜中過ぎに何處がで、よういさあ〳〵と橇引の聲はするので、夫婦は目を覺して、元日の朝間に橇引をするのは不思議だなと思つて聞で居るど、其掛げ聲はだん〳〵家の方さ近ぐ來るようだがら、はてな橇引は俺方さ來た樣だと思ひ起ぎで見れば、そこら中は明るぐ輝いで、七人の編笠を被つた人達は、よいさあ〳〵と掛げ聲しながら、黃金を橇でおにや(外庭)さ置で行くのであつたがら、こ

れは寺の下の地蔵達は持て來てけだものだと思ひ押しいただき、それがら夫婦は幸福になつたどさ。
どつとはらい。

六〇　ぷつぷとあぇ燗

昔あつたぢもな。和尚様は小僧には早く寢ろ〳〵と言て先ぎさ寢せでがら、火を起して餅を炙り、そして其餅は燒げるど一つづゝ取り上げでプツプと吹で手で叩き、戸棚がら酒を出して燗をつけ、燗はつぐど盃さ注いで一口飲んで見では、アェィ燗だと言ひ〳〵した。

それを早ぐ寢でれ床の中で聞で居だ小僧達は、一人は餅を好ぎで一人は酒を好きであつたから、二人は相談して、或日和尚様さ餅好きな小僧は、和尚様し〳〵、おればこれがらプツプと附げでけろと言ふど、酒好ぎな小僧は和尚様し〳〵、おればこれがらアェ燗と附げでけろと頼んだ。それは何んの事だが和尚様には分ないどもうんよし〳〵と承知した。

すると其晩も和尚様は小僧達を早ぐ寢せでれ火を起し餅を炙り酒を出して燗をした。それを小僧達は床の中で今が〳〵と待かまへで居ると、和尚様は餅は燒げだと見えで取つてプツプと吹いで叩ぐど、

餅好ぎな小僧は、ハイ何御用と言つて吮ね起ぎて和尚様の前さ來たがら、和尚様は仕方なしに餅は燒げだがらうなど(お前等)さ食せべと思ひ呼んだがら食へと言つて餅をかせだ。今度は燗はつぐど一口注んで飲み、これはアェ燗だと言ふたら、酒好ぎの小僧はハイと起ぎで和尚様の前さ來たので、和尚様は燗は出だがらうなに酒こを飲せべと呼んだがら飲め〳〵と言つて飲ませだどとさ。どつとはらい。

六一　三人の聟

昔あつたぢもな。或時聟三人は舅殿さよばれで集ると、お舅様の前さ出で、銘々に話をする事であつた。ところで三番娘の聟はお舅様し〳〵、おらほの後ろの竹林で毎晩騒ぐ者はありますが、あれは一體何者でござりませうと聞ぐど、舅殿はそれが、それは竹に虎と謂つて多分虎が出で來てさわぐのであらうと言つた。次には二番娘の聟はお舅様し〳〵、おらほの坪前の牡丹の下を、毎晩何者だが來て、フヂラカシ(踏散す)ますが、あれは何者でござりましようと言ふと舅殿は、それが、それは牡丹に唐獅子と謂ふて、唐獅子は來るのであらうと言つた。

今度は一番娘の聟の挨拶であるが、無口で世間話を知らないものであるが、默て居るわけには行か

ないので、恐る〳〵お舅様〳〵、おらほの桐の木畠さどたり(毎度)來て枝をかいで行く者はありますが、それを知つて居なさるがと言ふど舅殿は、それはが、それは桐に鳳凰と謂て、其鳳凰であらう目出度事だと謂ふたら、其聟はイニェ〳〵そたな者ではごありません、足駄さしは來て持て行ぐのでごあすと言つたどさ。どつとはらい。

六二　朱膳　朱椀

昔あつたぢもな。田舍者は上方見物に行つて旅籠屋さ泊るど、旅籠屋の亭主にお客樣は上洛だが下向だがと聞がれだ。すると田舍者には、それは何んの事だがさつぱり(一向)分らないので、それは何んの事だと聞ぎ返すど、亭主は上るのは上洛で下るのは下向だと聞かされた。そこで田舍者はハア上方では上る事を上洛と言ひ、下る事を下向といふなと覺えで、次の旅籠屋さ行て泊るど其旅籠屋の亭主はお客樣さ朱膳・朱椀を出して上げろやと言附で居だがら、なぞなものを出すがと思つて居るど赤い膳・椀が出だので、田舍者は上方では赤い物を朱膳・朱椀と言ふだなと思ひ込んだ。

また次の旅籠屋さ着ぐど、其旅籠屋ではお客樣にレレペ汁を上げろと言ふと、肴の頭汁は出だので

田舍者は、上方では頭のことをレレペと言ふだなと思つてしまつた。それから次の日其旅籠屋を出で町を行ぐど、山伏は門毎に法螺の貝をぼぼん〳〵と吹いで、愛宕山にハツチと言て歩ぐど、物をくれるのを見だがら、ハハア上方では人がら物を貰ふことを愛宕山にハツチと言ふものだなと覺えだ。なほ又歩いで行ぐと今度は往來で、人足共は大きな石をエンヤラヤノドツコイショと引張て來るのに逢つたがら、上方では石の事をエンヤラヤノドツコイショと言ふだなと思ひついだ。

そして何日か目に上方見物をして家さ歸つて來たらば、或日親父は柿の木さ登つて、木がら落ちで石さ頭を打つけ血をたらしたがら、醫者殿さ行て藥を貰つて來る積りで出がげだが、上方見物で覺えで來た言葉を使つて見るのは此時だと思ひ、醫者殿さ行つて醫者樣し〳〵、俺方の親父は柿の木さ上洛して下向の時、エンヤラヤノドツコイショさレレペを打附で、朱膳・朱椀はかつかと流れだがら、お藥一服愛宕山にハツチ、ボホン〳〵と一息に言ふたら、醫者殿は何の事やらさつぱり分らないので、聞返しても其通り言ふので、仕方なく若者と一緒に其家さ行つて見るど、何の事もない親父は柿の木がら落ぢて石さ頭を打つけで、頭がら血を垂したのであつたのだたどさ。どつとはらい。

六三　おけあえもんこ

昔あつたぢもな。馬鹿聟は舅殿の秋餅さよばれでえぐ(行)ど、臺所の方では女ご達は盛んに小豆餅を拵へて忙しい所さ、ワラシヤド(子供等)はその餅を食ひたいとはだる(ねだる)ので、これはオケアエもんこ(恐しい物)だがら、あちや(あちら)行てろとせう(言)のを、常居の炬燵でそれを馬鹿聟は聞いで居だ。それがら膳立の支度も出來たので、さあさ先づあがつて(食)けろとて聟を座はらせ、小豆餅椀をテツパチ椀(飯椀)さ山盛りに盛つて出すど、聟はさつきワラシヤドさオケアエもんこだとせうのを聞いで居だがらおかなくてさあこどだ(大變)と思ひ、それを敷物の下さまげで(落)食たふりして寢るど夜中に腹はへつた。

次の朝又オケアエもんこを出されではこどだと思ひ起ると、家さ歸ると言ひ張るがら、舅殿ではあぎれでそだらばとて小豆餅を苞さ入れであづげでよどすと、馬鹿聟はおかなくてやんた(嫌)ども、それを背負せて貰つて來れば、あまりおかなへので途中さおろして見るど、苞の間がら白く餅肌は出はつて居たので、これあオケアエもんこは牙をむくつたのだと思ひ、その苞をバエラと投げて家さ走せ

で來た。

家さ來るどあつば(お袋)腹はへつたがら、まま(飯)をかせろとせうがら、お袋は何して早ぐ來たべ舅殿では何も食せながつたがと聞ぐど、オケアエもんこを出されだがら、おかなぐつて敷物の下さまげてかながつたが、今朝家さ來るど言たらば、其オケアエもんこを苞さ入れで持だされ、背負て來るど苞の間がら牙をむくつたので、雪の上さ投げで來たとせうので、お袋はそれはオケアエもんこではなく小豆餅だべがら拾つて來るとて出で行ぐど、途中に其小豆餅の苞はあつたがらそれを持て來て食つたらば、息子もそれを食てひどくうまがつたたどさ。どつとはらい。

六四　餅燒ぎ

昔あつたぢもな。ある山寺の和尚樣は、檀家から小餅を貰へばしまつて置いで、小僧の見ない時ばがり出して燒いで食つたが、或時その餅を燒いで食ひたくなつたので、小僧々々、門前の家はなんぼ(幾等)ばがり建つたが見で來いと言附けだ。

小僧はハイと言つてお寺を出がげるには出がげだが、和尚樣は獨り居で又餅を燒いて食ふのだなと

思つて門前まで行つたふりして途中がら戻つて來るど、和尚様はヒボド(圍爐裏)さ小餅を並べて燒いで居だが、小僧は早ぐ戻つて來たので、あわてゞ其餅をあぐ(灰)の中さ一つ宛隱して、知らぬ振りをしてれ、小僧なんたら早がつな門前の家はなんぼばがり建つたけと言ふた。

すると小僧は火箸を持つて、あのなし門前の家は先づこゞさ柱は一本建つて、又こゞさ一本建つて

と言つて、火箸をヒボドのあぐささつきり〳〵と立てで、餅を挿し上げるど、和尚様はさうやたらに火箸をあぐさ挿すな俺どうなどして食べと、今餅を燒いで居だところだと言つたどさ。どつとはらい。

六五　てんぽ競べ

昔あつたぢもな。チヤウ(京)のテンポ(虚言者)と、ヨナガ(田舍)のテンポと、テンポ競べをする積りでやつて來たところ、ヨナガのテンポは留守で、ワラシ(子供)ばかりヤドト(留守人)をして居だが ら、親父は何處さ行つたがと聞ぐど其ワラシは、俺方のてゞ(父)は須彌山の山は崩れるとて、苧殼三本持て、つゝぱりかふに行きましたと言つた。それではお袋は何處さ行つたと聞ぐど、あつば(母)は天竺の八日町は立づとて、蚤の皮千枚、虱の皮千枚持つて商ひに行つたますと謂ふので、子供でさへ

これ程のテンポ(嘘)をまげる(言)がら、これの親父はなんぼえらいテンポだがと、怖れて歸つた。

そゞさてゞ・あつばは畠がら上つて來て、今日は誰も來ながつたがと言ふと、ワラシはチヤウのテンポと謂ふ人は來て、てゞは何處さ行つたと聞ぐがら、須彌の山は崩れるとて苧殼三本もてつゝぱりかふさ行つたと言ふたら、そだらばあつばは何處さ行つたといふので、天竺の八日町は立づとて蚤の皮千枚虱の皮千枚持て商ひに行つたと言ふど、たまげ(驚)で歸つたと言ふがら、てゞ・あつばは此餓鬼(小供)ははがら(今から)そたなテッポまげでは末は案じられるとて、うんと叱つたどさ。どつとはらい。

六六　擂粉木

昔あつたぢもな。毎晩嚊は足を洗ふにニワ(土間)の戸口さ盥を持つて行て、えぎみ(尻)を戸の節穴さ向げで洗つて居るど、ほら下(軒下)がら鄰のとゞ(夫)は……をつだじ(突出)のであつた。それを家のとゞはおべで(覺)居でれ、或晩嚊のふりして盥さ湯を汲んで、ニワの戸口さ持つて行て足を洗ふ振りしてるど、いつものように鄰のとゞは來て戸の節穴がらシズコをつだしたので、それを手でギ

リリと押へつけだ。そしてれ嚊に、何だが押へだがら、庖刀を持て來いと言附ければ、嚊はそれを察して、庖刀は何處さ行つたが見なへと言つて、其處らをダエドメグリ(うろ〳〵)して、探す振りをした。

其內に鄰のとゞは逃げべとするがら、家のとゞは逃すまいとしてせぐので、早ぐそごらを探して持つて來いと言ふたども、嚊は見附からない振りして持つて來ないがら、それでは俺は探すがらお前は此處さ來て押へで居れと言ふと。嚊はハイと言つて手早く搗粉木を持つて來て隣のとどのなを放してやり、節穴さば搗粉木を差して押へで居たらば、家のとゞは庖刀を見附で來て、それを切るべとするど堅ぐて切れながつたがら、よゞ見るど搗粉木であつたので、こりやうなは木にしたなと言つて、嚊を共搗粉木で叩ぎのめしだとさ。どつとはらい。

六七　夕顔長者

昔あつたちもな。兄の方は仕合はよいども慾たがり者で、弟は貧乏だども正直者であつた。或年弟は種籾を無ぐしたがら兄の處さ借りるに行ぐど、兄は其種籾を湯さ入れで貸してよどすたがら、それ

を蒔いだども苗は一本も生いながつたが、不思議に夕顔はたつた一本生ひだ。そこで弟は其夕顔を大事にして手入をして居るど、大變に茂つて來て蔓は田地一面さ廣がり、花はゆる〳〵と咲ぎはじめ、夕顔の實はウンとなつた。

けれども弟は今年は米を取る事は出來ないものと諦めで、夕顔でも食べなと思つて、一番生りを一本もぎて來て、庖刀を立でるど堅ぐて仲々切れないがら、鉞をもつて來て切り割つたらば、中がら精(しらげ)の米はざぐ〳〵と出でまがつた。そこで喜んで又もいで來て切り割つて見るど、それがらもザグ〳〵と精の米は出で來るので、何本も〳〵取つて來て切り割れば、どれがらも〳〵出だので、それを俵さ入れで積んで置いたら、運は向いで來て長者になつたどさ。どつとはらい。

六八　せつとこ

昔あつたぢもな。馬鹿聟は舅殿で團子を御馳走になつたら、あまり甘かづたので其團子の名前を忘れないようにして、家さ歸つたらあつば(お袋)さそれをこさえで貰つて食ふ氣で、舅殿がら出るど團子・團子・團子・團子といつしめん(一所懸命)に續げで來たら、自分の家近くに來た時、側の堰(溝)を跳ね(越)る拍子に、セツトコと聲掛けして跳るど、今度はセツトコ〳〵セツトコ〳〵と續げて家さ歸つて來た。

馬鹿聟は家さ來ると、あつば(お袋)〳〵、セツトコを拵へてたもれとせう(言)ど、あつばはセツトコでは何んの事だがと聞いだら、息子はセツトコでばセツトコさ、早ぐ拵へてたもれと言ふので、あつばはきみちか(短氣)して、何んの事だが譯のわからないことをせうがら、息子を木の尻を持て叩ぎつけるど、おい〳〵ど泣だが暫くたつてがら見れば、ナヂギ(額)さ大きな瘤は出だので、あつばはそれあうなほ餘り解らないこどを言ふのだがら、ナヂギさ團子のような瘤は出だとせうど、其時息子はその團子さ、團子を拵へてくれろとせつたどさ。どつとはらい。

六九　狐のうば子

昔あつたぢもな。もんぢやの吉は程島のあたりを通つて來ると、藪この陰こで狐はとむくれんこ(中返り)をして居るがら、何をして居るがと思つて默つて見てたらよい姉樣に化げだ。それがら雉子こ の頭の毛こをむしつておぶ(背負)と綺麗なボコ(赤坊)になり、また木の葉をふたでると、赤いふたでこ(飾着)になり、今度は木の葉を手さ持つたと思ふと、よい手土産になつた。そしてちよい〳〵と歩き出したからもんぢやの吉は何處さ行ぐべと思つて、其後さかだつて來ると長者殿に這入つた。

すると長者殿のふたつ(人達)は出で來て、うば子(次女)はよぐ來たこどとて手取りして内さ入れ、ふうんボコもおがつた事と言つてもてはやした。それをもんぢやの吉は走り前(流し)の連子こでまがつ(覗)て見て居だが、程島の狐はうば子樣に化げで來たのを、騙されで手取りをして居るのを、長者殿さ知らせでやる氣で申し申し、それはこちらのうば子樣ではなぐ、程島の狐は化げで來たのだがら騙されるなと聲をかけだら、急にあだりは暗ぐなつたのでばてなと思ひ、せつさ(折角)と連子このあたりをまがつて見べとして居たら、そこらあたりを草刈りの若夫達(若者)は馬に乘つて通りながら、

あれやあの人はもんぢやの吉ではないが、何してるだべと言ふ聲を聞ぎつけで氣は附ぐと、狐に騙されて、ソマ(斃馬)のけつ(尻)穴をまがつて見で居だのであつたとさ。どつとはらい。

七〇　桃の子太郎さん

昔あつたぢもな。爺ナと婆ナはあつて爺ナは山さ行ぎ、婆ナは洗濯に川さ行ぐど、桃こは一つチンブリ・カンブリと流れで來たがら、婆ナはそれを拾つて來て、戸棚さ入れで置いだらば、爺ナは山から薪を取つて歸つて來たので、爺ナシ〳〵戸棚さ桃こを入れで置いだがらあがつてございといふと、爺ナは戸棚を開げで見ると、めごい(可愛)男ボッコ(赤坊)は生れでれ、ホホギヤ〳〵とないで居だので、桃こがら生れだのだがら桃の子太郎とつけで育でゝ居たらば、其桃の子太郎は大きぐなつて婆ナさ鬼ケ島を征伐さ行ぐがらきみ(黍)團子をこさへでけろと言つて、黍團子をこさへて貰ひ、それを腰さ提げで爺ナに常口(前の道)まで送られで出かけると、途中に犬は待て居で、桃の子太郎さん、桃の子太郎さん鬼ケ島さお供をするがら、腰のきみ團子を下さいといふので、桃の子太郎は早速腰からきみ團子を取出してけで家來にし、又行ぐど今度は雉は飛んで來て桃の子太郎さん・桃の子太郎さん、

鬼ケ島さお供をするがら腰のきみ團子を下さいといふがら、桃の子太郎は腰がらきみ團子を取出してけで家來にし、又行ぐど次には猿は山がら出で來て、桃の子太郎さん、桃の子太郎さん、鬼ケ島さお供をするがら腰のきみ團子を下さいといふので、桃の子太郎は腰がらきみ團子を取出して、それにもけで家來にして、いよ〳〵桃の子太郎は鬼ケ島さ漕で行ぎ鬼を征伐すると、鬼ケ城には鐵の門はあつて、そごを鐵の棒を持つて赤鬼・青鬼は堅ぐ守つて居だので、先づ犬と猿とは其鬼共さはねかゝり、雉は飛んで城の内さ入り、鐵の門を開いだがら、鬼共は退治されで降參して、城の内にある寶物を鐵の車さつけで、家さ持つて來て、爺ナを喜ばせだとさ。どつとはらい。

七一　かちかち山

昔あつたぢもな。爺ナは山がら惡い狸をおさへで來たので、狸汁を煮で食べなと思ひニワ(土間)さ吊して出で行ぐど、其狸は側でキシネ(米搗)を搗で居る婆ナに、キシネを搗て助けるから繩を解いでけろと騙して、婆ナに繩を解いで貰ふと、婆ナがらギゲ(杵)を取返して其婆ナを叩き殺して、婆ナ汁を煮で食ひ骨は板の下さ投げ、婆ナの着物を着で婆ナに化げで居るど、爺ナは山がら戻つて來たので

それさ狸汁だといつて婆ナ汁を食はせたが、着物の裾から尾パは出だので爺ナにめけ(見附)られだから狸は、

婆ナ食つてうまがつた、まだ奥歯さはさまつてる。

と悪口をいひながら逃げて行つた。そこで爺ナは狸に婆ナを殺されで悲しくてオイ〳〵泣で居るど、山で爺ナに助けられだ兎は聞ぎつけで來て、爺ナし〳〵、何して泣でるといふがら、爺ナは悪い狸に婆ナを殺されだがら、悲しくて泣で居るのだと言ふたら、兎はそれを氣の毒に思つて俺は敵を打てけるがら泣かないでござへとて戻つた。

それがら兎は悪い狸の處さ行つて、柴を取るにあべたえ(行)と誘ひ出して、山さ一所に行ぎ柴を取つて、それを狸さ背負せで先ぎさ立でゝ來るど、兎は火打ち袋から火打石を出してカチ〳〵と打てば狸はあれは何の音だと言ふので、兎はあれはカチカチ山のカチカチ鳥こさと言ひながら、狸の背負てる柴さ火を附ければ、火はボオ〳〵と燃えだがら、狸はあれあ何の音だといふと兎は、あれはボオボオ山のボオボオ鳥こさといつて來る内に、柴は燃えで狸の背中さ火は附いだので、どでん(驚愕)して狸は山がら逃げ歸つた。それがら狸はやげ(火傷)になつて、背中ぢうをあがめだぐれ(皮は取れ)にして困つて居るど、兎はやげにつける良い藥だとて、なんばん(唐辛)のここ(粉)を持つて來てつけでければ、背中のやげはビリ〳〵と痛めで、ころびあるぐほどいだぐで、うんと苦しんで死にがえりをした。

今度は兎は舟を刎いで居るどそごさ狸は來て何し居るどいふがら、兎は舟を刎いで居る處だといふと狸は俺さも刎いでけろと言ふので、兎は自分のなは木で舟を刎ぎ狸のなは土で舟をこさへてやり、それを海さ持つて行つて銘々に乘つて漕ぐと、狸の舟は土でこさへたものだがら、水は追々濕てそろそろ壞れ、狸は海さ這入つておぼれたのでそれを兎は擢をふりあげで打のめし、とう〳〵狸を退治して婆ナの敵打をしてけだとさ。どつとはらい。

七二　舌切り雀の宿

昔あつたぢもな。正直爺ナは雀をめど(可愛)がつて飼つて置ぐど、隣さ飛んでゝ慾たがり婆ナは洗ひ物さ附けるオネバコ(糊)をさつはり(皆)嘗めたので、婆ナはどせやいで(立腹)鋏を持出して來て雀の舌こを切つて飛ばしやつた。そこで爺ナはそれを悔すがつて早速旅仕度をし、雀の宿を尋ねべと杖をたよりに家を出て、

舌切り雀殿、お宿はどこでござる。

と言ひながら歩いて行ぐと、大きな竹藪の中で、こどだ〳〵チリン〳〵、と囀づるがら、其の中さ這入つて見るど立派な構へはあつて、門の外まで雀は迎へに來て居だので、爺ナは喜んで雀のお宿さ行ぐど雀達は皆出で來て手取りをするがら、爺ナは一層めどくなり逗留するともなく逗留していさ歸ることになれば、雀は重い葛籠をほしいか輕い葛籠をほしいかと言ふから、爺ナは俺は年寄りだがら輕い葛籠をほしいと言ふと、そだらばとて輕い葛籠をけで背負はせでよこした。爺ナはそれを家さ背負て來て開げて見るど黃金・白金に寶槌やら珊瑚樹やら寶珠玉まで、有りとあらゆるの寶物は這入つて居だので爺ナは喜んでゐる處さ、隣の慾たがり婆ナはエッチヤラ・クッチラと歩いで來てこちでは何か美しい物を廣げでるが何をして居るどと言ふので、爺ナは何なし雀は飛んで行つたがら悔しいと思つて雀さお宿を尋ねで行つて、輕い葛籠を貰つて來て今開げて見で居る處だと言ふた。

そこで隣の慾たがりの婆ナも雀のお宿さ行つて見たくなり、杖をシャパツて

舌切り雀殿、お宿はどどた、どどた。

と竹藪さ尋ねで行ぐど、立派な構へはあつたのでそどさ這入つてけば、雀は缺げだ椀こで臺所のすま(隅)で食はせで、歸る時に重い葛籠をほしいか輕い葛籠をほしいかと言ふたらば、もとより慾たがり婆ナの事だがら、俺は腰は曲つても達者だがら重い葛籠をけでけろと言ふて、重だい葛籠を背負て來たら、途中であまり重たぐなりそどさ下して休んだが、開げで見たくなつたので其葛籠を開げて見

るど、中には三ツ目入道だの抜首だの蛇だの、蟲けらの死骸やら臭い馬の糞・ベゴ(牛)の糞・犬の糞まで這入つて居で、きたないやらおつかないやら婆ナはどてん(驚愕)して途端さ死んでしまつたたどさ。人の眞似すれば大水食ふとはこれの事だ。どつとはらい。

七三　古屋のムル

昔あつたぢもな。爺ナと婆ナは雨の降る夜る寢でれ、今夜のような晩にはドンド(唐土)の虎よりも古屋のムル(漏)はおつかない(怖)なしと話をすると、其時ドンドの虎は爺ナ婆ナを取つて食ふ積りで厩さ來てかくれてたが、此話を聞きつけで、それでは俺よりもおつかない古屋のムルとはなぞな者だべと思つて、逃げべとしてると、爺ナ婆ナは寢鎭まつたならば金を取つてけませうと思ひ、軒下で樣子を見で居た盜人は、ドンドの虎の話を聞で急におつかなくなり、馬を盜んでのはつ(乘)て逃げべと思ひ厩さ行ぎ、そこに居だドンドの虎を馬だと思つて乘はると、ドンドの虎は盜人に乘はられたので古屋のムルとはこれの事だと思つて、盜人を負つたまゝゆわや(岩谷)のすまかいさドン〳〵とはせて行つたどさ。どつとはらい。

七四　隱れ蓑に隱れ笠

昔あつたちもな。小ざかしいワラシ(小供)は、お袋からブツカレコロシ(破れ篩)を貰つて、それを山さ持つて行ぎ大木の下で、其ブツカレコロシをツラ(顏)さあでがつてれ、あれあ江戸はめ(見)るでや、あれあ大阪はめるでやと獨りでモチヤスビ(持遊)にして居たら、それを最前から樹の上で見で居だ天狗は、ハテ不思議なものをモチヤスビにしてるワラシだなと、たまげ(驚)て樹から下りで來た。そして、ぜ・ぜ俺さもその品物をまがて(覗)見せろとせう(言)ので、ワラシはどてん(驚愕)したふりして、其ブツカレコロシをふとど(懷)さ隱す眞似をした。

すると天狗はひどく借りたくなつて、借せ〳〵とはだる(ねだる)がら、ワラシはほだら(そんだら)ばお前樣の隱れ蓑に隱れ笠を借してどざへとせつ(言)た。そこで天狗は喜んで、ブツカレコロシと隱れ蓑に隱れ笠を取替へに貸したがら、ワラシはこれはよい事をしたと思ひ、すぐに其隱れ蓑に隱れ笠を被つて、體を隱すと逃げで行つた。それとも知らないて天狗はブツカレコロシを持つて、向ふ山の方をいつしめん(一所懸命)にまがつて見だども江戸も大阪もめないので、側に居だ筈のワラシの方を

見たらばワラシの姿は見ながつた。

ワラシは其隱れ蓑に隱れ笠を家さ持つて來て、箪笥の引出しさ入れて仕舞つて置いだらば、お袋はそれを見つげて、汚ない蓑笠は這入つて居ると思ひ、それを竈の口さくべてしまつたら、あとでワラシはそれをおべ(覺)でくやしがり、河戸さ這入つて來て體をぬらして、その燃あく(灰)を體中さ塗附げでれ、アッパ〳〵とお袋を呼んで見るど、お袋はワラシの姿は見ないので、うなは何處に居るとせうから、ワラシは俺の姿はうまぐ隱れでしまつたと喜んで、すぐさま町さ駈げで行ぎ店の數を歩いて欲しい物を取つて食ひ、それがら酒屋さ行つて酒を盗んで飲みながら何の氣もなく口端をふぐど、あぐは取れでロだけ現はれだ。

そこで酒屋では、ロばがりの化物は來て酒を飲んで居るのだと思ひ、藏がら若夫達はどや〳〵と出で來てそれをぼう(追)べとすると、ワラシはどてんして酒屋を逃げで來たら、向ふがら侍衆(侍)は來て、おかしいロの化物は宙合を飛で來たなと思ひ込み、刀を拔ぐ手も見せず斬掛けだ。處は侍衆の腕は狂うたかワラシのシズコ(陰莖)をこすつたので、今度はロとシズコの化物となつて飛び歩くので、人さ人はたさつ(加)て其化物をぼつかけだがら、ワラシはこれでは迚も叶はないと思つて橋がら川さどぶんと飛び込んだら、體中のあぐは皆洗落ちで元のワラシになつた。そだがら誰も化物はワラシの仕業だと思ふ者はなく、世間の噂は町から町とひろまり、金麻羅樣の御夫婦ものだつたべとの評判で

あつたどさ。どつとはらい。

七五　柱隠し

昔あつたぢもな。新し聟はあね子(妻)と二人で舅殿さ呼ばれて行ぐと、あね子は途中で兄し(夫)兄し俺方さ行つたら座敷の床柱に節穴はあるせあと、其所さ柱隠しを掛ければよいとせ(言)てございと聞かせてえ(行)つた。そこで聟は舅殿さえぐど座敷さ上つてれ、お舅様し〳〵、向ふの床柱さいたみた(惜しい)所に節穴は御座りますがら、あれさ柱隠しを掛ければようどあんすなとせうど、舅殿もなるほど俺もそう思つて居たがよい所さ氣はついたと喜ばれだ。

今度は舅殿は聟さ馬を見せたくなつて厩から馬を引出して來て、馬喰のするように口をあげで見せだり、脛をさぐつたりしてがら、しまいに尾パ(尾)を取つて持上げで見せたらば、尾パの下がらけつ穴は見えたので、聟は早速お舅様し〳〵、これはほんとによい馬で御座りますが、唯いたみた所さ節穴はどあんすから、其處さ柱隠しを掛けでございとせつたので、舅殿は急につらをしかめて、あれあ馬鹿聟だがら大事な娘をけで置れないと、娘を取返して聟ばがりよどされだとさ。どつとはらい。

七六　怠け者

昔あつたぢもな。たゞ居てれうまい物を食ふことを授げられたいと思ひ、おぼつな様(土産神)さ願掛けした男は、滿願といふ晩に神様は枕上に立たれて、これからお前の足の向く方さ行きさへすればきつと願は叫ふとの事であつたから、喜んで爪先きの向ふ方さ旅立をした。すると人里も遠くなつて山の奥へ〳〵とえ(行)がさると、そこに立派なかがえ(構)の館はあつて、よい女どは迎へに出で來て手取りして内さ入れ、今迄に見たことは無い程のうまい御馳走を出して、毎日々々酒も飲み次第、肴も食ひ次第、その上女どは臙脂白粉に化粧して、ねんごろにしてくれるので、男は喜んで其館で暮して居だ。

そして何日か其館に居ると心も落附ぎ思慮も出で來たから、この何十人這入つても廣い位の館に、たつた一人の若い女どばがりすまかい(住)して居るのは不思議でたまらないので、或時それを女どさ聞いでも默つて笑つて居だ。そこで女どは何所さか行つた後で、奥座敷の方まで行つて見ると、陰でうなり聲はするから何事だろうと思つて襖の際から内をまがつて(覗)見たらば、肥え太つた男は倒さ

まに吊されて、其下さ炭をがん〳〵と起して、盛んに人膏を取られて居り、そこら邊には膏を取り切られた者と見えて、痩せこけだ青い人間は虫の息で横になつて居だ。そこで男は俺も斯して置いてれ今に膏を取られるのだなと氣はついたから、うるたえ(あわて)て其館を逃げ出すたら、いつ何處から現はれたものか、荒くれ者共は逃すてなるものかとて、どん〳〵ぼつ(追)かけて來たので、男は生きだ氣はなく、何處だともなしに夢我夢中で走せて山を下つた。

するとよい鹽梅に其所に一軒屋はあつたので、男は駈込むと婆様は一人居だから、其譯を話してなぞにかして助けてけろと賴めば、婆様は俺は彼の館に言附によつて、此所さ斯して見張番をして居る役だが、しかしお前を見るとむぜ(可愛想)さもむぜがら今度だけは助けべとて、側にあつたタラ(俵)さ入れで、ヒボド(圍爐裏)の上さ吊して貰ふか貰はない間に、さきたの荒くれ共はどや〳〵とぼつて來てれ、今の男をどごさやつたと言ふと、婆様は何もそたな男は來ない謂ふても、何來ない筈はない第一此タラは動いで居るから怪しいとて、きりはん(山刀)で拔切りにばさりと切り落したので 男はどつたりと下さ落ちだと思ひはつとすると、怠け者は神様の高緣から、こたな夢を見てされや落ちたのであつたとさ。どつとはらい。

七七 女房を出す戸口

昔あつたぢもな。或男は鄰の女房は常日頃化粧ばかりして居るので、ええ(良い)女ごに見へてるのに惚れて、家の女房は働くことばかりして、みだくなし(醜い)女ごに見えたから、お前はみだくなしだに依つてひま(暇)をけるはへと出で行けと言ふた。そこで家の女房は諦めて、出はつて行く氣で湯(風呂)さ這入り、お齒黑をつけたり髪を結つたり化粧したらば、鄰の女房よりも一段とよい女ごに見えたから、夫はひまをけでやるのは急にあたらもの(惜く)になつた。

すると其女房は夫の前さ手をつき、私も今日までお世話になりまして有りがとうござんしたと禮を述べて、それではお前様も達者で居で下されとてひまを取り、臺所からにわ(土間)の戸口さ行くと、夫は來て其出口さ立塞がつてれ、此所は俺の戸口だから此所から出るなと留めるので、常居の玄關さ行つてそこから出べとすれば夫はそごさも立塞がつて、此所も俺の玄關だからこゞからも出るなと言つた。そこで今度は座敷の緣側から出はべとすれば又そこさも塞がつて、此所も俺の緣側だから出るなと留めるから、女房もあきれてそれでは出て行く戸口は無いから私に出で行くなてしかと聞くと、

夫はうん出で行くなと言ふので、女房はもえ(裝)をほぐして元の通り家に居ることになつたら、男もそれからは鄰の女房さ通はなくなつたどさ。どつとはらい。

七八　馬鹿息子

昔あつたぢもな。馬鹿息子はあつて、親類のうち(家)さえ(行)ぐとかまこ(鐵瓶)をけでよこしたので、其紘こさ繩をつけてすみから(凍路)をがら〳〵と引摺つて來ると、はつぱり(全く)ぶつかれ(壞)たがら、おい〳〵泣いて來たらお袋はそれを聞きつけて、何して泣いて來たかと言へば、息子はぶつかれだかまこを見せながら、親類の處から貰つたので繩をつけて引摺つて來たらば、こたにぶつかれてしまつたので、口惜しいと思つて泣いで來たと言ふから、お袋はそれをだます(なだめ)てかまこを貰つたらば背負て來るものだと敎へた。

それから又親類さ行けば今度はからげ(擂鉢)を貰つたので、それをお袋の言葉通りに繩で背負うべとしたらば、からげは滑り落ちでちやぐんとぶつかれたから、家さ泣て來るとお袋は又何して泣いで來たであと聞くと、息子は親類では今日はからげをけだからそれを背負うべとしたら、背中から滑り

落ちてぶつかれてしまつたので泣いて來たと言ふので、お袋はそたな時には風呂敷さ包んで持つて來るものだと敎へた。次に行くと今度は火焚き婆樣をよごしたから、其婆樣を早速風呂敷さ包むべとすれば、婆樣はごせやいて(怒)息子の頭をごぎ〳〵とはだ(叩)きつけたので、息子はおい〳〵泣いで家さ戻つて來たら、お袋は又何して泣いて來たかと言ふから、息子は親類では婆樣をよごしたはへと、風呂敷さ包むべとしたら、頭をはだきつけられたので泣いで來たと言へば、お袋はそたな時は今日は大變暑い日だとでも話しながら、ニカ〳〵と笑つて連れで來るものだと敎へた。

其次に親類さ行ぐ途中で火事はあつたから、お袋に敎へられたのはこれだと思ひ、火事さ寄つて一今日は大變暑い日だと言ひながら、ニカ〳〵と笑ひながら歩くと、火消し達にごせやかれ(怒)て頭をはたかれたので泣きつめたれて來た。そこでお袋は、何してそう泣きつめたれて來たと言へば、息子は途中に火事はあつたからそこさ行つてれ、今日は大變暑い日だと笑つて歩いたら、頭をはだかれたので痛がつたから泣つめをたれて來たと話しので、お袋はそたな時は水をかけて助けるものだと言つて敎へたら、次に又親類さ行ぐ途中で、鍛冶屋の火はおこ〳〵と熾つて居たのを見ると、息子は急いで水を汲んで來て其火さばいら(いきなり)とぶつかけで眞黑に消してやれば、鍛冶屋の親父はごせやいて息子の頭をごぎ〳〵とはだきのめしたので、息子は大きな聲で泣きながら家さ戻つて來た。するとお袋は、今度何して泣いて來たかと聞けば、息子はおら鍛冶屋の火さ水をぶつかけて消してけた

らば頭をはだぎのめされたと言ふので、お袋はそたな時はうなも手傳て鎚を打て助けるものだと敎へてだました。

それから又親類さ行きたくなつて出掛で行くと途で、ボサマ(座頭の坊)さ行き逢つたから、息子はこゝだと思つて、鍛冶屋の鎚を打ち氣でボサマの頭をゴギリとはだきつけると、ボサマはごせやいでけえつちや(反對)に、杖で息子の頭をまなご(目)から火の出る程、はだき返されたので大聲でおいおい泣いて家さ來ればお袋もあきれで、こたな者を外さ出せばこれからどたな事に逢うかむぞい(可愛想)はえと出で歩くなとて、息子をそれから外さ出さながつたとさ。どつとはらい。

七九　話賣り

昔あつたぢもな。爺ナと婆ナはあつて息子を一人持つたところ、その息子はどうした事かあまり利口でながつたので、こたな者は家さばかり置くよりも旅さ出して見たならばよかべなと思ひ、金二百兩あづけ(持たせ)て旅さ出してやつた。

そこで息子は、家を出て旅を續けて行く内に或町さ行くと、其所に一話百兩と謂ふ看板は掛つて居

て人山を築いて居るから、息子はなぞな話を賣るのだべと思つて、懷から百兩を出してやると、其話賣りは柱の無い家さば宿取るなと言つたから、どうせもう一つ聞く氣であとの百兩を出せば今度は不思議な物をば氣をつけて見ろ。

と是だけの事であつた。そこで息子は其所を出て行く内に雨に降られて困つたので、路の傍に古屋はあつたのさ這入つて雨宿りをしてれ、見るともなしに其古家の中を見廻すと、軒ばかり深くして内に一本も柱はながつたから、話賣りの話はこれだなと思ひ出して其所を出る一拍子に、其古家は潰れてもう一息で息子は命拾ひをした。

そして又旅を續けて行く内に、或山の麓の明寺さ泊るとひどく荒れはてた古寺で、壁は落ち軒は腐れて板敷から草は生茂り、夜更に何かケダモノの聲は聞えて來るので、淋しいと思ひながら寢て居ると、本堂の方でおんかない(恐しい)物音はして、大きな火の玉はごろごろ〳〵と轉がつて出で來た。すると息子は、不思議な物をば氣をつけて見ろと言はれた、話賣りの話を思ひ出して、おんかなさもおんかなへども、我慢して見て居ると、其火の玉は暫くそこらを轉がり廻つてゐたが、また元來た方さ轉つて戻り、チヤリンと黄金の音を立て床下さ落ちて消えた。

そこで息子はなほよく見る氣で、夜の明け方を待つて其床下さ這入つて見たらば、床下には大判小判のし黄金は山吹色をして光り輝いであるので、一度はどてん(驚愕)したけれども、これは俺さ授つ

たものだと喜び、早速故郷から兩親を連れて來て其黄金を掘起して家さ運んで來たら、家は長者となり息子は利口者になつたとさ。どつとはらい。

後記

一　昔話集の事
二　昔話の諸註釋
三　郡と祖母の話

一

詞友佐々木喜善氏の『紫波郡昔話』は大正十四年九月に著はされたものであるが、その資料は私の以前から提供して居たものであつた。それが上梓されて目を通すと、失禮な言葉だが內容は大分佐々木型の昔話になつて居て、紫波郡の昔話としては特質を失つたものは多いので――これには充分理由のあることであると思ふも、出來ることならば私の手でもう一度書き直して見たいと考へた事は無いでもなかつた。この望は不圖も今達成し得たことは、偏に柳田先生の御厚意によるものと深く感銘するのである。

私は『紫波郡昔話』から祖母の昔話ばかりを拾つて、勉めて在りし日の面影を呼び起し、丹念に稿

を綴つたのは、本書『紫波郡昔話集』なので、この企ては佐々木氏の麗筆を穢したものであつても、昔話本來の目的を遂ぐる爲には又已を得ないのであつた。從つて名稱に就ても變更されたものはあるから、其新舊の名稱左に對照して看者の便にそなへたい。頭書の數字は昔話新舊の番號である。

昔話新舊名稱の對照

『紫波郡昔話集』	『紫波郡昔話』
(六) 和尙樣しやあ	(一四) 狐と小僧
(七) 長薯十七本	(四五) 三人聟
(九) 若ぎのほうぎ	(二) 三人兄弟
(一〇) 鼻利ぎ	(四) 鼻聞ぎ
(一一) 陣岡左衞門に馬場松公	(六) 陣岡左衞門に羽場松公
(一三) 豆こ一つ	(二七) 豆子嘶
(一五) 打たん太鼓に鳴る太鼓	(二九) 打たん太鼓に鳴る太鼓
(一六) 二束四束	(四二) 四足二足
(一七) 雁汁	(四三) 上の爺と下の爺
(一八) 山婆	(四四) 山女

(一九) 化げ茶釜	(五八) もんぢやの吉嘶
(二三) べここ長者	(一八) 牛長者
(二五) 伊勢詣り猫	(五六) 伊勢詣り猫
(二六) もんぢやの吉	(六四) もんぢやの吉嘶
(二七) 仙北町のとんてぎ	(六六) とんてき男
(三〇) 阿野樣	(二四) 河野樣
(三三) 脛子たんぱこ	(一〇〇) すねこたんぱこ
(三四) おんちこへんちこ	(九九) 朱塗小箒
(三五) 左樣の根	(九一) 挨拶
(三七) 娘さ通ふた蛇	(八九) 蛇の聟
(四二) ちよいわこら	(七六) 寺燒き和尙
(四五) ちよへん子ちやはん子	(八〇) ちよへんこちやわんこ
(四八) 大沼のぬし	(三) 沼の主から手紙を托された話
(四九) 生附だ黃金	(五) うみ付いた金
(五〇) 爺ナの畠打ぢ	(九二) 畠打

（五一）頭さ柿の木
（五五）爺ナのこばかま
（五六）今朝のしばれ
（五八）頭さ枕
（五九）七人地藏様
（六〇）ぷつぷとあえ燗
（六二）朱膳朱椀
（六三）おけあえもんこ
（七三）古屋のムル
（七四）隠れ蓑に隠れ笠
（七九）話賣り

次の四話は資料報告の際に態と省き又書き落したものであつたが、本書にそれを追加して置いた。

（六九）狐のうば子
（七一）かちかち山
（一一）額に柿ノ木の生へた男
（一一〇）爺那の小袴
（一一三）御年始
（一一四）枕
（一一七）六地藏が恩を返す
（一一八）燗酒
（一一九）れれぺ
（一二一）おかいもんこ
（一二五）唐土の虎と古屋の漏
（一〇八）隠蓑に隠笠を被つた子供
（一一〇）愚息子
（一一一）桃の子太郎さん
（一一二）舌切り雀の宿

二

以下は本文中の註釋であつて、頭書括弧内の數字は昔話の番號である。

（一）サイバンは俎のことで栞板の意であろうと思ふ。ホドは佐々木氏の昔話（以下は昔話と略稱す）に九年子とあるけれども、植物の本には一名ホドイモとも言ひ土芋・塊芋と書き、荳科の多年生草本にして地下の塊部は食用となり、普通に垣根・茅野に生じ子供等これを掘つて煮食す。坪前は庭園のことで庭木は坪木である。

（二）てで無し子は、テデとは父親のことで私生子である。

（三）古河は郡内北上川岸の地名。四幅風呂敷とは木綿幅を四枚縫ひ合せ、これを萠葱色に染め家紋と屋號を染めぬきたる風呂敷。

（四）長者殿はチヤウドウであり裕福・豪家を指す。口にえぼしは昔話に昔の語で今日は既に意味不明とあるが、古語かどうかもわからない。

（五）南昌山は毒ケ森と言ひ著者の村にある靈驗な山で、笹淵は其山中にある谷川の淵である。昔安倍の貞任は毒を流して官軍を惱ましたところ、義家は其谷川に笹を立てて毒を漉した處より名を得たといふ。よげないは意味不明なるも、これは世に餘計に無いといふ意かと思はれる。ワラシとは

子供のことである。ワラシヤドは子供等といふ意。でこは出居で客間とあれども當地では座敷の無い民家の物置をいふ。嚊はカガで女房のことであるが、嚊様・嚊しは他家の主婦を指す。とどは夫の事。キシネ櫃は飯米を入れて居る器物の名で、昔話に生稻櫃の文字をあてゝ居るも、又飯米櫃(ケシネビツ)と書くのもある。しかし生米(キゴメ)・きしねごめ・生蕎麥等の生は接頭語にて、新鮮・純粹の意をあらはす語とあれば講究を要する。

(七) 秋餅はアキモチで農家收穫を終れば其年の祝の意にて、一族を呼び集めて餅を搗き振舞ふ行事を言ふ。翌日は親類を呼びて座敷にて酒肴を馳走し、これを秋振舞と稱し、其夜は年中の業務に從事した近所の人達に酒を飲ませるのを秋酒といふのだ。ヘゲは卽ち折敷(オシキ)で檜のへぎ板にて製造したる膳である。ハエ雜魚は鮠のことで雜魚(ザツコ)とは川に居る魚類の事である。

(八) 木割は薪割りは目的であるけれども、昔は農家に於ける最も重寶な家庭道具であり、土を掘り物を植へるに使用した。

(九) 燒木の尻は薪の燃差しのことである。黑川の觀音と門の權現は何れも北上川の東にあり、實際は黑川の方は權現で、門(カド)の方は觀音であるらしいも、祖母は常にこう語つて居だ。又昔話にカドに角の字をあてゝ居るけれども門は正しいのである。わがぎのほうぎは昔話に若木の箒とあるが、是を私は若氣の檜扇ではないかとフト思つた。お神酒錫は大御酒德利である。德利をスズコ又

スズと普通にいふ。小袋とは財布と別な意味の錢入れの事である。

(一〇) とどは女房から謂ふときは夫で子供から謂ふ時は父である。まげは厩の梁のことで重に藁をあげて置く。長木は徑四五寸の松・杉の丸太で、其長さによつて四間長木・三間長木といひ、重に農家では稻・麥を掛けるのに使用する。フルダは蝦蟇で又フルダビツキとも言ふ。ビツキは普通に蛙の方言で靑ビツキ・カハズビツキの例である。藁つぼけは、藁をつみ立てゝ幾重にも重ねたものである。

(一一) 杓子と篦に就ては、杓子を總稱して飯又は汁をすくひとる具とあるが、當地での杓子は汁をすくふに用ふる凹みのある形のものにて、ヘラは飯を盛るのゝ名稱である。こゝに篦の字を使用したのは不當であるけれども、汁をすくう杓子と區別する爲であつた。侍衆は百姓から武士を呼ぶ階級名である。又旦那衆とも言ふ。若夫達はワガエフタツに私はあてた字であつて、若者共又奉公人と言ふものである。ヒボドは圍爐裏の註をつけて來たが一般には爐である。これは火の含處の義か火を焚く中央を特にホドと言ひ、ホドアクとは其所の熱のある灰で、ホドムシはホドの灰にぢかに食ひ物を入れて蒸燒にすることである。ヘナシを緣無莫蓙と註して置いたが、それでは說明不充分かも知れない。ヘナシとは莫蓙の裏に藁莚を縫ひ合せたる敷物で、疊の代用に敷くものである。陣岡と馬場は何れも郡內にある地名で連續して居る。昔話に馬場を羽場とせるは、資料報告者の誤謬

であつたから訂正する。

（一二）虫けらは虫共のこと。ベゴは牛の方言である。糠小屋は籾殻を入れて置く所で、ヌカとは籾殻のことで糠をばコヌカと言ふのである。あつぱは母の方言である。これを動物に應用しては牡馬をあつば馬・あつば犬・あつば猫と言ふ——但し馬に關する場合は牝馬をハダ馬と言ひ、牡馬をチチ馬ともいふ。鶏の雌はアツパトリ雄はテテトリである。鳴輪はナリワンで形狀椀を合せた様である。馬の首につける鈴の一種であらう。つぶは田螺の方言である。

（一三）針刺しは茅舍の屋根を葺く際、内部から締むる縄を通してやるのを言ひ、木製の針狀の道具である。あね子は嫁のことで若妻女及び年頃の娘の惣稱である。三番鶏はサンバントリで鶏は堺で三度目に鳴く事である。

（一四）泊り山は仲間同志して泊りながら山に薪を伐るに行く事である。うつ木は空木・卯木と書き虎耳草科の落葉灌木で、花は卯花である。生垣・地境等に植へ、又葬式の時死人の杖として棺の中に入れてやる。羽場は幅とも書き、壌丘連亙を成す地勢を言ふ。著者の村にある。升形はマスガタで盛岡市東口國道の往來所である。ケラは蓑の一種であり、舊南部藩主は世々美濃守であるから、蓑をケラと言ふたとあるも、世間にケラミノといふ言葉もあるやうだから是は信ぜられないと思ふ。叺依はカマスタラで依にする薦を二つに折り兩端を縫ひ合せたものである。辭典に、薦とは粗く織

つたむしろだとあるが當地のものは藁を編んだもので、これを造ることをコモアミと言ひ粗く織つた莚をばガツチヤムシロといふ。マダは級木の皮であるが之れは糸の代用にもなり昔は布を織つたものである。疊表を織るに用ひそれを製することをヨツチヨを縒ると言ふ。縒麻の儀なるか。

（一五）瓶蜂はスズメ蜂の事で又山蜂とも言ひ其巣の瓶に似たより起る。

（一六）刈上げ餅は稲を刈り終つた時搗くをいふ。ボサマとは座頭の坊で男の盲である。これを悪口してボケと言ふ。それの對照には盲女をイタコと呼ぶ。二束四束は昔話に四足二足とあり、四足とは獣のことで二足は鳥類のことである。こゝの二束四束は稲を刈る事で一把は三捆で、これを六把で一束といふのである。藁打槌は横槌といふ所もあるにや、當地にて藁を打つ槌に二様あり、砧槌形のものは手槌といひ、掛屋形のものをば藁打槌といふ。河戸はカドに著者のあてた字で、家宅の近くにある川や溝を堰止めて淀ませ日常使用する所を言ふ。

（一七）シシとは鹿の方言で、猪をウイノシシと謂ふに對して鹿をカノシシ言ふこともある。ガノは雁のことで其飛ぶ時に竿になれ鉤になれと言ふ。米の木は小米花にて噴雪花とも書き、又ユキヤナギとも言ふ。薇薔科の落葉灌木である。

（一八）女どは重に年増女を指す方言である。

（一九）もんぢやは著者の村で茂澤と書くよし。脂鰊一把は昔話に油鰊一束とあるは正しくない。脂

鰊とは身缺の上品を言ひ、當地では普通に鰊のことをカドと稱し、身缺をニシといふ。茶釜を磨くことは今の鐵瓶には無いことだが、古く南部釜は砂鐵を原料として製造したもので、それを家庭に於ては毎朝磨ぎて艶を出し爐の自慢とした。今も稀に民間にあつて砂鐵釜と稱して珍重されて居る。

(二〇) たご馬とは蹄の軟弱になる素質——病氣で、民間にては糯米或は糯稻の藁を食はせるとタゴになると言つて注意して居る。干泥田は水利の不便の地方で年中田に水を湛えて置くを言ふ。伯樂は今いふ獸醫である。

(二一) 山吹色は山吹の花の色と言ふ意である。

(二二) テツポコは註に襦袢の二重袖口と書いて見たが、この説明を延ばすと細民の子女は下著の袖口に更らに切れを二重に縫ひ足して、腕の現はれるのを隱すので冬に寒さを防ぎ又裝飾ともなる。コシビリは一種の半纏であるから腰限と謂ふ意かと思ふ。其裾の脛まで達するのはナガミチカと言ふのである。

(二四) みずは糸筋で縫糸を針に通したものを言ふ。乘馬は武士の乘用馬で今の乘馬とは異ふ。

(二五) オヤは本家のことであつてもとの家筋である。スミシモノとは濕物で米の粉を固くこねて團子などに拵へて食ふもの、彼の人はスミシモノは好きだなどといふそれだ。

(二六) 一手綱はヒトハヅナで馬七疋のことである。馬喰の馬を商賣する、標準語のようなものである。カワタケは必ず七つ續けて生へるので、これを馬喰菌との異名がある。奥は三戸・七戸で北の馬産地を指す。

(二七) 仙北町は盛岡市の南口にある町。志和稻荷は郡内にある縣社で舊南部藩主の崇敬したもの。わらだは昔話に、餅などを蒸す時小敷の下に置く藁の輪とあるが、これでは説明は變に聞こえる。小敷は甑で辭典には米などを蒸し炊ぐ器とあり、其上に敷く甑布の代用に民家ではミゴ(稈心)—皮を去つた藁の穗莖でコゼナ(細繩)を綯ひ、これを金針で鍋形に抄い編みたる物。永井・幅・岩崎は共に志和稻荷社の往還路にあたる。

(二八) ああなは長男の方言。あねこ達は今頃の娘共といふ事である。

(二九) みづこがは水桶でコガは總べて桶のことであるが、手桶は矢弱り手桶でコガとは言はぬ。ホドは爐の眞中で火を焚いて居る所のことである。

(三〇) 和山はワヤマで著者の村にある。阿野様は昔話に河野様とあるは間違ひである。馬放しとは春になると毎日厩から野原に連れて行つて、草を食はせたり運動をさせる事で、これには老人か子供をつけて置く。つつみは堤の字を用ひるけれども溜池のことである。ちやらぼくは方言で伽羅木のことにて、一位科の常綠木本で庭園に栽植せられる。牛方は縣北九戸地方から牛に鹽をつけて來り米と交換して行つたもので、當地では下等な米を牛方米と謂ひ鹽と交換するものとして居た。干

餅はホシモチで正月の鏡餅を吊して氷らせながら自然に干し、之れを六月の朔日に初めてコウベブカシ―頭毀しか―と稱して缺きて食ふ。

(三二) ただそは麻の皮を剝ぎ取つたまゝ干したものゝ名で、卽ち靑麻である。それを製したものは白麻と言ひ績麻となる。サイマンダラは綵曼陀羅と書くべきものか。

(三三) スネコタンパコのタンパは痰の方言である。うば子は良家の二女・三女の呼び名である。

(三四) 踏板は糞壺の渡し板で普通には橋板と言つて居る。

(三五) 鰹節は松魚節とも書く、それを昔話に鮭節とあるのは誤りである。

(三六) 人の眞似をすると大水を食ふとは何の諺か知れぬ。昔話に此諺の意味不明として居る。

(三八) 馬のぼろは馬の糞の方言である。冬季農民はこれを道路より拾ひ集めて置き肥料とする、これをボロサラエと稱へる。

(三九) 鯉ふなとは鯉の俚言である。シガは氷の事で氷は川や池に張ればこれをシガハツタと言ふ。馬の沓は藁で丸く蹄にはかせる樣に造つたもので、これをクツと言つて居る。ザイは流氷の名で冬に大河の中を氷は碎けながら、又は氷りながら流れるもので今日ザイは流れたと謂ふのは、相當に寒むい日であると言ふ代名詞に用ゐる。

(四〇) カマコは鐵瓶の方言。

(四一) 七十二は昔話に六十二とあり、普通には男六十二になれば山に放されると言つて居るが、こゝには七十二と祖母は語つてあつた。

(四三) あには兄で二樣の意味はあり、親や弟妹から呼ぶものは長男のことで、此場合の如く女(妻)より呼ぶ時は若き夫の事である。ズバタは昔話に、小棒に麻繩を着けそれに石をからんで振つて投げ飛ばす遊戯品だとあるが、著者の承知して居るズバタとは、大木の枝から生物(みりあり)を落す時に打つもので、手頃の棒切れを素手に持ちそれを投げ上げて、打附けると言ふよりも搦みつけるのである。昔話の意味の遊戯は當地で石投げと言つて居る。

(四六) 清水の觀音はまた太田の清水とも言ひ、相當民間信仰のある觀音である。

(四九) 蕪色とは其花の色と言ふ意味のことである。

(五〇) よこびりは横畫か又單にコビリとも言ひ、農民勞働時に於て午前と午後に間食する事で、卽ち小畫飯である。

(五一) 茶屋とは普通に店屋(みせや)のことで、茶屋コさ行つて來たなどと言ふのである。

(五二) ビタとは下賤の言葉で女の子の事、それが若き女を惡口する時の言葉にもなる。

(五五) こばかまは昔話に小袴となり、何れ老人の褌のことである。附木はツケギで松の薄柾のような物の一端に硫黃を塗り、火を焚附ける時これを使用す。

（五六）スガワリザツコは氷割雜魚で、冬季に川の淀などに溜つて居る魚類を氷を割つて捕へる行事で、これをスガワリすると言ふ。

（五八）雉子ぼいは雉子追ひで、民間冬の習俗として林・田畑の區別なく雪の上を數人の若者達は雉子を追ひ出して捕へる行事で、舊正・二月の頃素手で聲掛にて行ふものであるが、雉子の性質として永く追はれると遂に飛べなくなつて押へられるのである。

（五九）七人地藏は昔話に六人とある。六地藏の方は正しいかと思ふも祖母の語である。

（六〇）餅は佛事に用ゆるものは菓子餅と言ひ搗餅一升から七ツ取るコモチである。

（六一）足駄さしは普通に使用する言葉とは思はれないが、指物師といふ職人はあるから或時代に、矢張り下駄職人を足駄指と謂つたものであるか。

（六二）レレペ汁は肴の頭や骨汁である。ハツチは辭典に托鉢僧の鉢に受ける米・錢のことゝある。

（六三）おけあえもんこは昔話におかいもんことあり今訂正す。これは幼兒を宥める時にモンコは來たと言ふので、子供等は非常に恐しい何物かと思ひ恐怖したものであるが、近來になつてそれは蒙古來襲の事であると言ふものもある。テツパチ椀は鐵鉢の形に似たるより起るか、農家の飯椀の名稱で又ゴギ椀とも言つた。二戸郡淨法寺邊から出たものと聞いて居る。

（六四）小餅とは、正月の鏡餅は搗餅で一升取りであるが、これは一升から五個を取るのを普通とする。但しコモチは小餅でよいかどうか考へて見たい氣はする。

（六五）テンボは昔話に虚語とあり、普通にはテツポマケとは嘘つきの事である。

（六八）堰は溝のことで井堰の事ではない。

（六九）程島は著者の村にあり、昔は村落と村落の間にあつた平原地であつた。ふたでこは飾着として置いたが、オボギ（産衣）と言ふのは正しいか、赤坊を背負た上に引掛ける衣裳の名である。ソマとは斃馬のことで、其肉を食つて居る犬などをソマを食つてるなどと言ふのである。

（七一）キシネ搗とは手杵で米を搗く事で重に婦女子の仕事である。其臼は女ご臼とて外にくびれのあるもので餅もこれにて搗く。又別にドウス（胴臼か）とて、柄のある槌型の杵にて男の搗くのは、これを米搗と言ひ臼の周圍をめぐりながら搗く習はしである。

（七二）オネバは御粘で飯の煮えた時の汁である。

（七六）キリハンとは山立などの所持して居る合口である。

三

『昔話の國』紫波郡とは、岩手縣管轄の一郡で盛岡市の南に續き、西に南昌・東根（ひがしね）のトロイデ式火山屹立し、北上川は郡を縦貫して國道・東北本線これに沿ふのである。郡内には日詰（ひづめ）町及び古館（ふるたて）・德田（とくた）・

見前・飯岡・煙山（矢幅停車場あり）・不動・水分・志和・赤石（日詰停車場あり）・彦部・佐比内・赤澤・長岡・乙部の十四村を統括し、縣内第一の米産地に數へられる。

平安朝の初め坂上田村麻呂蝦夷を平定して、本郡に志波城を造り續いて德丹城を置いた。式内社志賀理別神社あり又郡衙を設けたるも後廢絶した。前九年の役源頼義來り陣したるにより陣ケ岡の名を留め、平泉藤原氏の一族比爪氏住するに際して、源頼朝の奥州征伐あり、比爪館を燒きて遂電したとある。吉野朝の頃には足利高氏の族家長來りて奥方の官軍に備へ、遂に郡を領して斯波氏の祖となる。斯くて天正の頃南部氏これを滅して城代を此地に置き、明治の維新に至つた。

私は矢幅停車場のある村に生れて成長したのであるが、祖母ユミは天保三年十一月の生れにて高橋家より嫁ぎ來り、夫松太郎を扶けて稼穡に勵みたるが、不幸三十五歳の時夫に死別し、それより一子菊次郎（私の父）を抱へて資産を守り、世に女丈夫の名を得たるが、五十九歳にして病歿す。法號釋尼妙貞・正定位であり、本書は此祖母の昔話である。

終りに故佐々木喜善氏の靈前に此書を捧げたい。（昭和十七年五月）

全國昔話記錄
紫波郡昔話集
定價九十錢

昭和十七年十二月十日　初版印刷
昭和十七年十二月十五日　初版發行　〔三〇〇〇部〕

承認號
協文
(出)
(アS303339)

編者　柳田國男

發行者　東京市神田區神保町一ノ一　株式會社三省堂　代表者　亀井豐治

印刷者　東京市神田區三崎町二ノ一六　東京印刷製本株式會社　代表者　荻野貴右（東東四七號）

發行所　東京市神田區神保町一ノ一　振替東京三一五五五　株式會社三省堂

配給元　大阪市西區阿波座下通二ノ六　株式會社三省堂大阪支店
東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

昔話紫波郡

柳田國男編
全國昔話記錄
佐渡島昔話集
B6判・一九四頁
定價・九〇送料・一六

佐渡島に古くから民間に傳承される昔話を輯錄せるもの。老媼が語るこれらの昔話は、日本固有の信仰、人生觀、社會觀等が貫流されてをり、民族の特殊性を語る絶好の良書。

柳田國男編
全國昔話記錄
磐城昔話集
B6判・二一二頁
定價・九〇送料・一六

福島地方の昔話を民族學の權威柳田國男指導の下に集めたもの。世界的水準にある日本民族學の研究方法に重要な資料を提供する快著として、必讀を薦めてやまない。

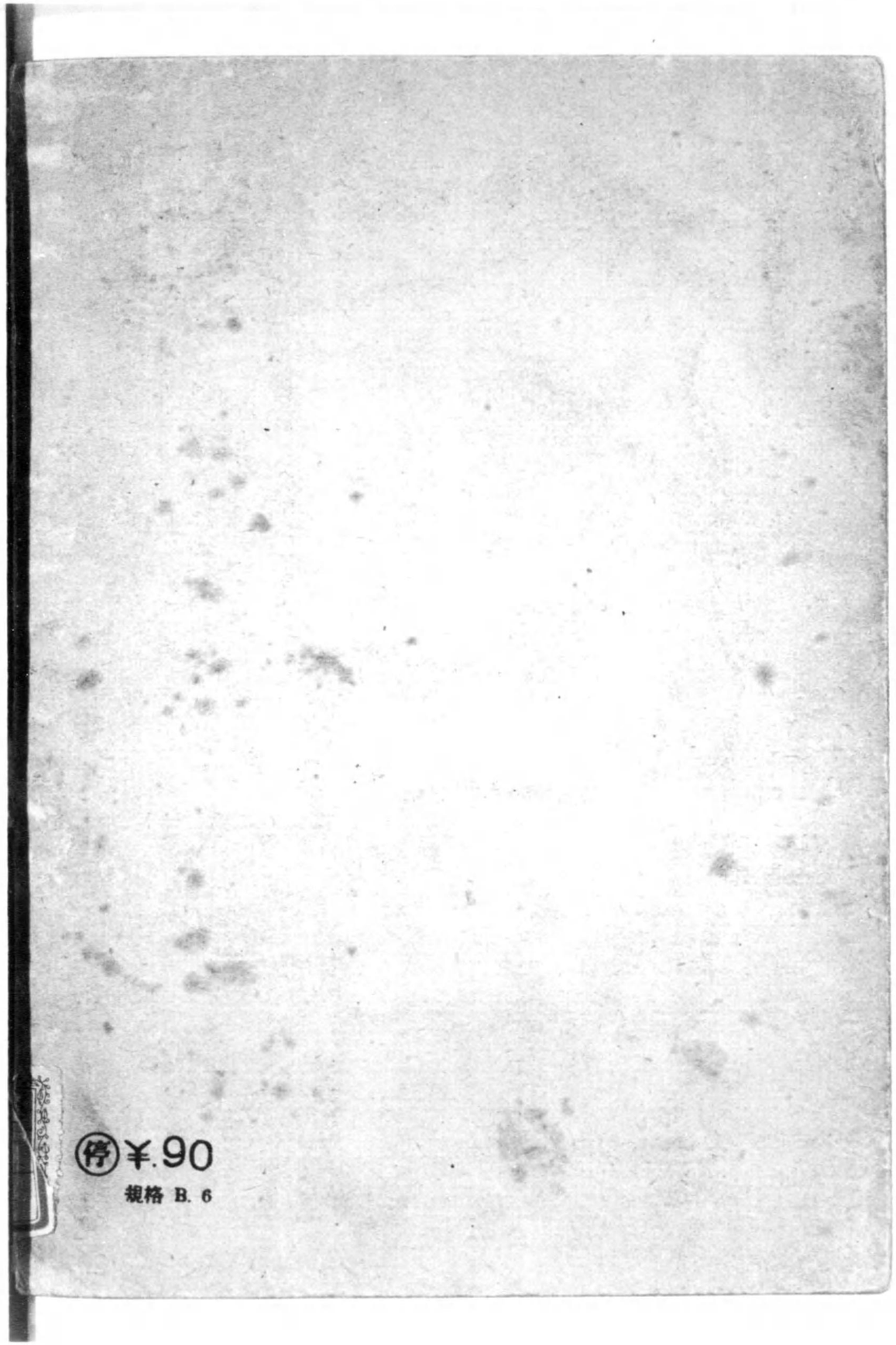
柳田國男編
全國昔話記錄
島原半島昔話集
B6判・一九四頁
定價・九〇送料・一六

島原半島の昔話もまた興味深きもので、日本文化の傳統と內容の豐潤さを語るものである。女子教育の重要な役割をも果し、我が國特有の文化財として、讀者の味讀を切望する。

柳田國男著
桃太郎の誕生
B6判・五八八頁
定價二・八〇送料・三〇

世界的水準の上にある日本民族學の第一人者たる著者の勞作の圖一と稱せられる本書は、民間傳承の昔話のなかに我が國の歷史が存在する事實を香氣ある文章で說ける貴書。

三省堂刊

948
129

終